

官能のプリマ

ヴァージョンIX

拉致

アカマル

目次

1. クレードール	1
2. ワサビ田	6
3. 拉致	33
4. 監禁	49
5. 飼育	58
6. それぞれの思い	66
7. もう一つの拉致	88
8. 終焉	97
9. 河童神社	118

1 クレードール

未明から鳴り響き、降りしきった雷雨がようやく八時を過ぎて上がった。雲を割って一條の光が射すと、山地の谷間を覆っていた乳白色の霧が瞬く間に消滅していく。間近に迫った山塊に密集した、杉の梢越しに流れ去る霧が美しい。肌寒かった風に温気が混ざった。浅間山に通じる木橋の前で歩みを止めて、歯科医は天を仰ぐ。

「また暑くなりそうだ」

つぶやいた声が、意外に大きく耳に響いた。歯科医の頬が赤く染まる。耳が遠くなっていることを過度に意識しているため、不意に耳を突いた自分の声が恥ずかしかったのだ。もうじき歯科医は七十五歳になる。耳が遠くなり、目がかすみ、身体の動きが鈍くなってしまふ句の言えない歳だ。若い者たちとの暮らしがおっくうになることもある。中学生の進太はもちろんのこと、Mと比べても二十三歳も歳が違うのだ。もう祖父の役割さえできなくなるのかもしれない。そう思った瞬間、目元が潤んだ。かっと照りつける日射しが目の前に広がり、視界が真っ白になる。頭の芯が鋭く痛んで、両足がよろけた。真っ白だった視界が赤く染まり、大きく湾曲していく。急速に落下していく感覚に抗って両手を前に突き出した途端、夏草の上に大きく尻餅を付いた。白い麻のスラックスに雨水が染み込み、冷たい感触が瞬時に尻を覆った。

「情けない姿だ」

吐き出すように言って左右を見回す。見ている者があるはずもないのに、つい辺りをうかがってしまう自分が疎ましい。右手に握った紙袋からこぼれ落ちた河童人形が一体、夏草の茂みの上で歯科医を笑っている。手の上に乗ってしまうほど小さい、素焼きの粘土に彩色したクレードールだ。河童は小さく口を開け、心持ち尻を上げて寝そべっている。濃緑の夏草の上に載ったもえぎ色の妖怪は、本当に嘲笑っているように見えた。どことなく進太の笑いに似ている。

「作者を笑うとは失礼千万な奴だ」

まんざらでもない声で言って手を伸ばし、クレードールを掴んで目の前にかざし、鋭い目でみる。思いの外できが良いのに驚き、素焼きのまま河童神社に奉納するのがもったいなくなる。河童神社は浅間山の山頂にある神社の仮称だ。もっとも、山と言っても標高八十メートルほどの小山で、神社も祠と呼んだ方が当たっていた。若いころの歯科医が醉狂

で購入した裏山にあった見捨てられた祠を、何を祭っていたのか分からぬまま河童神社にしたに過ぎない。すべては歯科医の趣味の陶芸から始まる。

「最初の河童祭りは楽しかったな」

小さくつぶやいて、歯科医は手に待った河童から目を離した。木橋からは見えない山頂の方を見上げて、大きな溜息をつく。左手を濡れた地面に当て、両足に力を入れて立ち上がった。びっしょり濡れた尻が気持ち悪かったが、十体の河童人形が入った紙袋をぶら下げる木橋を渡り、山頂の河童神社に続く山道を踏み締めた。河童の人形を山頂の祠に奉納し、見晴らしの良い場所で飲食を楽しむ河童祭りは、四年と続かなかった。一家の習俗と呼ぶには、はかなすぎた。

最初の祭りは六年前の秋に遡る。歯科医とMと進太の三人で暮らし初めて、半年が過ぎたころのことだ。その年の四月に教護院を措置免除になった進太をMが引き取り、歯科医院の敷地に建つ蔵屋敷で二人で暮らしだした。Mは自殺した一人息子のピアニストの妻だ。そのMが養子にした進太は、戸籍上の孫になった。歯科医は今も蔵屋敷から少し離れた母屋で暮らしている。いくら義父とはいっても、かつて官能を共にしたMと一緒に暮らすのは恥ずかしかった。Mもあえて蔵屋敷で同居しようとは言わなかった。三人一緒に過ごす時間は食事と、それに続く団欒に限られていた。だが、山地に来たころの進太は、妙におどおどとした態度が目立った。六ヶ月続いた教護院の暮らしはどんなものか、歯科医には想像もつかなかったが、幼い進太の心に深刻な影響を与えていたことは確かだった。食事の途中で怯えたように歯科医とMをうかがう目は、特に胸に応えた。気に添わぬ食事を、無理して食べる姿が不憫を誘った。勝手気ままにMに甘えていたという話が、まるで嘘のようだった。刑務所の生活を体験しているMは、そんな進太に過剰に反応した。進太と暮らして二週間も経たないうちに、食事は進太の気に入るだけを選んでいた。また、進太の気に染まぬことは、すべて遠ざけるようになった。小学校二年生になっていた進太は山地の学校に馴染まず、一学期のほとんどを休んだ。歯科医の目には、Mの過保護と過干渉だけが目立った。話に聞いた、実母の睦月の行動と大差がないようにさえ思えた。見かねた歯科医は学校が夏休みになって以降、一日の大半を蔵屋敷で過ごすことにした。趣味のアトリエをまた再開したのだ。今度は一心に粘土をこね、様々な格好の河童を三人で一緒に作った。何で河童だったのか今は定かでない。皿や茶碗など散々試みたあげくに犬や猫などの動物を作り、最後に進太が興味を示したものが河童のクレードールだった。歯科医が作る河童は、取り分けひょうきんに見えた。目を輝かせて粘土細工を手伝う進太を見

ていたMの、うれしそうな視線が忘れられない。

歯科医は山地に伝わる河童伝説を創作し、川で泳ぐ子供や釣り人が水底に引きずり込まれないように、河童祭りをすることを提案した。恐ろしい妖怪である河童に、愛らしい人形を供えることで凶暴な怒りを静めることができる。河童を祭った神社は、裏山の頂にあるんだと言ったのだ。

「ぜひお祭りをしようよ。歯医者さんの楽しい人形で神社を一杯にしよう。だって、僕は川で泳ぐのが好きなんだ。河童に意地悪はされたくない」

喜々とした進太の声が耳を打った。きらきらと輝く目が忘れられない。

「ねえ、M。祭りの日はごちそうをつくってよ。河童神社の前で三人で食べよう。きっと河童も喜び、川で悪さをしなくなるよ」

続けて言った進太の言葉に、目を潤ませてうなずくMの顔が、目に浮かんだ。あの時やっと、再び進太が心を開いたのだ。ごく普通の楽しい家庭生活が始まる予感が、歯科医の全身を満たしていた。

息を切らせた歯科医の目の前に、貧相な祠があった。夏草に覆われた石の祠の前に、小さな河童人形が山になって苔むしている。赤や青、黄で彩色した色は雨露で流れ、赤黒い素焼きの地肌が累々と露出している。歯科医とMと進太の三人で弁当を広げ、酒を飲んではしゃいだ最後の河童祭りから、もう四年が過ぎた。その後も毎年、未練の妄執に駆られるように訪れるのは、歯科医だけだ。若い者たちは、毎日の暮らしの忙しさに流されていった。小さな祝祭が続くはずもない。家族の気持ちも変わっていくのだ。年老いた者だけが、取り残される悲哀を感じる。だが、過ぎ去った思いは戻りはしない。空しく時が流れ去り、人は老いていくだけだった。二年前の七十歳の誕生日を契機に、歯科医は一切の診療をやめた。新しい家族が三人そろった食事も、今年からしなくなった。中学校二年生になった進太は、自分の部屋で食事をとる。Mも疲れている。色々なことがあった。歯科医の最後の趣味になるクレードール造りだけが、高度になった技術に裏付けられて、今も続いている。真っ青な夏空が小高い山の頂に広がり、遠くカナカナゼミの声が聞こえてくる。立ちつくす歯科医の頬を、涼しい風が撫でていった。今年の夏がまさに、去ろうとしているかのようだ。

ズガーン、ズガーン、ズガーン

周囲の山々にこだます鈍い銃声が、祠の後ろで轟いた。かん高いエンジン音が、銃声に

被さる。晩夏の山地の静寂を、一瞬に音の暴力が引き裂く。足に絡みつく夏草を分けて、歯科医は祠の裏側に回った。西に開けた視界の先一キロほどの所はもう、峻険な山が迫っている。そのまま見下ろしていくと、小高くなつた山懐に日射しを浴びて輝くドーム館が見える。山を背にしたドーム館の長大な駐車場が壊され、今はクレー射撃場に代わっている。弾避けのために山肌が醜く削られ、露出した赤い岩盤が陰惨な印象を伝える。射撃場が完成したのは、つい一か月前だ。昨年の夏の終わりに、アメリカから帰ってきたチハルが造成したものだ。見下ろす歯科医の眉が曇る。また銃声が響いた。獵銃を構えたチハルの姿が眼下に小さく見える。また硝煙が上がり、バイクのエンジン音が轟いた。山裾の道にグリーンのバイクが現れる。凄いスピードでドーム館を目指して上がっていく。ヘルメットも被らずに50ccのモトクロッサーを飛ばすのは、進太に違ひなかった。夏休みに入つてから毎日、進太はバイクでチハルの元に通つてゐる。きっと銃を撃たせてもらつてゐるに違ひないと、歯科医は思う。いくら交通量の少ない山地だからといって、ナンバーが交付されないモトクロス用のバイクを、免許も持たない進太に買ってやつたMの気が知れない。とにかく、チハルが帰つてきてからなくなことがない。あの無惨な殺人事件が起つたのは確か、チハルがドーム館に帰り着いてすぐのことだったと思う。まさか、小学校の六年生が、こんな平和な山地で殺されるなんて、それもMが相続したこの裏山の裾で死体が発見されたのだ。

歯科医は嫌なものでも見たように、目をしょぼつかせてからドーム館に背を向けて祠に戻つた。そのまま山頂の南端までいって、開けた谷を見下ろす。市へと下る山根川の対岸に小さな学校が見える。それぞれ一学級ずつしかない、小学校と中学校が合い向かいに同じ敷地に建つてゐた。校庭と体育館、プールは供用だが、どちらの校舎もまだ新しい鉄筋コンクリート造りの二階建てだ。裏山と向き合つてゐる校舎が中学校だが、今は夏休みで人影もない。だが、休みが終つたからといって、進太が通学するかどうかは不明だつた。また嫌なことを思い出てしまつたと後悔して、歯科医は東側に回る。東は急斜面になつて沢に落ち込んでいる。鋭い角度で見下ろした沢の手前の狭い山裾にワサビ田が見える。ワサビ田の下は農道で、その先は浅間山から続く小高い瘤山が迫つてゐる。わずかに水面を輝かせている五枚のワサビ田は、ほとんどが日の当たらない山陰に位置してゐた。清流の流れる沢の向かいは歯科医院の敷地だ。蔵屋敷の裏の梅林が見える。だが、蔵屋敷に渡るには不安定な丸太橋を歩くしかない。ワサビ田の隅に人影が見えた。作業服姿の長身が俊敏に動き、長い髪が揺れた。Mがワサビ田の雑草や枯れた葉を取り去つてゐるようだ。

熱心に動き回るMを、歯科医は不思議そうに見下ろす。たとえ山地に住んだからと言って、Mが百姓仕事に精を出すとは、今でも信じられない。Mがワサビ田を開いてからもう、五年になるのだ。

小さく首を振りながら歯科医は祠の前に戻った。どれほど長く生きたとて、ろくなことはないと思い、祠の前にしゃがみ込んで紙袋から河童人形を取り出す。窯焼きにまわすのを思いとどまったく歩留まりの品だが、その一つ一つが今日は妙に懐かしい。十体を石の上に並び終えてから、クリスタルのデカンターに入れたワインを紙袋から出した。ブルゴーニュの赤を一口含み、不味そうに飲む。真ん中に置いた寝そべったクレードールの顔にも一滴垂らした。笑っていた顔がワインを浴びて泣き出しそうになる。不意に河童の顔がピアニストの泣き顔に変わった。十八歳の時の純真な泣き顔だ。歯科医は激しく頭を左右に振った。また嫌なものを見たと思った。やはり長く生きすぎたのかもしれないと、乾いた悲しさが目の底を掠めた。

浅間山の北面の山陰にある湧水は、真夏でも手が切れるほど冷たい。その湧水からワサビ田に引き込んだ流水の中で、Mはもう一時間ほど作業を続けていた。長靴の厚いゴム底を通して足先に冷たさが染み込む。オフホワイトの長袖の作業服で覆った上半身は汗ばむくらいだが、オレンジ色のズボンを穿いた腰のあたりまで、冷たさが這い上がってくる。冷えを意識した途端に尿意が襲った。眉間に寄せて足元を見る。ワサビの鮮やかな緑の葉陰にのぞく澄明な水脈が、土で汚れた長靴を絶え間なく洗っていた。密生したワサビの枯れかかった葉を取り除く作業は、もう田を一枚残すだけだった。田といつても四畳半ほどの広さしかない。Mは靴下を穿かなかったことを悔やんだが、もう後の祭りだ。視線を巡らせて沢に渡した丸木橋の先の蔵屋敷を見つめた。尿意は我慢できそうにない。戻ってトイレを使ってから作業を続けるしかないと思った。決断した瞬間、カナカナゼミの声に混じってヴァイオリンの調べが聞こえてきた。畦道に置いたラジカセから響く曲は、バッハの無伴奏ソナタだった。Mの好きな曲だ。聞き逃したくはない。たった一枚の田を残して作業を中断するのもしゃくにさわる。反射的に辺りを見回す。背後は山が迫り、右手は沢だ。唯一開けている東側の正面は、三枚のワサビ田が段になって斜面を下っている。三メートルほどの勾配を下った先が農道だ。幅二メートルの未舗装の道が、急カーブを描いて浅間山に続く瘤山の間に消えている。人影はなかった。

Mは山側に向けて数歩を歩き、一段低くなった場所に進んだ。再び農道の方を見下ろしてからハンノキの林と向かい合う。腰に吊った黒いウエストバックを外して肩に掛け、素早く作業ズボンを膝まで降ろす。ショーツは穿いていない。濃い緑に染まる林とワサビ田をバックに、白い尻が剥き出しになった。冷たく湿った風が股間を渡り、漆黒の陰毛が揺れた。とても五十二歳とは思えない、きめ細かい肌だ。量感のある尻を突き出すようにして、ワサビ田にしゃがんだ。股間をワサビの葉がなぶる。尻の割れ目のすぐ下を水の流れ気配がした。妙にくすぐったい気分だ。ヴァイオリン・ソナタ第一番のパルテータを耳にしたとき、Mは放尿した。遠く聞こえるセミの声とヴァイオリンの調べ、水面で揺れるせせらぎと葉陰を渡る風音、交響する音の波を股間で上がる水音がかき乱す。思わずMの頬が赤く染まった。股間が熱くなり、長々と続く放尿に切なさが募った。

「バッハがお好きですか」

突然声が響いた。大きな声だが低い声だ。Mの背筋を衝撃が走り抜ける。視界が真っ白になり、続いて暗転した。言葉の意味を越えて、音質が全身を覆った。交響する音を亂すことなく発せられたソリストの声は、艶やかなバリトンだった。全身がかっと燃え上がり、素肌が赤くなった。まるで条件反射のように剥き出しの股間が戦く。性を意識した瞬間、尿も止まった。慌てて下げる尻を流水が洗っていったが、冷たさも気にならない。耳の底に残ったバリトンを夢中で反芻した。時間が消え失せ、突然二十五年前に逆戻りしたような、懐かしい官能が残った。この同じ山地の築三百年の屋敷で、同じ音質のバリトンを操る男が、二十七歳のMの肉体に残していった官能の炎。その炎がずっとMの生き方を律してきたのだ。だが、男がかき立てた炎はすべて、男の妄想から生まれ育ったに過ぎなかつた。現在のMは五十二歳の女だ。もはや過去の妄想に捕らわれることはない。一切をこの目で見据えることができる。Mはしゃがんだままゆっくり向きを変え、なに食わぬ顔で声の主を見下ろす。農道からの視角では、Mの上半身しか見えないはずだった。

「お仕事中に、驚かせてすみません。こんな山の中でバッハが聞こえたので、うれしくなって声を掛けてしまいました」

Mを見上げた男が恐縮した声を出した。Mの表情がよっぽど険しく見えたようだ。良く澄んだ、耳に通る心地よいバリトンだった。首に下げる黒塗りのライカM6がMをぎょっとさせたが、もちろん男は二十五年前のカメラマンではない。ジーンズの上に紺のサマーブレザーを着ている。長身だががっしりした体つきで、端正な顔が幼く見えた。歳は四十代の中頃らしく、当時の築三百年の屋敷の男と大差なかった。だがMは、とうにその年齢を過ぎていた。先ほど感じた官能のときめきが愚かしくなる。つい、返事をしそびれてしまった。

「まだ怒ってるんですか。ごめんなさい。でも、美しい後ろ姿が本当にバッハに似合っていましたよ」

歯の浮くような台詞にMの口元が緩む。裸の尻を洗っていく水が急に冷たく感じられた。どう見ても滑稽な姿だ。

「振り向いたらお婆さんなので、がっかりしたってところかしら。私は怒っていないわ。でも、この道は行き止まりよ。丸木橋の先は私有地だから、Uターンしてお帰りなさい」「いえ、お婆さんなんてとんでもない。十分お若くて美しいですよ。それに、ちょっと道を尋ねたいんです。お手間は取らせません」

笑顔を見て安心したように、男は世慣れた調子で話を続けた。いささか強引な性格をセ

クシーなバリトンがよく補っている。そのことを十分に知っているらしい自信が、妙にMの気を引いた。

「いいわ、山の中で迷ったのなら助けるわよ。でも、私が声を掛けるまで、ちょっとの間後ろを向いていてちょうだい」

返事を聞いた男は、訝しそうに小首を傾けたが、小さくうなずいてから広い背中を見せた。Mは急いでズボンを引き上げながら立ち上がる。緊張してしゃがんでいたため両足が痺れてしまい、ズボンがうまく尻を通らない。濡れた肌が驚くほど手に冷たかった。陰毛を伝った水滴がオレンジ色の生地に醜い染みを付ける。

「いいわよ。どちらに行きたいの」

ワサビ田の中で膝を屈伸させてから男に呼び掛けた。振り返った男がMを見つめて、一瞬口ごもってしまう。見上げる視線が感動で輝いていた。男の反応は、山地に住んでからの七年間で、何度もMが経験してきたものだ。身長百七十センチメートルのMのプロポーションは今も完璧だった。化粧をしない面差しも、自然の中ではことさら美しく引き立ててくれる。都会から来た男は、決まって同じような反応をするのだ。今朝の男も例外ではない。しかし、その仕草は初々しいくらい無防備だった。Mはたまらなくバリトンが聞きたくなる。

「さあ、何が聞きたいの」

促された男は右手の蔵屋敷に目をやってから、Mに視線を戻した。

「ピアニストの家を訪ねたいんですが、どの辺りでしょうか」

今度はMが目を見張って口ごもった。突然懐かしい名を告げたバリトンが、Mの耳の底で渦巻く。晩夏の光を浴びた風景が揺らめき立つように見えた。自然に視線が蔵屋敷の方を向く。

「やっぱりここなんですね」

念を押す男の声に黙ったままうなずく。

「僕もちょっと上がらせてください」

男の言う意味が分からず黙っているMの返事を待たずに、男は農道からワサビ田によじ上り、沢沿いの畦を足早に上って来た。仕方なくMもワサビ田の流水を長靴でかき分けて近寄っていく。男は一番上のワサビ田の端にたたずみ、取水口の先の水貯まりを見下ろしている。そこは流れてきた湧水を貯める、畳一畳ほどの広さの池になっている。深さは五十センチメートルほどしかないが、青く澄みきった水が底に敷き詰めた灰色の花崗岩の上

を静かに流れ、狭まった取水口からワサビ田に流れ落ちている。

「ここで少女が死んでいたんですね。もうじき一年になる」

男の声が水貯まりに落ちた。悲しそうなバリトンだったが清冽な響きがした。Mは反射的に男の横顔を見た。口元を引き締めた厳しい表情をしている。確かに、一年前の夏の終わりに、この水貯まりの底に少女が沈んでいた。流れの下で揺らめいていた小さな死体が目に浮かぶようだ。第一発見者になったMには忘れようもない事実だった。

「あなたは誰なの」

問い合わせたMの声が微かに震えた。

「僕ですか。僕はピアニストと医大で同級生だった名淵と言います。もっとも、三浪して入った医大も二年で転んで、法科に転学してしまいました。ピアニストとは、たった二年の付き合いでしたが仲は良かったんです。僕を兄のように慕ってくれました」

目を瞬かせて聞き入るMにお構いなく、男は首から下げたライカで水貯まりや周囲の風景を何枚も撮った。挙げ句の果てにMの正面に立ち、じっと目をのぞき込んでから目を伏せた。

「あなたはMさんでしょう。獄中のピアニストから結婚を知らせる葉書をもらいましたよ。想像していたとおりの人で安心しました」

断定する口調で言葉を投げた。男は何度もMを驚かせる。名淵がもらったという葉書はMに届いた遺書と同様、自殺したピアニストの絶筆なのだ。ぜひ、内容が知りたいとMは念じた。

「その葉書には、何と書かれていたんですか」

「最高の人と結婚をした。その名はM。Mをよろしく頼みます」

そらんじたバリトンがMを悲しみの底に叩き伏せた。兄のように慕われたという名淵に出したピアニストの葉書は、余りにも悲惨だ。死を決したピアニストは、あろう事か残されるMを名淵に託したのだ。Mの喉元に嗚咽が込み上ってきた。かろうじて踏み留まり、じっと名淵の目を見つめた。名淵もMの視線を正面から受け止める。

「ピアニストの選んだ女性に間違いはないと思っていました。お会いしてみて僕の心証が証明できた。ピアニストは馬鹿な奴です。でも、結婚してくれて本当にありがとう。僕からもお礼を言います」

一息に言った名淵の目が潤んでいた。ピアニストの目に似て、まっすぐ前だけを見つめているような目だった。

「やみくもに礼を言われても困ります。家に寄って詳しい事情を聞かせてください」

掠れた声で訴えると、名淵は苦しそうに首を振った。

「今日はやめておきます。しばらくこの市にいますから、きっとまたお会いできますよ」

一方的に応えた名淵は、返事を待たずにワサビ田を下っていった。Mの足は凍り付いたように動かない。じっと後ろ姿を目で追ったが、すぐ瘤山の陰に入ってしまった。大きな驚きと小さな疑問がMに残った。疑問は、なぜ名淵が真っ先に少女の死体について尋ねたかということだった。Mは迂闊にも名淵の身分を聞き忘れたことに思い当たった。身分どころか名も住所も連絡先も聞いていない。年甲斐もなく動転してしまったことが恥ずかしくなる。きっと、警察か報道関係者に違いないと思ったが、名淵の持つ雰囲気は微妙に違っていた。きっとまた会えるという言葉を信じるしかなかった。ぼう然として視線を落とすと、水貯まりの石畳の底で黒い水藻が揺れていた。

Mが水底に沈む少女の死体を発見したのは、午前七時を過ぎたころだった。東の山の稜線から顔を出した朝日が、ちょうど水貯まりの辺りを照らし出していた。終日日陰になる取水口に日が射し込む、一年に数日とない稀有な季節だった。見慣れぬ風景に誘われたように、Mは真っ先に一番上にある田を目指して畦道を上った。もっとも流水を絶やすことができないワサビの栽培では、真っ先に取水口の様子を見るのが日課ではあった。だがその朝、きらきらと美しく朝日を反射する水面がMを誘っていたことも事実だった。

流れにつれて乱反射する光の粒に細めた目に、水底で揺らめく漆黒の水藻が飛び込んできた。目を凝らして水貯まりの底をのぞき込むと、水藻と見間違った長い髪が千々に乱れて光の中で揺らめいている。はっとした瞬間、眠っているような童女の表情が網膜に像を結んだ。まさかと思ってあごを引くと、広々とした視野に少女の全身が映った。水底の少女は全裸だった。成熟する前の青々とした果実を思わせる固く引き締まった裸身が、光の微粒子を散りばめている。まるで異国の辺境に住む少女が祝祭の日に装っているようだ。その豪奢な衣装に見とれるように、Mは言葉を失って立ちすくんだ。驚きが失せると、恐怖もなかった。ただ、ひたすら美しかった。見つめるうちに日が移ろい、輝ける黄金の服を脱がせた。豪奢な気分を悲惨な現実が打ち碎くのに長い時間は要らなかった。青々と透き通って揺れる水面の底に白々とした死体があった。ぎこちなく硬直した裸身が悲しい。裸の胸の上に乗せてある大きな丸石が、まるで墓石であるように陰惨に見えた。Mの目から涙がこぼれた。静寂が極まる。

突然、自転車のブレーキ音がかん高く響き渡り、犬の吠え声が被さる。一気に静けさを破った音の奔流の中に、低い女の声が落ちた。

「Mが殺ったのかい」

ぎょっとして声のした方を見ると、水貯まりの向こうから小柄な女が歩み寄って来た。ハンノキ林の濃緑を背にして、オリーブドライブの戦闘服が似合いすぎるくらいだ。目深に被った黒いキャップの下で白い歯が笑っている。チハルだった。一週間前にアメリカから帰り、ドーム館で暮らし始めたばかりのチハルが、こんな早朝に山中を歩いて現れるとは思わなかった。Mはとっさに答えが出ない。

「陰毛が生え始めたばかりの子供じゃないか。酷いことをする女だ」

再び低い声で言ったチハルが、足元の小石を蹴った。完全防水のジャングルブーツの爪先で蹴られた石が水貯まりに落ちた。幾重にもなって広がる波紋が少女の死体を無慈悲に震わす。

「冗談はよしてよ。私が殺すはずがない」

掠れた声で答えてから、腹の底から怒りが込み上げてきた。非常識な問いに非常識な答えだった。嫌な隣人ができると思い、暗澹とした気分になる。水貯まりの底に沈む死体さえうつとうしい。何で私のワサビ田にいるのかと叱責したくなかった。途端にやましさが込み上げ、頬が赤くなる。怒りの元凶のチハルを真っ直ぐ見据えて大声を出そうとした。途端に犬の吠え声が渦巻き、足元に白と黒の獣が飛び付いてきた。背筋を恐怖が走る。全身に鳥肌が立ち、顔がこわばる。

「ダメッ、クロマル。Mから離れるんだ。ダメッ」

進太の叱声が響くと、尻尾を振ってMにじゃれついていた中型犬が瞬時に飛び退く。クロマルはセッターとシェルターの雑種の牡で五歳になる。山地に引き取られたばかりで、妙に沈み込んでいた進太が初めてMにねだって飼うことになった犬だった。地元の愛犬家が掛け合わせた子犬は、自慢したとおり性格がよく、巻き毛の長毛も美しい。進太に良くなつき、命令にも従う。最高の主従だと思い、Mも目を細めたくなるくらいだった。しかし、Mの犬嫌いは直らなかった。もう、生まれつき犬が怖いとしか言いようがない。クロマルに近寄られただけで、身体が固くなるのだ。そんなMをクロマルは見逃さない、親愛を込めてMを構うのがクロマルの娛樂になってしまったようだ。Mにだけ吠え掛かる。それも尻尾を振りながらなのだから、傍らで見ている者には滑稽だった。もちろんMはそれどころではない。

「ねえ、M、もうじき夏休みが終わるよ。早くバイクを買ってよ。約束だろう。バイクがないと、僕は虐めに耐えられない。クロマルがいてバイクがあれば勇気がわく、二学期から学校に行けるよ」

Mの背後で進太が甘える声で言った。変声期に特有な掠れた声だ。水貯まりに沈む少女の死体を目の前にしたMには不謹慎としか聞こえない。腹立たしさが募ってきた。黙ったまま進太の目を見る。

「やっぱりMは忘れてたんだ。でも、いいよ。チハルが一緒に市に行ってくれるってさ。昨日ドーム館へ遊びに行って約束したんだ。バイク屋で気に入った車があったら買っていいでしょう。チハルがお金を立て替えてくれるし、バイクを運べる車もあるんだ。ねえ、ベンツだよ。ベンツのジープなんだ。凄いだろう」

にらみ付けるMの気持ちにお構いなく、進太が陽気な声で言ってチハルを見た。チハルが大きくうなずき返す。

「アメリカから注文しておいた車が昨日納車になった。メルセデスのゲレンデヴァーゲンG320のAMG仕様だ。もちろんバイクも積める。初乗りついでに私が進太を市に連れていく。百姓仕事しか興味のないMに文句はないだろう」

得意げに言ったチハルの声でMの怒りがはじけた。

「何を言っているの。あなたたちに哀れみはないの。死者を前にして話すことじゃないわ」

怒声が谷間に響き渡った。進太がぎょっとして水貯まりをのぞき込む。

「あっ、久美子だ。本当に死んでる。きっと首を絞められたんだよ。ほら、癌になってる」

見慣れたものを観察するように、水面をのぞき込んだ進太が感動した声で言った。反射的に死体を見下ろすと、確かに細い首の回りに青黒く鬱血した痕が目に入った。同時に脳裏を衝撃が満たした。目を閉じた穏やかな死に顔には、確かに見覚えがあった。

いつもは大きく見開かれ、好奇心に溢れていた目の持ち主は、クーちゃんと呼ばれる知恵遅れの少女だった。進太と一歳年が違う小学校六年生の久美子は、三年ほど前までは蔵敷にも良く遊びに来ていた。当時から早熟で、勉強の良くできた進太には友人は極めて少なかった。自分で創造した世界でクロマルと遊ぶ進太にとって、唯一の他者が知恵遅れの久美子だった。久美子にも友達がいなかったようだ。進太に命じられるままに、久美子

はごっこ遊びの役割を懸命に演じていた。それは赤毛のアンであったり、家なき娘であつたりした。Mの与えた世界名作全集を疑いもなく読み、進太がその世界に浸っていたころの話だ。だが、幼いほど素直で邪氣のなかった空想の世界は二年と続かなかった。いつしか進太の創造した世界におぼろげな性が入り込んでしまったのだ。Mには突然のことのように思われてならない。それは進太が小学校四年生の晩秋のことだった。日溜まりになつた蔵屋敷の裏庭へやってきた進太とクーちゃんが、いつものように遊び始めた。Mは丸木橋の前に止めたスバルサンバーの荷台から二人を見ていた。五メートルと離れていない。心地よい秋の日射しの中に現れた子供たちは郷愁を誘った。声を掛けそびれたMは、軽四輪トラックの荷台に隠れるようにして二人の遊びに見入つた。学校遊びでもあるのだろうか、正座したクーちゃんの前に進太が立ち、右手に細い篠竹を持って蔵屋敷の白壁をしきりに指し示している。クーちゃんがうなずき、進太が首を振つた。声までは聞こえないが、風に乗つて二人の笑い声が流れてくる。微笑ましい光景にMの口元が緩んだ。その瞬間、進太が向きを変えてクーちゃんの横に立つた。クーちゃんは正座したまま頭を下げ、尻を掲げてひざまずいた。素早く進太が赤いスカートを捲り上げ、両手で白いパンツを膝まで脱がした。明るすぎる日射しを浴びた小さな白い尻がMの目を打つた。思わず息を飲み込んだ途端に、進太が篠竹の先を尻の割れ目の中心に差し込んだ。ヒッというクーちゃんの悲鳴に進太の笑い声が被さつた。Mの全身がこわばる。目と耳から入つた刺激がMの下半身を貫く。口元の笑いが凍り付き、痛みの記憶が肛門を襲つた。

「進太っ、クーちゃんに何をするの」

怒りに満ちた叫びが響き渡つた。 トラックの荷台で立ち上がつたMを、二人の子供が驚愕した目で見た。進太の目に浮かんだ驚愕の色が憎しみに変わつたとき、二人の逃げ出す足音が聞こえた。青い半ズボンと白シャツを着た進太の後ろ姿が走り、赤いワンピースのクーちゃんが頼りない足取りで続く。目で追うMの胸に深い悔いが残つた。ときの叱声が幼い性を傷付けたことを実感した。だが取り返しはつかなかつた。その日以来、クーちゃんは蔵屋敷に来ることはなかつた。進太の創造するごっこ遊びもその日で終わつた。

「へえ、進太はこの死体と知り合いなんだ。せっかく女の子が素っ裸で死んでくれたんだから、きれいな裸身を目に焼き付けておくんだね。いい供養になるよ」

チハルの非常識な言葉が耳を打つた。

「うん、そうするよ」

声に出した進太が大きくうなづく。Mは開いた口が塞がらない。久美子の死体を前にしたチハルと進太には、いさきかの感傷も感じられない。乾燥しきった冷気がMの全身を覆った。死者はただ、暮らしの中で戸惑っているように見える。後始末はMの仕事だった。その一点で死者はMにも見放された。

傷害致死罪で補導され、教護院に措置された前歴を持つ進太を、Mは表面に出したくなかった。進太がいない限り、チハルが出てくるのも辻褄が合わない。結局Mがただ一人の発見者として、事件を警察に通報することになってしまった。Mにも前科があるが、かえって警察の対応には慣れていると言えた。こうして事件の発端から些細な嘘が生まれ、Mと久美子の死体がワサビ田に残ることになった。

事件の後三か月ほどは、いつも静かな山地も捜査関係者や報道関係者の往来で騒がしかった。しかし、犯人が捕まるどころか見当さえもつかない有様だった。事件のあった日の前後は、市の高校のラグビー部が全国大会に向けた合宿を、蔵屋敷の上流にあるキャンプ場で行っていた。すでに卒業したOBや父母が終日行き来して人の出入りが激しかったことも捜査に災いした。殺害された少女が知恵遅れだったため、山地以外に住む変質者の犯行も疑われたのだ。一年が経とうとする今も、目立たないながら捜査は続けられているようだ。変質者の線を除いて、今もって疑われているのは第一発見者のMと、非行の前歴がある進太、そして久美子の父の三人だった。久美子は学校の西側に建つ、雇用促進住宅に住む父子家庭の一人娘だった。遺体の胸に乗せられた石が、肉親による供養を連想させるという記事が週刊誌に出ていた。一人娘を亡くした久美子の父も居たたまれなくなったのだろう。半年ほどして、身辺が落ち着くころに山地を出て、近くの市に転出てしまったらしかった。

すべてが無理に思い出してみなければならないほど、遠くなってしまった事件だった。忙しい日々の暮らしが殺人事件さえ風化させる。名淵に告げられなければMも、新聞の記事で読むまで、クーちゃんの一周年のことを思い出さなかつたはずだった。

Mがワサビ田の草取りを終えて蔵屋敷に帰ってきたときは、午前十一時を回っていた。名淵に会ったことが気に掛かり、最後の一枚の田に思いの外時間をとられてしまった。いつになく疲労も濃い。作業着のままソファーに腰を下ろした。まだ濡れているズボンの尻が不快感を募らせる。顔に浮いた汗を両手で拭い、ぼんやりと北向きの窓を見上げた。開

け放たれた窓越しに、大きく枝葉を広げたケヤキが見える。濃緑の葉はそよとも動かず、部屋にこもった熱気が全身を包み込む。

「まずはシャワーね、クーラーも入れよう」

声に出してつぶやいてみたが腰が上がらない。乱雑な部屋の様子が妙に気に掛かる。蔵屋敷は、たかが二十畳ほどのワンルームだ。北隅にあるバスルームとトイレは歯科医がアトリエ用に設置したものだが、東向きに作ったキッチンはMと進太が住み始めてから設備した。独り暮らしの狭いキッチンに閉口していたMは、一度に大量の品が置けるように大型のキッチンセットを選んだ。そのセットの上も、周りの床もレジ袋に入れたままの食品や日用品で雑然としている。テキスタイルデザイナーをしている祐子が市街地のスーパーで買って、定期的に届けてくれる品だ。日常品の買い置きが嫌いなMにはありがたいことだが、なにぶん量が多い。かといって文句の言えないことがつらい。祐子は三人暮らしの最低量だと主張して憚らない。使い切れないMの方を、原始的だと言って責めるのだ。部屋の中央に置いた卓球台ほどもあるチークのテーブルの上も、読みかけの本や進太が食べ残した朝食の食器で溢れていた。目を細めて見ると、テーブルの表面に綿埃が浮いているのが見えた。この巨大なテーブルも、歯科医を含めた家族三人が揃って、それぞれ好みにあった作業ができるように設置したものだ。今でもアイデアは最高だと思うが、管理する者がいなかったのが致命的なミスだった。だが、Mが掃除をするのは毎週月曜日と決めてある。独りで暮らしだしてからずっと続けてきた三十年来の習慣だ。たまさか家族ができ、一緒に暮らすことになったからといって変えるつもりはない。もちろん当番制にするなら話は別だ。だが、個々の責任と人格が確立していない家族にあっては、共同生活は到底無理な話だった。もちろん祐子に掃除まで頼むわけにはいかなかった。

Mは溜息をついて立ち上がった。その場で無造作に作業服を脱ぎ捨てる。もう一度玄関前の控えの間に出て階段を上れば、蔵屋敷を改造して造った二階の寝室に行けた。北向きにM、東向きに進太のそれぞれ八畳の寝室がある。だが、その場で済ますことができることは済ますのがMのやり方だ。わざわざ二階の寝室までバスローブを取りに行く必要はないと思う。構わず作業ズボンを脱ぎ捨てて全裸になった。汗の匂いが鼻を突く。足元に散らばった衣服を拾おうと腰を屈めると、入口の横に置いた姿見に映った裸身が見えた。プロポーションがきれいな豊かな裸身だった。思わず横を向いて鏡に見入る。こんもり盛り上がった尻が少し下がったような気がする。乳房もやはり、と思ってみてから首を振った。とにかくもう五十二歳なのだ。自分で想像していたより美しい裸身ならそれでよい。小さ

くうなずいた拍子に股間を見ると、漆黒の陰毛の中で光るものがあった。右手で搔き分けると、白い毛が一本混じっている。股間を開き、尻を突き出して抜こうとしたが、視力が落ちてよく摘めない。焦ったあげく床に尻を落とし、胡座をかいて慎重に抜き取る。指先に残った銀色のちぢれ毛を見ると無性に笑いが込み上げてきた。滑稽な姿が情けなくなる。だが、これが当面のプライドを守ることなら、何回でも続けようと思いつつ。決して老いを嫌悪するわけではない。自分のイメージした目標値を守りきることが、老いを受容することだ。Mはクーラーのスイッチを入れ、バスルームに向かった。ドアを閉めてから、脱ぎ捨てた作業服を持ってくるのを忘れたことを思い出した。蔵屋敷を乱雑にする元凶は自分かもしれない、確かな疑いが浮かんだ。

熱めのシャワーを浴び終わり、冷水に代えた途端にインターホンのベルが鳴った。土曜日なので祐子が来たのかと思ったが、ベルは鳴り続いている。玄関の錠は開いているので祐子なら上がってくる。ベルの音もどことなく遠慮がちに聞こえる。だが、家人が出て来るまで続けるという、断固とした意志が込められているかのように断続して鳴っている。Mは仕方なくシャワーを止め、洗濯場と兼用の洗面室に出てバスタオルを捲した。だが、どの引き戸を開けても見付からない。たった一枚残ったバスタオルが、水を張った全自動洗濯機の中に沈んでいた。洗濯をサボっているMへの當てつけに進太がやったに違いない。怒りが込み上げたが、子供に洗濯さえ命じてこなかった仕付けを恥じるしかない。自分が嫌いな仕事を進太にさせるわけにはいかないと、確信してきた愚かしさを呪うしかなかった。仕方なく洗面用のタオルで長い髪を拭きながらリビングに出て、インターホンの受話器を取った。

「お仕事中の所を申し訳ありません。小学校で進太ちゃんの担任をしていました臼田です。今年から中学校で担任をしている秋山先生と一緒にきました。二学期からのことでMさんにご相談したいことがあるんですが」

抑制したソプラノが耳に飛び込んできた。臼田清美の姿が脳裏に浮かぶ。進太が小学校四年生の時に、新卒で担任になった教師だった。まだ少女のように新鮮で熱心だった姿が、Mに好感を残している。級友に同化できない進太の個性も認めてくれ、何かと庇ってくれた思い出もある。一方の秋山とは五月の二者面談で一度会ったきりだ。取り立てた印象のない二十代後半の青年だ。山地勤務になったことを悔いでいるような雰囲気が感じられて不快だった。しかし、会わないわけにはいかない。帰す理由もなかった。入ってくるように伝えようとして、すんでの所で口をつぐむ。まさか、素っ裸で会うわけにはいかない。

足元に脱ぎ捨てた作業服を見たが、再び着る気にはなれない。惨めな気持ちで進太の担任に会いたくなかった。

「すみませんが、二分間ほど庭木をご覧になっていてください。すぐお迎えにいきます」

一方的に答えて受話器を置いた。一呼吸おいてから小さなタオルで身体を拭う。二階には控えの間を通らなければ行けない。玄関のガラス張りの自動ドアから、控えの間は丸見えだ。Mは慎重に間合いを取り、二人が庭へ歩き始めた頃合いを見計らってリビングを出た。素早く階段に向かう曲がり鼻で玄関を見る。大きなガラスドア越しに臼田の後ろ姿と、玄関をのぞき込んでいる秋山が見えた。秋山の目が大きく見開かれる。Mの頬が赤く染まる。急いで急な階段を駆け上った。左右に揺れる剥き出しの尻を見つめられているようで、全身が火照った。寝室に飛び込み、起き抜けのままになっているベッドからタオルケットを取って全身を拭く。髪を拭きながらクローゼットを開け、紺色のワンピースを出した。麻と絹を使って織り上げた、祐子手製の布地で造ったノースリーブだ。素早く頭からワンピースを被り、両手を背中に回してファスナーを上げた。まだ十分柔軟な身体がうれしくなる。ドレッサーの前に立ってゲランの口紅を引いた。青白かった顔が一瞬に引き立つ。もうこれで五分は過ぎてしまった。

所在なげに庭にいた二人の教師を藏屋敷に招じ入れて、巨大なテーブルを挟んで向かい合って座った。臼田と秋山は並んで座っている、二人の間は狭すぎるほどだ。Mの口元に微笑みが浮かぶ。二人は学校を離れても寄り添っているに違いないと思った。臼田は二十八歳のはずだ。女が一番美しくきらめき、まぶしく見える年頃だった。大きな黒目がちの目がチャーミングだ。秋山は臼田よりいくらか年下のようで、どことなく頼りない感じだ。男と女の関係でも、臼田清美が主導権を握っているのだろう。二人ともぎこちなくもじもじしている。秋山が口を切れないでいるらしい。Mは黙って微笑んでいる。話を促そうとはしない。臼田の方がしびれを切らした。

「今朝は、進太ちゃんの不登校を何とかしようとご相談に上がったんです。私は小学校時代の担任として気掛かりなものですから、秋山先生に頼んで同行させていただきました。何と言っても山地の学校は、小学一年生からの九年間をずっと一つのクラスで過ごすですから、みんな家族のようなものです。さあ、秋山先生、どうぞご説明ください」

臼田に促された秋山の頬が赤くなった。Mの裸身を見たことを意識しているのかも知れない。Mは秋山の顔を見つめた。

「困ったなあ、清美さんが説明してくれた方がいいのに、困ったなあ」

今度は、清美さんと呼ばれた白田の顔が赤くなった。秋山は女の扱いがうまい。難しい年頃を相手にする中学教師には向いていそうになかった。

「ダメですよ。先生が進太ちゃんの担任なんだから、よくご説明してください」

照れくさそうなソプラノで秋山を促した。背筋を正した秋山が息を吸ってから話し始める。

「進太君は勉強は問題ないんですよ。問題ないどころか、先月行った全市共通の実力テストでは一番です。もちろん山地だけじゃない。約二千人の中学生の中で全科目が一番です。いや、保健は除きます。性教育に関する問題が白紙回答だったんですよ。でも、そんなこと問題じゃない。凄い、本当に凄い。進太君は山地にはもったいなくらいですよ。まず、学力のことによく知りたいんです。Mさんは保護者としてどう思われますか」

興奮した口調で早口に言った秋山が、急にMに問い合わせた。問われたMが面食らう。白田が進太ちゃんで、秋山が進太君なのも気に掛かった。等身大の進太を理解している者はいない。それはMも例外でない。性教育の問題に白紙で答えた進太の心情を考えると、また悔いが募る。幼い性を叱責した記憶が悲しい。

「勉強ができるのは私も知っています。でも、学校でみんなと協調できないことも知っている。進太は小学校二年生の時に山地に転校してきましたが、それからの六年間は登校しない日の方が多いと思いますよ。いくら勉強ができるても、保護者としては心配です。虐められていることもあります」

Mは秋山を見ずに答えた。白田の顔が曇る。五年間で虐めを解決できなかった自分を悔いているようだ。膝を進めるようにして口を開く。

「確かに小学校のころから虐めはありました。でも、決して暴力行為ではありません。それは私が保証します。すべての虐めは進太ちゃんを仲間外れにするとか、無視するとか、情報を伝えないとといった嫌がらせです。よく言われているハラスメントなんですが、大人でもこれが一番こたえます。進太ちゃんは勉強ができるから、みんなが一目置くんです。ですから虐めも陰湿になる。それが七年間続いているんです。進太ちゃんじゃなければ耐えられませんよ。ずっと孤立して学校生活を送るなんて残酷過ぎます。それが、進太ちゃん本人はこたえた様子がない。結構明るく陽気だし、私の前では甘えん坊のやんちゃ小僧なんですから分からないものです。確か、ご家庭でも同じでしたね」

白田の話は、死んだ子の歳を数えるようなものだとMは思う。確かに進太は家ではよく喋り、はしゃぎ回り、Mや歯科医に甘える。クロマルを飼い始めたときから進太は心を開

いたように見えた。それから少しも変わりはしない。しかし、小学校四年生のときの性の芽生えを契機に、見えないところで一切が変わった。幼い性を叱責したMに寄せた憎しみの色はその時限りのものだったが、Mと進太の間に見えない壁ができた。決して壊すことなく、踏み越えることもできぬ幻の壁だ。きっと官能を共有することでしか交流を再開できない予感がある。だがMは進太の官能の手段にも目的にもなるわけにいかない。たとえ進太が求めたとしても、官能の極まりを与えることはできない。求められれば応じるのがMの生き方だが、Mは神ではない。自らの人格と責任を放棄した官能の悲劇は十分すぎるほど見えてきた。後は進太が巣立つしかないのだ。

「確かに四年生頃までは、仲のよい女の子がいましたよね。一年下で、よく進太ちゃんについていた。不思議ですね、まるで振り捨てるように付き合わなくなくなりました。あれ以後進太ちゃんは孤高の人になってしまった」

白田が嘆くように言葉を落としてから、慌てて口をつぐんだ。秋山が無神経に反応する。「ああ、去年殺された六年生の少女ね。市でも高校のラグビー部が疑われて大変な騒ぎでしたよ。進太君も幼いころに補導歴があったから大変だったでしょう」

言葉の後に冷たい沈黙が落ちた。動搖した秋山が口を開き掛けて視線を泳がす。Mの脳裏に確信が浮かんだ。じっと秋山の目を見つめて口を開く。

「学校では、進太を犯人扱いして虐めているんでしょう。違いますか？」

思いの外鋭い口調になった。秋山の両肩がすくみ、全身が緊張する。逃れられないと思ったのか、小さくうなずいてから首を左右に振った。

「陰に隠れて噂する者は確かにいます。でも、あくまでも進太君がいないときですよ」

「進太が気付かないわけがないでしょう。まるで登校するなど言っているようなものです。保護者としても行かせたくない」

断言すると、秋山の顔が蒼白になった。事件にまつわる卑猥な噂を、教え子の進太に絡めて、男同士で楽しむ姿がMには見えるようだ。性が介入したとき、聖人君子でいられる男はいない。

「Mさん、私たちは進太ちゃんに、どうしても前に出てきてもらいたいんです」

白田がたまらず口を挟んだ。Mは視線を代え、白田を見据えて先を促す。

「勉強ができすぎる子が妬まれるのは事実です。エスカレートすれば虐められます。でも、勉強ができるという事実はもっと重んじられるべきだと思います。本人も自信を持つべきでしょう。けれど進太ちゃんは、勉強ができるることを恥じているように見えます。あれは

照れてるんじゃないわ。できれば悪い成績を取りたいのだけれど、家族や自分自身のプライドに負けてそれもできない。だったら、勉強ができることが級友のためになるということを理解すればいい。秋山先生は進太ちゃんに補習の講師をお願いしたいそうです。始めは勉強の遅れている女の子を三人ほど指導してもらい、うまくいったら男の子も参加させる。進太ちゃんも自信を持ってクラスに溶け込めると思いますわ」

熱弁だったが、あまりの調子良さがMの気に障った。勉強の遅れた子供を引き上げるのは教師の仕事のはずだ。それを進太にやらせることでクラスに溶け込ませるという。一石二鳥を絵に描いたような姑息な手だてとしか思えない。しかし、Mに代案はなかった。思いに反して気弱な声が口を突く。

「どちらかというと、進太は女の子に好かれるんじゃないですか」

「それは好かれますよ。勉強がきて容姿がいい。性格も穏和だから、女の子はみんな憎からず思っている。男子生徒が虐めるから関わりを持ちたくないだけです。だからきっとうまくいきますよ」

即答した秋山が胸を張った。だが、Mの推論は秋山と逆だ。この上進太が女にもて始めれば、陰湿な虐めは暴力にエスカレートするだろう。Mは暗澹とした気持ちで目をつむった。

「あっ、進太ちゃんだわ」

うつむいていた臼田が陽気な声で言って、顔を上げた。閉め切った窓から小さくバイクのエンジン音が聞こえ、瞬く間に大きく響き渡る。進太が帰ってきたに違いなかった。人に目立たない蔵敷の周辺で、進太がナンバーの無い50ccのバイクを乗り回していることは誰もが知っていた。だが、みんな知らない振りをしている。目をしかめるのは歯科医だけだった。それも自損事故を心配しているに過ぎない。バイクを買い与えたMにさえ異常に思われる。目の前にいる二人の教師もバイクについては何も言わない。裏庭を走り回っているに過ぎないと判断しているようだ。自動車の車庫証明も要らない山地ならではの習俗だった。

「M、ただいま。でも、チハルと市に出掛けるから昼食は要らないよ」

叫びながら部屋に駆け込んできた進太が二人の教師を認めた。照れくさそうに歩みを変え、ゆっくりMの横に立った。

「先生、いらっしゃい。どうぞごゆっくり、僕は出掛けます」

先ほどと打って代わった、大人びた声で挨拶した。秋山の顔に苦笑が浮かび、馴れ馴れ

しい口調で呼び掛ける。

「進太、明後日の始業式には出るんだろう」

「はい」

「それから、先生からお願ひがあるんだ。Mさんには話したんだけど、二学期から広子と明美、玲子の三人の勉強を見てやって欲しいんだ。三人とも了承している。なあ、頼むよ」

「お断りします。僕は忙しいし、毎日登校しないかも知れない。急ぐので失礼します」

にべもなく答えた進太は急ぎ足で玄関に向かった。

「進太ちゃん」

臼田が大声で呼び掛けて席を立った。足をもつれさせて玄関まで後を追ったが、いち早くエンジン音が響いた。いつも態度を鮮明にするよう仕付けてきたMに言えることはなかった。進太の態度は明確で水際立っていた。

「誠意を持って頼めばいつか分かってくれます。私は諦めません」

戻ってきた臼田が誰にともなく言った。秋山がまぶしそうな目で臼田を見つめる。

「Mさん、清美さんがサポートしてくれるので僕も心強いですよ。お互に頑張りましょう」

立ち上がった秋山が陳腐なことを言った。惚れた男の強みだか弱みだか知らないが、大概にしてくれとMは答えたかった。しかし、黙ったまま立ち上がり、二人の教師を玄関まで送った。全身に疲れが込み上げてきた。

進太のいない昼食は歯科医と向かい合って二人で食べた。カップラーメンが味気なく喉につかえる。もう三日間続いているメニューだった。歯科医は別に文句を言わない。進太は夏休み中、チハルの所に入り浸っている。クレー射撃とゲレンデヴァーゲンの運転に夢中なのだ。マニッシュで暴力志向の強いチハルは、ギャングエージの男の子にぴったりなのだろうと思う。猟銃の扱い方や四輪駆動車の運転、ナイフの使い方など、スリリングな遊びを金に飽かせて教えている様を想像すると、嫉妬心がうずく。ごく普通の家庭を演出しようとした七年間を思い浮かべると涙が出そうだ。山地で働く姿を進太に見せようと、ワサビの栽培まで始めたのだ。決して好きで始めたわけではない。

「ずいぶん疲れているように見えるよ。M、今夜は独りで市に出掛けるといい。たまには息抜きも必要だよ。夕飯は私と進太で何とかする。ぜひ行って来なさい」

食べるでもなく、ぼんやりとカップラーメンを見つめていたMに歯科医が声を掛けた。

歯科医の観察はいつも鋭い。確かに神経がすり減ってしまったような気がする。ワサビ田の世話を辟易していた。勧められるまま、今夜は市へ出掛けようと思った。とたんにチーフがつくってくれるマティニの味が舌に甦る。カップラーメンは食べ切れそうになかった。

酔いの回り始めた視界で、銀色のシェーカーを振るチーフが揺れている。相変わらず髪をショートにしたスリムな体型に、白いシャツとパンツがよく似合う。

「チーフはいつまでも変わらないわね。スリムでしなやかな身体がまぶしく見える。うらやましいわ」

他に客のいないことを承知で、Mは酔った口調を装ってチーフに甘えた。チーフはカウンターの前のスツールに座ったMにグラスを出し、黙ったままドライ・マティニを注いだ。紺のワンピースで装ったMの目をのぞき込んでから、いたずらっぽく笑う。

「Mらしくないわね。たかが二杯のマティニで酔った振りはやめてよ。私まで悲しくなる。そんなに農作業が嫌なのなら、さっさとやめて市で勤めたらいいわ。みんなが喜ぶ、もちろん進太も歯医者さんもそうよ。ついでに言っておくと、私ももう四十五歳よ。お腹のたるみ具合は誰よりも自分がよく知っているわ。久しぶりにベッドを共にしてくれるなら、恥ずかしいけど見せて上げるわ。どう、素っ裸になって私を抱いてくれる」

チーフの挑発がMの耳に心地よい。だらしなく笑みがこぼれてしまう。

「チーフと寝たら、天田さんに殺されるわ」

「何言ってるのよ。Mとの愛人関係は亭主公認よ。遠慮は要らないわ。二階の会員制ルームも今日は空いている。ベッドメイクをしましょうか」

冗談とは思えない熱い視線でチーフが見つめた。このチーフの情熱がMは好きだ。二十年前と少しも変わらない。エネルギーッシュな言動が華やかに店を支えている。市役所勤めの天田の固定給があったから、サロン・ペインを続けて来れたわけではないのだ。Mはチーフを抱き締めたくなったが、かろうじて踏みとどまる。視線を外してマティニを飲んだ。

「おいしいわ。できるなら男がいいわね」

Mのつぶやきを聞いたチーフが大声で笑う。

「今時いい男なんて一人もいないわよ。だからみんな苦労しているの。チハルだって男にしくじってアメリカから逃げ帰ってきたという噂だし、Mの好きな祐子だって、男不信症で悩んでいるんでしょう」

チーフの言葉はいつも笑える。中でも男不信症は傑作だった。あまりに当たり過ぎてい

て笑うことさえはばかられる。

「じゃあ、私は何の病かしら」

慌てて話題を自分に戻すと、チーフはにべもなく言い切る。

「Mは欲求不満の田舎病よ。まったく、軽四輪のトラックでサロン・ペインに乗り付けるMなんて想像もできなかったわ。悪いことは言わないから、もう一度オープンのスポーツカーにしなさいよ。お金に困っているわけじゃないんだから、分相応の暮らしをしないと進太がぐれてしまうよ」

「ぐれるくらいならいいんだけど、不良になりきれない優等生はピアニスト一人でたくさんなのよ」

「あれ、今夜はますますMらしくないわね。長い付き合いだけど、Mの愚痴は初めて聞いた」

チーフが茶化すように応じた。本当のことだ。ピアニストの名前まで出すなんて、我ながらあきれ返ってしまう。急に悲しみが込み上げ、目元が潤んだ。

「私はチーフが思っているほど強くないわ。心も身体も鋼鉄でできているわけじゃない」「そうね、自分に正直なのが何よりMである証拠よ」

チーフがしんみりした声で答えた。Mの悲しみが募る。

「ピアノが聴きたいわね。できればショパン、チーフが弾けるといいのにね」

目の前の大鏡に映った、ピアニスト愛用のピアノを見つめてMがつぶやいた。

「いいわ、聴かせて上げる。とっておきのショパンよ」

鼻を啜り上げながらチーフが言って、オーディオ装置のスイッチを入れた。途端に背後のスピーカーが大きな音で鳴り出す。スケルツォ第二番変ロ短調が耳に飛び込んできた。一瞬凍り付きそうになった気持ちがすぐに和む。粒立ちのよいピアノの音色が優しさを運んできた。荒々しくはないが、決して媚びることのない、あるがままの美しい調べがMの胸を包み込む。今、ピアノに癒されているとMは思った。ピアニスト以外が弾くショパンでこんな思いをしたのは初めてだった。

「誰のピアノ」

最後の余韻に酔うような声でMが尋ねた。

「大城杏花、若い人よ。市の主催する新人コンサートで天田が聴いて夢中になってしまった。職権を利用して頼み込み、自慢の機材でデジタル録音したのよ。でも、いつかMに聴かそうと言って、スケルツォを選ぶなんてかわいいでしょう。私も杏花のピアノが好き。」

音が胸に染み込むものね。Mが気に入ってくれてよかったわ」

チーフの言葉は遠くから聞こえるようだ。Mは万感の思いを込めて目を閉じた。一心にピアニストの顔を思い描く。閉じたまぶたから涙がこぼれた。

「ショパンもお好きなんですね」

低いバリトンが響き渡り、Mはスツールから落ちそうになった。慌てて正面の鏡を見る。紺のブレザーとジーンズの、今朝会ったときと同じ格好をした名淵が笑っている。相変わらず肩からカメラを下げていた。

「また驚かせてしまったようですね。エントランスの電話を使いながら聴いていたんです。失礼だけど泣いていましたね。ひょっとして、ピアニストを思い出してくれたんですか」

名淵の二の矢がMの涙腺を切って落とした。止めどなく頬を涙が伝った。熱い涙だった。
「せっかくだから隣りに座らせてください。チーフ、シェリーを一本開けておいてくれ」
一方的に言った名淵は、Mの横のカウンターにライカM6を置いてから手洗いに向かった。チーフは返事をすることも忘れ、名淵の後ろ姿とMを交互に見つめた。ドアの閉まる音を確認してから、啜り泣くMの肩にチーフが両手を当てた。

「M、さっきの言葉は撤回するわ。いい男は一人だけ残っていたわね。でも、Mが検事さんと知り合いとは思わなかった。職業は怖いけど、いい人よね。この二週間ほど毎晩来てくれるの。とても特捜検事には見えないわ。私も弁護士のお客さんに聞いたときはびっくりしたのよ。どうしてMは知り合ったの」

検事という言葉だけがMの耳に残った。特捜検事が殺人現場を聞きただして写真まで撮っていったのだ。誰かを疑っていることだけは間違いない。思わず鋭い目でチーフを睨んだ。

「ごめんなさい。Mが検事さんと付き合いが深かったことをつい忘れていた。それも、農作業ばかりしているMのせいよ。私に恥をかかせないでよ」

頬を膨らませて言ったチーフは、シェリーを取りにワインクーラーの方に向かった。二度も前科があるMの過去を、今更ながら思い出したような態度だった。Mの背筋に冷たさが走る。そのすべてを名淵が知らないはずがないと思った。素っ裸の姿を権力に観察されたような耻辱が襲い掛かった。確かにMは刑務所にいた三年間、権力に命じられるまま裸身を晒し続けたのだ。忘れていた屈辱が全身を覆い、素肌がかっと熱くなった。カクテルグラスを手に取り、残ったマティニを飲み干す。ジンのきつい香りが口に残った。じっと正面の鏡を見つめると名淵の姿が映り、確かな足取りで近寄ってくる。しなやかな仕草で

隣のスツールに座った。

「今日中に再会できるとは思わなかった。でも、予感はしたんです。Mさんはこの店の家主でしたよね」

予想に反し、下世話な話題が名淵の口を突いた。セクシーなバリトンが台無しだ。Mの私生活のすべてを知っているように、投げ出された情報も不快だった。

「何でもご存じのようね。さすがに検事さんだわ。でも、真実ではない。この店の権利は歯科医のもので、生前のピアニストに贈与されなかつた。従つて私が相続するわけがないのよ。予断に基づいた類推はしないでください」

鏡に映る名淵の顔をにらみ付けるようにしてMが答えた。名淵の口元が引き締まり、沈黙が落ちた。二人の前にチーフがグラスを並べ、黒い瓶からシェリーを注いだ。ブドウの芳醇な香りがMの鼻孔を打つ。荒み掛けた気持ちが和む。どことなく落ち着かず、地に足の着いていない今の自分を、酒に見透かされたような気がした。

「今朝と同様、また怒らせてしまったようですね。まあ、シェリーを飲んでください。それとも、先に手洗いを使いますか」

何気ない顔で言った名淵の言葉で、Mの頬が真っ赤に染まる。剥き出しの尻を洗っていた冷たい流水の感触が甦った。何か言ってやらねばと、どうしようもない焦りが込み上げてくる。

「確かに僕は検事だが、Mさんに隠していたわけじゃない。チーフが先に話したかも知れないが、僕は山地の事件の捜査で二週間前から市に来てるんです。今朝ワサビ田にお邪魔したのも仕事です。でも、ピアニストのことは嘘じゃない。公私を混同させて話した僕が軽率でした。その点は謝ります」

また名淵が嘘を言ったと、全身を包み込むじれったさの中でMは思った。山地の事件の捜査で市に来たなどと、名淵がチーフに漏らすはずがなかった。その一言は作為をもってMに放たれたのだ。今すぐ席を立つべきだと、七年の生活歴を持つ即席農婦が命じる。しかし、もう一人の女が焦燥に駆られながら、次に発せられるバリトンを待っていた。Mはシェリーグラスに手を伸ばし、金色に輝く酒を口に含んだ。スペインのアンダルシア地方で醸造したブドウの酒は太陽と情熱の味がした。

「チーフ、Mさんと仕事の話がしたいんだ。今夜の客は僕たちだけだから、少しの間席を外して欲しい」

名淵がさり気なくチーフに呼び掛けた。カウンターの中のチーフが無表情な顔でMを見

つめる。Mは何の反応も見せない。チーフの解釈に返事を委ねたような突き放した態度だ。即座にチーフがうなずく。

「今夜のMは、やはりMらしくないわ。私が判断する筋じゃないけど席を外すわ。それから検事さん、店でMを逮捕するのだけは勘弁してね。じゃあ、ごゆっくり」

少し怒った声でチーフが言ってカウンターを出た。フロアの隅のボックス席に向かう。投げ捨てた下手なジョークだけがシェリーに混ざった。

「特捜検事と言っても、僕のいる地検では一人きりです。時流に乗って聞こえはいいけど、窓際族のようなものです」

声を落として話し始めた名淵が、Mの横顔を見て反応をうかがう。Mは黙ったままシェリーを口に運んだ。再び前を向き、独り言のように話を続ける。

「犯罪に遭っても警察官や検事が事件にしてくれない時、市民が異議を訴えることができる機関があるんですよ。検察審議会というんですが、その審議会に山地で殺害された少女の父が訴えたんです。犯人が分かっているのに警察が検挙しないというんです。犯人も名指ししています。進太君だと言っている」

「嘘です。嘘に決まってる」

Mが大声で叫んだ。手に持ったグラスからシェリーがこぼれた。声にびっくりしたチーフがボックス席から立ち上がり掛ける。

「興奮しないでください。まず事実を知って欲しいんです。反応はその後でも遅くない」

名淵が右手を伸ばし、なだめるようにMの肩を抱いた。固く構えた剥き出しの肩に温かな手の感触が沁み入る。小さくうなずくと名淵が話を続けた。

「嘘かも知れないし、真実かも知れない。残酷なようだが、それを調べるのが僕の仕事です。役所ではよくあることなんだが、審議会の結論が出る前に秘密で事前調査をすることになった。その役が窓際族の僕に回ってきたというわけです。だから、役所の記録に残されたことはすべて調べた。進太君の補導の記録も、Mさんの過去の記録も読みました。でも興味本位じゃない。真実を確かめるのが僕の仕事です。そのための資料に過ぎません。そして今朝、遺体が発見された現場に行ってMさんと会った。説明が足りなかつたことはお詫びします。でも、資料を読み、現場を見たことで疑問も持つた。Mさんの証言に関わることです」

名淵の声が止まった。Mの全身が緊張する。肩に回された名淵の手を振り払いたかったが気力が失せた。そっと生唾を呑み込む。すぐさま名淵が切り込んできた。

「Mさん、一人で遺体を発見したというのは嘘ですね。進太君もいたのでしょう。鑑識が撮った写真を見ると遺体は目をつむっている。とくに水底に沈んでいる写真では、からうじて少女と分かる程度です。あの年頃の子の成長は早い。死ぬ二年前に会ったきりのMさんが、一目で久美子と断定したのが僕は不思議だった。今朝初めて現場を見て、ずいぶん草深い寂しい所だと分かった。水の流れも速く水面が揺れていた。水底に沈んでいる顔を見ただけで、Mさんが遺体を特定できたはずがない。進太君もいたんですね」

Mの全身から力が抜けていった。このままスツールから滑り落ちると思ったとき、肩に回された腕が脇に入り身体を支えた。姑息な嘘がばれないはずはないのだ。あの朝、警察に通報した電話で、水貯まりで久美子が水死していると告げたのはMだった。動転していた頭が、進太に告げられた名前を秘匿することを忘れさせたのだ。しかし、Mはそのことを悔やむ気になれない。進太とチハルと一緒にいた事実を隠した浅知恵を恥じた。恥じた瞬間、晴れ晴れとした気持ちになった。萎えていた気力が甦ってくる。Mはこれまで、すべての真実を直視したところで生きてきたことに思い当たった。平穏な暮らしに慣れ、つい魔が差してしまったとしか思えなかった。今からでも取り返しがつくだろうかと、不安が首をもたげてきたが、背筋を伸ばして踏みとどまる。

「検事さんのおっしゃったとおりです。あの朝、確かに進太もいました。補導歴を心配して事実を伏せたのは私です。私を逮捕してください。偽証罪で刑務所に行くのでしょうか。覚悟はしています」

「ハッハハハ」

名淵が大声で笑った。Mの脇に回した手に力がこもる。

「裁判になっていない事件で偽証罪はありませんよ。でも、これからは真実を話してください。今回の嘘は、まるでMさん自身が進太君を疑っているようじゃないですか。もっとプライドを持ってください。チーフじゃないですが、Mさんらしくないですよ。少なくともピアニストが選んだ女性らしくない」

名淵の言葉がMを突き刺す。一言もなかった。頬が真っ赤になり全身が熱く火照った。曲がりくねっていた道が名淵の出現でまた、真っ直ぐに延びていく予感がした。さわやかな風が身体の中を吹く。バリトンが心地よく耳に残った。カウンターに置いたシェリーグラスに涙の滴が落ちた。

「とにかく、真実の究明は僕がします。予断は一切持ちません。Mさんも、あるがままの事実を認めてください」

名淵の言葉にMが大きくうなづく。ほっとした表情で名淵がMに回した手を戻した。

「これで仕事の話は終わりです。後は楽しく酒を飲みましょう。Mさん、ご一緒させてくれますね」

「ええ、馬鹿な女を続けずに済んだ記念に飲みましょう。検事さんには感謝します。危うく自己を見失うところでした」

二人は改めてグラスを合わせた。一変した雰囲気を悟ったチーフがカウンターに帰ってくる。相変わらず新しい客は来ない。静かな酒宴が続いた。話題は盛り上がらないが、決して気詰まりではない。通い合う心を実感できる酔いが回ってきた。Mは帰りたくないなかつた。

「Mさん、そろそろお開きにしましょうか」

ゆったりとした声で名淵が言った。

「いえ、もう少しだけ。検事さんはそんなに飲んでいないわ」

答えた声が甘えていた。はっとして鏡に映る自分を見た。いつになく輝いた顔が映っている。脇に垂らした右手の指先に名淵の手が触れた。触れた指先を力を込めて握り締めた。すぐ握り返してきた名淵の気持ちがうれしい。チーフの話す取り留めもない話題にうなづきながら、二人は指を絡め合った。指先に全神経を集中し、互いの思いを探り合う愛撫が続く。Mは下半身の火照りを意識した。名淵のペニスが勃起してくれることをMは願った。二人の手はチーフから見えない。名淵がMの首筋にもたれるようにして顔を寄せた。低い声でささやきかける。

「Mさんは、いい匂いがする」

「えっ、何も付けてないのよ。汗のにおいかしら、ごめんなさいね」

さり気なく答えたが、名淵は身を引かない。さらに言葉を続ける。

「いや、汗のにおいでも体臭でも構わない。Mさんの匂いが好きだ」

やはり、最後は言葉が必要だった。にこやかに聞いていたチーフの表情がこわばる。不審の色が浮かんだ。もう時間は残されていない。名淵はすでに散会を宣言してしまっている。せっかくのチャンスを逃がして悔やむのは嫌だった。Mは真っ直ぐチーフの目を見つめた。

「チーフ、二階のルームが空いていると言っていたわね。用意してくれないかしら、席を代えたいの」

依頼を聞いたチーフの目がまん丸になる。続いてあきれ返った顔でうなづいた。サロン

・ペインの二階は、役者を志した進太の母の睦月がSM自縛ショーを演じるショー・パブとして使われてきたが、睦月が進太を捨てて演出家の沢田と去ってからは閉鎖されていた。プライベートな会合や宴席に利用できる会員制のルームに改造されたのは三年前だ。もっとも、ゆったりしたソファーがダブルベッドになるといった、いかがわしい作りだったが、チーフが使い方まで関与はしないと言うだけあって、人目を避けたいカップルによく利用されていた。

チーフはカウンターを出て二階に向かう。Mも立ち上がって後を追った。個室への誘いを聞いたはずの名淵に、決断の時間を与えたのだ。Mとの一夜を拒否するなら、名淵は帰るはずだ。立ち止まったチーフの横に並んでカウンターを振り返った。スツールに座った広い背中が見えた。Mの胸中を安堵と不安が交差した。素早くチーフの耳に口を寄せる。

「縄を用意してね」

一言ささやいてカウンターに向かうMの背に、チーフの明るい声が飛んだ。

「やっとMらしくなったわ。憎らしいけど今夜は譲る」

Mの口元に誇らしい笑いが浮かんだ。

ダブルのソファーベッドが断続的にきしんで、音を立てる。ほんのりと明るい間接照明が、絡み合う裸身を照らしている。名淵の逞しい膝がMの股間を割った。太股に押し当てられたペニスの感触が、陰部に熱い情感を沸き立たせる。右手を伸ばして屹立したペニスを握ると、身体の深奥から喜びが溢れた。膝でなぶられた性器が戦く。名淵の愛撫は濃厚だった。尻の割れ目に回った手が怪しくうごめき、乳房をもみ上げる指先から優しさが伝わる。Mの口から低く呻きが漏れた。すかさず名淵が口を重ねる。開いた唇の間から舌先が侵入し、Mの舌を求める。絡み合う舌が官能を運び、陰部がしつこく濡れた。ひとり口を吸い合った後、名淵が器用に体位を代えた。Mの股間を押し開いて顔を突っ込み、狂おしく陰部を吸う。Mも負けずに反り返ったペニスを口に含んだ。お互いの尻に回した両手が執拗に肛門を愛おしむ。真っ白になった頭の中で、押しては返す波のように官能が高まっていく。やがて潮が満ち、巨大な波頭が打ち寄せてきたとき、名淵が身体を離した。Mは大きく股間を開き、身悶えして名淵を待つ。官能に研ぎ澄まされた粘膜に、熱くいきり立った亀頭が触れた瞬間、全身が電撃を浴びたように震えた。暗転した視界の底で真っ赤な炎が揺れた。身体の奥に呑み込んだ肉を、Mの全身が包み込む。官能の高まりに耐えきれず、二人の口から同時に喘ぎが漏れた。名淵がゆっくり腰を使う。Mの尻も淫らに震

えた。

「Mさんっ、いく」

獣の声が響いた途端に、呑み込んだ肉がひときわ大きく膨らむ感触がした。だが、巨大な波頭はついに崩れなかつた。春の波間に漂うような気怠さが、Mの全身を包んだ。官能に言葉は要らない。ぐっしょり濡れた股間で柔らかくなっていくペニスを意識しながら、Mは思った。小さく身じろぎした名淵がそっと身体を離す。軽くなった胸に外気が触れる。異様な寒さを感じてMの裸身が身震いした。

「Mさん、とてもよかったです」

首筋に埋めた名淵の頭の後ろから声が聞こえた。どことなく自信のない声だ。Mは名淵の髪を撫でながら掠れた声でつぶやく。

「そう、ありがとう」

声に応えて名淵の左手が伸びる。そっとMの腰を抱いた。遠慮がちに手を広げて股間をまさぐる。春の波間を漂う官能が再びざわめきだしそうになった。

二人は一時間ほど抱き合ってベッドに寝そべっていた。まだ寝ていないことを示すように、名淵がMの素肌を撫でる。Mが寝入っていないことを、名淵も知っている。二人とも黙ったままだが、情事の後の静かな部屋に緊張が高まる。

「眠れないのかい」

我慢できずに名淵が聞いた。Mは答えずに身を起こし、部屋の隅に押し付けたテーブルを見た。小さなグッチのボストンバッグが目に入った。チーフが用意してくれたものだ。Mは黙ってベッドから起き上がり、テーブルへ近寄っていった。名淵の目の先で素っ裸の尻が左右に揺れる。待ち望んでいた何事かが始まるような、ときめいた予感がした。

Mはテーブルの前にひざまずいて、ボストンバッグを開けた。黒い麻縄の束と焦げ茶色の革鞭が見えた。懐かしい品々はMに、官能は待つものでなく追い求めるものだと告げている。Mはバッグを手に提げてベッドに戻った。上半身を起こして見ている名淵の上に、バッグの中の品を一気にばらまく。

「検事さん、お願ひがあるの。この縄で私を後ろ手に縛り上げてください」

さりげなく言おうとしたが、Mの声は固くなっていた。名淵は面食らった顔でMを見上げる。苦悩の色が表情を掠めた。

「まさか、ピアニストへの贖罪ではないでしょうね。僕にも責任があるんだから、そんなことは耐えられない」

「とんでもない、大人が選んだセックスを悔やむわけがない。縛られるのが好きなだけよ。もっと官能を楽しみたいの」

苦しそうに発せられた名淵の言葉を打ち消すように、Mが断言した。言い終わると同時に名淵に背を向け、床の上に正座した。背中に両手を回して首筋の下で高々と組む。取り残された名淵は、仕方なく黒い麻縄を持って立ち上がった。ザラザラとした縄の感触が手に痛い。この縄で素肌を縛るのかと思うと、Mの苦しさを思いやって心が痛んだ。だが、目の前で正座したMは、真っ直ぐに背筋を伸ばし、凛とした姿勢で厳しい縄目を待っている。異様な美しさが名淵の目を打った。静謐な裸身に誘われるよう、名淵はMの背後に屈み込んだ。細い両手首をつかんで黒縄で拘束する。後ろ手に縛り上げた縄尻を首筋に引き絞ると、Mの口から切ない喘ぎが漏れた。ペニスが再び固くなり始める。名淵はMに指示されるとおりに縄を使った。後ろ手を緊縛した二本の縄尻を胸に回し、豊かな乳房の上下を厳重に縛り上げる。別の黒縄を取り上げ、後ろ手から首の両側を這わせて胸元に下ろした。その縄尻で乳房の上下を縛った二条の縄を一つに束ねる。ぎゅっと黒縄を絞り上げると、豊かな乳房が見る間に盛り上がる。縄目の間から突き出た乳房は、まるで洋梨のように無惨に変形している。Mの口からまた呻きが漏れた。眉をきつく寄せ、唇を噛みしめて痛みを耐える。凄惨な美しさが名淵の全身を打ちのめした。もう行くところまで行くしかない。

「さあ検事さん、肌に血が滲むまで鞭打ってください。遠慮せずに、私の全身が熱く燃え上がるまで打ちのめしてください」

透き通った声でMが願った。返事も待たずに後ろを向きてひざまずき、床に横顔を着けて裸身を支える。剥き出しの尻を高々と掲げた。尻の割れ目の中心に肛門が露出している。黒ずんだ括約筋が淫らに収縮して鞭を求める。名淵が革鞭を取り上げ、高々と振りかぶった。尻を目掛けて振り下ろす。素肌を打つ鋭い鞭音が部屋に響き、Mの口から悲鳴が漏れた。今度は名淵の頭が空白になる。力を込めて縦横に鞭を振るった。白い尻に幾筋も真っ赤なミミズ腫れが走った。過酷な鞭打ちから逃げようとして、尻が前後左右に振られる。見えない鞭を避ける尻が滑稽なほど哀れだ。逃げ回る尻を執拗に追い、狙い打つ喜びが名淵の全身を満たし始める。啜り泣くMの悲鳴が心地よい。黒々とした修羅の世界が責める裸身と、責められる裸身を覆いつくした。Mの視界はもはや真っ暗だった。打たれた瞬間だけ真っ赤な閃光が走った。股間から溢れた愛液が腿を伝う。全身が、粘り着く汗にまみれた。鞭打たれながら悶え、必死に上体を起こす。裸身を緊縛した縄がきしつてギシギシ

と鳴る。飛び上がるほどの痛みをこらえて床に尻を着き、大きく股間を開いて胡座を組んだ。交差した両足首に名淵が麻縄を通して、素早く緊縛する。胡座縛りにしたMの後ろ手を取って前方に突き倒す。Mは両膝と横顔で苦しい姿勢を支えるしかない。座禅転がしにされた無防備な股間が名淵を誘う。丸出しになった陰部の奥に、固く突き立った性器が見えた。背後で膝立ちになった名淵が荒々しくペニスを突き立てる。激しく腰を使われると、Mにはもう抗う術がない。ひたすら、押し寄せる官能の波にもてあそばれるだけだ。真っ黒な視界に漆黒の炎が揺れる。官能の極まりが道標に灯した幻の炎だ。Mと名淵はその暗黒の炎に誘われるよう、さらに先へと進む。巨大なペニスが肛門を突き刺し、執拗に陰部を責めた。数時間前の真っ赤な炎と異なり、暗い闇の炎が燃えている。無明の闇を照らす漆黒の炎だ。これが追い求める希望なのだと、Mは不意に思った。すでに官能と呼ぶには遅すぎる。人の暗部に棲む夢だけが希望となり、残された時間の上を羽ばたくのだ。

3 拉致

十月下旬の日曜日の昼前、チハルは黒塗りのゲレンデヴァーゲンで忍山沢に分け入っていった。忍山沢は山根川に流れ込む数多い支流の一つで、山地の西に切り立つ山系に水源を発する一級河川だ。山地の人は「おしやま」と呼んだ。よく植林された山並みが、狭い沢筋沿いに延々と続いている。

すがすがしく晴れた日だったが、鬱蒼とした杉の巨木が密生しているため、舗装された林道の周囲は暗い。開け放したサンルーフの中に見上げる空だけが、底抜けに青かった。三十分ほど、道なりにくねくねと曲がりながら、急な坂を上っていくと突然視界が開ける。植林した杉林が果て、自然のままの山肌が広がっている。コナラやクヌギなどの黄ばんだ色彩の中で、真っ赤に燃え上がったカエデがひときわ目に映える。錦繡と呼びたいほどの秋景色だが、やはり山根川源流の紅葉には及ばない。手頃な沢にも関わらず人影のない理由だった。釣り人も滅多に入らない。決して魚影が少ないわけではないが、溪流にしては緩やかな流れが、雄壮な山根川に比して人気がない。しかし、チハルにとってはそれが好都合だ。特に山仕事の作業員がいない日曜日は最高だった。忍山沢はチハル一人のものだ。もうじき始まる猟期に向けて、猟場の下見をするのにちょうどよかつた。比較的流れの緩い溪流はゲレンデヴァーゲンで遡上できる。猟のポイントを見付けるのに最適だった。興に乗って発砲したとしても、聞きとがめる者は誰もいない。チハルは助手席に置いたレミントンM1100を横目で見た。十二番口径のシェルを七發装弾でき、セミオートマチックで発射できる散弾銃だ。腕はクレー射撃で毎日磨いてきた。異常に繁殖して農作物を荒らすというイノシシを退治することを考えると腕が震える。違反を承知で今日は十発の実包を持ってきた。すでに三発は装填済みだ。だがチハルに猟の経験はない。ペーパーテストで狩猟免許を取得しただけだ。高齢者ばかりになってしまっていた猟友会は喜んでチハルを迎へ、基礎から指導監督すると言った。銃の所持を管理する警察の目を気にして入会はしたが、チハルは会員と一緒に行動する気はない。何と言っても山地に住んでいるのだ。牽制される気遣いはなかった。口元に笑みを浮かべて、じっと溪流の先を見つめた。

五メートル先で道は分岐している。舗装した林道は忍山沢に架かる小橋を渡って大きく曲がり、コナラの枝が張りだした山腹を迂回して続いていた。もう一本の未舗装の枝道は、真っ直ぐ忍山沢に沿って下っている。チハルはスピードも緩めずにゲレンデヴァーゲンを

一気に枝道に乗り入れた。フロントガラスから見えた枝道は、かろうじて車一台が入り込めるほどの広さだ。路面も荒れ放題で、瘤のようなギャップが連続している。チハルは激しいショックを覚悟してハンドルを握る両手に力を込めた。だが、さすがにゲレンデヴァーゲンのサスペンションは凄い。待ち構えたギャップにスムーズに追従し、凸凹を跨ぐように踏み越えていく。痛快だった。開け放った車窓から飛び込み、肩を掠める枝葉も気にならない。心持ち小鼻が膨らむ。得意の絶頂だった。見物する通行人がいないことがしゃくにきわるぐらいだ。今日のチハルは緑と茶、黒の三色で迷彩を施した野戦服の上下を着ている。足元はジャングルブーツだ。目深に被った黒いキャップの下でサングラスが光った。沢筋に沿ってしばらく坂を下ると道が果てる。大きな花壇ほどの砂地の先を渓流が洗っていた。川幅は六メートルほどあるが、対岸は山が迫り、岩場が繞いている。谷は大きく開け、日の光が満ちている。紅葉した木々が目にまぶしい。チハルは砂地の上でゲレンデヴァーゲンを止め、車外に降り立つ。渓流のすぐ前まで行き、慎重に水深を計った。チハルのいる左岸の山裾はなだらかで岩も少ない。主流は対岸の巨岩の間を白い渦になって流れている。ドウドウと岩を噛む流れの音が耳を圧する。左岸の水際沿いに進めば、水深は深くとも五十センチメートルほどだろうと見込みを立てた。再びゲレンデヴァーゲンに乗り込み、センター DEF をロックする。これで完全な四輪駆動だ。少し緊張してゆっくり流れに進入した。フロントを洗う白い波頭が目の前に見える。車体を押し戻す水圧をアクセルでコントロールして、一定の速度を保つ。冷たい川風が渡っていくが、手に汗が滲むほど暑い。秋の透明な日射しを浴びた水面が乱反射し、サングラスで覆った目を責め続けた。時折水面を割ってイワナが宙に跳ね上がる。テリトリーを荒らしに来たチハルを威嚇しているようだ。今にもエンジンが急停止するような恐怖が胸を掠める。だが、黒いゲレンデヴァーゲンは順調に忍山沢の流れを遡っていった。

山腹に沿って大きくカーブを描く渓流を十五分ほど走ると、岩で覆われた対岸の二メートルほどの所に再び林道が現れた。渓谷の様相も変わる。これまでなだらかだった左岸が岩場になり、右岸が穏やかな山裾になる。複雑な地形が沢筋をもてあそんでいるようだ。チハルは慎重に渡河点を捜した。十五メートル先の対岸に、渓流に乗り入れたときと同じような砂地が見えた。流れも比較的穏やかに見える。ほっとした拍子に、林道の横の狭い退避場が目に入った。白いパジェロが止めてある。

「あっ」

チハルの口から驚きの声が漏れた。人が入っていないと確信していた忍山沢で見たパジ

エロは、幻影とさえ思えた。一瞬身体が弛緩した。途端にゲレンデヴァーゲンのスピードが落ちた。慌ててアクセルを踏み込み、周囲を見回す。戾した視線に岩場が見えた。林道に止まったパジェロからは斜め下方に当たっている。水際に張り出した台上の岩がテラスのように見えた。ちょうど日溜まりになった岩のベッドの上で、二つの裸身が絡み合っている。チハルは目を見張った。もう十メートルと離れていない。渡河する進路のすぐ下流に当たる。だが、ここで停車するわけにいかない。マフラーが水没すればエンジンも止まってしまう。露天でセックスを楽しんでいる二人が不注意なのだ。侵入者を我慢してもらうしかなかった。もっとも野外でのセックスの醍醐味は分からぬわけでもない。チハルの口元に苦笑が浮かんだ。接近してくる車にやっと気付いた二人が上体を起こす。驚愕で目が大きく見開かれている。両手で乳房を隠した女の横で、男が立ち上がった。チョコレート色のしなやかな裸身だ。股間で屹立したペニスが反り返っている。外国人だった。

「キャー」

水音に被さる女の悲鳴に被さって、男の低い怒り声が響いた。意味不明だった。英語ではない。チハルは害意が無いことを示すように小さくホーンを鳴らした。だが、ホーンの音は男の怒りに油を注いだようだ。裸身を震わせてしゃがみ込み、足元の石を拾って振りかぶって投げた。金属音が響き渡り、石はボンネットに当たって跳ね返る。チハルはさらに進む。無理に笑いを浮かべて片手を振ったが、期待した反応はない。褐色の裸身が再びしゃがみ込んで、今度は猫の頭ほどの大きさがある岩を掴んだ。先が切り立った凶器のような石だ。その足で流れに踏み込んできた。チハルとの距離は三メートルしかない。怒り狂った目が大きく見開かれているが、肩と腕の筋肉が震えている。彼も怖いのだとチハルは思った。もう停車するしかない。チハルはハンドルを男の方に切って車体を斜めにした。AMG仕様のゲレンデヴァーゲンは、エキゾーストパイプが助手席のサイドステップの下に位置している。水流を被らない角度で停車するしかない。しかし男は、自分に向けられた車体を攻撃してくるものと誤解した。石の凶器を振りかぶって水を蹴り、嬌声を上げて運転席に迫ってきた。チハルは身体を捻って助手席のレミントンM1100を握った。素早く中腰になって銃口を外に向けた。

「フリーズッ」

大声で言って安全装置を外す。もう男の裸身は目前に迫っていた。荒々しい呼吸音がチハルの耳を打つ。振り下ろされた腕を見つめながら、指先の力を抜いて引き金を引いた。ズガーン

狭い車内に銃声が響いた。散弾を腹に受けた男の裸身がガクンとのけ反る。振り下ろされた石の凶器が鋼鉄のドアを叩いた。チハルは連續して引き金を引いた。血しぶきが飛び散り、肉がはじけた。二つに裂けた裸身が水面に落ちた。

「キャー」

岩場から女の悲鳴が聞こえた。銃声の残響が耳でこだまするチハルには、虫の羽音のように小さく聞こえる。銃を持つ手が微かに震えた。また人を殺したと、冷静に理解できた。これで三人目だった。ボギーとの野外セックスの思い出と共に、殺人の記憶がチハルを一年前のロサンゼルスにつれていく。

昨年の五月二十六日の宵のことだった。ロサンゼルス郊外にあるボギーの屋敷はまだ薄明かりが残っていた。広い庭地の中央にあるプールで、チハルとボギーは汗が出るまで泳いだ。泳ぎ疲れると、火照った肌に汗と水滴をきらめかせてプールサイドに上がった。二人とも素っ裸だ。ボギーの漆黒の肌が、薄明かりの中で輝いている。巨大なペニスの先で、ピアッキングした金のリングが揺れた。リングに繋いだ長さ二メートルの細い鎖は、チハルの股間のリングと結ばれている。エネルギーッシュに泳ぐボギーに、陰唇にピアッキングしたリングを引かれてついていくのは本当につらかった。小さな肩が荒い息に応じて激しく上下している。白い胸に盛り上がった、張りのある乳房がゆったりと揺れる。素肌を掠めていく風が心地よかったです。チハルの正面に立ったボギーが、しなやかな両手を伸ばして尻を抱いた。大きな手で優しく双臀を押し開く。剥き出しになった尻の割れ目を風がなぶっていった。陰部が熱く燃え上がる感覚がうれしい。そっと目を閉じるとボギーが抱き締めてくれた。厚い胸板が顔を覆い、固い胸毛が頬に痛い。臍の上に押し付けられた、ぐんにやりしたペニスが固く勃起してくる。チハルの鼻孔にボギーのきつい体臭が満ちた。至福の時が始まる予感に全身が震える。

チハルがボギーと付き合いだしたのは、ハイテクゲーム機メーカーのアメリカ子会社コスモス・アメリカの副支配人になる直前のころだ。西海岸で名高い証券会社のアナリストをしているボギーと初めて会ったのは、社債発行のアドバイスを受けにいったときだった。白人の現地支配人につれられて会ったボギーは、金融に知識がないチハルに親切に教えてくれた。支配人と接するビジネスライクな対応とは対照的だった。二人の間を人種問題が仲立ちしたといっても、あながち的外れではなかった。だが、セックスへと進む男と女の関係が始まること理由は要らない。週一度の情事は、そのころからごく自然に始まった。

もう六年目になる。金融のトップビジネスマンのボギーは、白人との離婚歴のある三十五歳の黒人男性だ。驚くほど収入はあるが、自由になる時間は少なかった。二人の関係は週一度はおろか、月に一度も会えないことがあった。アメリカの女性には許されない仕打ちだったが、日本人のチハルには待ちこがれる時間もうれしい。その間は、チハルも仕事に没頭した。何よりもボギーを信じ、ボギーもチハルを信じていた。長い関係を続けられた裏には、それぞれ勝手に勘違いした文化の違いもあったかも知れない。長続きした、もう一つの理由が性の技法にあった。二人のセックスはいつも健康的だった。知り合ってしばらくしたころ、二人は揃って性器にピアッシングした。そのリングを鎖で繋ぎ合ったまま、ボギーの広壯な屋敷の庭で一緒に汗をかいだ後セックスに興じた。運動不足の二人には、まるでアスレチックジムへ通うような感覚で、官能を楽しむことができた。野外のセックスは大らかで、豊かな官能を与えてくれたのだ。

立って抱き合ったまま、二人は濡れた身体で愛撫を続けた。チハルの膝が震えだし、股間に愛液が溢れる。

「もうだめ、我慢できない」

つぶやいてチハルが膝を崩した。ボギーが手を緩めて裸身を支える。チハルはプールサイドに敷いた分厚いタオルの上に手足をついて這う。頭を下げて高く尻を掲げた。辺りはもう闇が迫り、水銀灯の光だけが白と黒の裸身を美しく照らしだしている。漆黒の裸身が、白い裸身の背後から覆い被さる。巨大なペニスが体内に進入した。その圧倒的な質量がチハルの下半身全体を占有する。

「ムッ」

声にならないうめき声がチハルの口を突いた。ボギーが腰を使う度に、低く長い喘ぎが風に流されていった。二人が同時に官能の極まりに達した瞬間、エンジン音が響き渡った。反射的に前方を見ると、閉まっているはずの表門に続く百五十メートルのアプローチを、ヘッドライトを上向きにした車が突進してくる。凄いスピードで光は接近し、プール脇に駐車したボギーのロードスターに迫った。

ズガガーン

耳をつんざく衝撃音が響き渡り、目前にあった赤いロードスターの上に黒いハーフトラックが乗り上げた。金属と金属がぶつかり合って真っ赤な火花が飛んだ。圧倒的な暴力を見つめるボギーの裸身がブルッと震えた。素早く身体を離し、後ろを振り返った。チハルも視線を巡らしてテーブルに置いたセキュリティーセットの端末を見る。グリーンのライ

トが点滅していた。屋敷の警報が解除されているのだ。チハルが訪れたときには開けられた門がそのままになっているはずだ。ボギーが小さく舌打ちをして立ち上がり、セキュリティーセットのスイッチを入れてキーボードを叩いた。赤いランプが点灯し、やっと屋敷が警戒態勢になった。しかし、もう遅すぎる。侵入者は目と鼻の先にいるのだ。素っ裸のチハルの背を恐怖が掠めた。思わず周囲を見回して武器を捜す。だが、無駄なことだった。武器を嫌悪するボギーは銃を持っていない。もはや侵入者の善意を期待するしかなかった。

「お楽しみの所を邪魔したようだな。でも、素っ裸でも信用は出来ねえ。二人とも両手を上げてプールの前に並ぶんだ」

嘲る声が響き渡り、二人の男がプールサイドに上がってきた。前を歩く男が右手に銀色に光る拳銃を握っている。強力な357マグナム弾を発射する、コルトパイソンの撃鉄は上がっている。銃口がボギーとチハルの顔を交互に狙った。チハルの膝が情けなく震える。

「よしつ、二人ともおとなしく両手を背中に回せ」

銃を持った大男が命じると、横に並んだ貧相な男が腰に吊した針金の束を外した。二人とも若い黒人だった。好色そうに裸身を見る目に、チハルは見覚えがあった。とっさに顔に出そうになる反応を必死に押し止め、正面を向いたまま両手を後ろに回した。確かに、ボギーの屋敷に来る寸前にダウンタウンで見た顔だと確信する。二人はいかがわしいバーの前の階段に座り、歩道を通り過ぎるチハルをじっと見つめていた。おいしいと評判の日本人の青年の店で、ボギーに食べさせようと餃子を買った帰りだった。日本人仲間の情報がなければ、チハルも足を踏み入れないような場所だった。恐らく、二人の侵入者はずつとチハルを尾行してきたに違ひなかった。悔しさで奥歯を噛みしめたが、セキュリティセットが作動していなかったのでは仕方がない。彼らは開いていた門を通ってから、植栽の陰で日が暮れるのを待っていたに違ひなかった。

チハルの背後に回った貧相な男が、高く盛り上がった尻を撫でた。おぞましさに身震いすると、すかさず両手首を針金で縛り上げられた。肌に食い込む針金の痛みに耐えきれず、ひきつった口から悲鳴が漏れる。

「チハルに乱暴をするな。今ならば許そう、早く帰れ」

ボギーの凛とした声が響いた。思わず横を見る。後ろ手に縛られた黒い裸身が首筋を正して胸を張っている。しなやかで美しい姿だった。

「ふん、萎びきったペニスを晒して威張るんじゃない。黙って金を出せば引き上げる。金を出さなければその場で殺す。俺たちのやり方はシンプルなんだ」

鼻の先で笑って言って、大男が銃口の先で垂れ下がったペニスの先をなぶった。ボギーの股間で長いペニスが揺れる。表情が屈辱で歪む。

「僕たちは素っ裸だ。財布を身に着けてないことは子供でも分かる。それに、母屋に行つても無駄だ。警報スイッチを入れてある。警備員が来ない限り、僕でも入れない。数分後には警備員が来る。無理に侵入すれば三分間で警察が飛んで来る。早く帰った方がいい」

震える声で、ボギーが吐き捨てるように言った。声に促された大男がテーブルで点滅するセキュリティセットの赤いランプを怖い目で睨んだ。憎々しげに唾を吐き捨ててから、一步前に踏み出す。

「どうしても死にたいってわけか」

ボギーのこめかみに銃口を当て、低い声で威嚇した。冷たい鉄の感触が素肌を通して死を伝える。今更ながら激烈な恐怖が、ボギーの足元から胸元まで這い上がってきた。

「待てっ、待ってくれ。金はある。君たちが壊したロードスターの中に百ドルほど有ったはずだ。捜してみてくれ」

ボギーが言い終わらないうちに大男が銃口で頬を打った。暴発する恐怖がチハルの全身を満たし、とっさに目をつむった。だが、銃声は鳴らなかった。ボギーの長身が揺らぎ、口元から血が流れた。

「ビジネスは終わりだ。ひざまづけ」

冷酷な声で大男が命じた。チハルの膝が真っ先に崩れる。冷えたコンクリートの床に無様に剥き出しの尻をついた。ボギーがよろよろと膝を折りながら、祈るように訴える声が耳に響く。

「殺さないでくれ、お願ひだ、金は後で届けるから、殺さないでくれ」

「もっと大きく口を開いて頼むんだな」

ボギーの訴えに大男が無慈悲に答えた。大きく開けたボギーの口にコルトパイソンの銃口を突っ込む。

「頼む」

喉の奥で声にならぬ悲壮な言葉が發せられた途端、銃声が轟いた。ボギーの後頭部が瞬時に吹き飛ぶ。チハルの裸身が返り血を浴び、白い胸に赤黒い斑点ができた。恐怖のあまり失禁した股間が温かく濡れる。見開いた目で一心に大男を見上げた。

「こ・ろ・さ・な・い・で」

激しく身悶えして、忘れていた言葉を思い出すように哀願した。

「女は殺しやしねえ。楽しむもんだ」

大男の答えで全身の力が抜けた。ほうけたように宙を見上げた目の前に巨大なペニスが差し出された。チハルは口を開き、醜悪なペニスを口に含んだ。後ろ手に縛られた不自由な身体で正座して、膝立ちになって舌を使った。ぐんにやりとしていた肉の塊がゆっくり硬くなり、亀頭をもたげて勃起し始める。チハルの口は巨大なペニスではち切れんばかりだ。歯を立てないことだけに神経を集中して尊大にスライドするペニスを吸い続けた。

「這え」

ペニスが引き抜かれると同時に頭上から声が落ちた。チハルは縛られた無理な姿勢で床に這いつくばって尻を掲げる。乱暴に股間を蹂躪したペニスがすぐ引き抜かれた。

「こんなもんを填めやがって、変態女め」

憎々しい声が響き、太い指先が股間に吊したリングを摘む。陰部に激痛が走り、視界が真っ赤に染まった。引き裂かれた陰唇から血が滴り、生暖かい血の感触が太股を流れしていく。荒々しく体内に挿入されたペニスの動きが、からうじてチハルを失神から救った。巨大なペニスはチハルの下半身を占有し尽くし、いつ果てるともない往復運動を続けた。もはや痛みも屈辱も、憎しみさえ遠ざかってしまった。男の肉に反応する女の肉でしかなくなつた身体が、三度目の絶頂を極めたとき大男が射精した。長く多量に放出される精液を体内に受けながら、チハルの裸身は細かく震え続けた。やっと大男が身を離すと、待ち兼ねたように貧相な男がペニスを挿入してきた。遠慮がちで下手なセックスが歯がゆいくらいだ。這いつくばったチハルの頭上に大男の笑い声が落ちた。去っていく足音が聞こえる。やがてエンジン音が響き渡った、貧相な男の身体がこわばり、射精したと思った瞬間ペニスが抜き去られた。ズボンを引き上げながら駆け去る後ろ姿が見えた。大男に取り残されると思ったらしい。タイヤのきしむ音が響き、ハーフトラックのヘッドライトの光が闇に流れた。尻を高く掲げたまま、プールサイドで這いつくばったチハルの全身から一気に緊張が去った。殺されずに済んだのだ。大きく溜息をつき、後ろ手に縛られた裸身を横たえる。横顔になった目にボギーの死体が映った。無惨に吹き飛ばされた後頭部が恨めしさを語っている。チハルの胸にもボギーの血が飛び散っている。たとえ命が助かったとはいえ、ボギーを殺した大男のセックスに三度も反応した自分が情けなくなる。官能の極まりを見せたことで、命拾いをしたと思うと全身が恥辱に染まった。チハルは全身の痛みに耐えて立ち上がった。改めてボギーの死体を見下ろすと、涙がこぼれた。これまで忘れていた涙だった。激しく裸身をおののかせ、声の限りに号泣すると全身に悲しさと怒りが満ちた。

圧倒的な涙が悲しみを流し去る。怒りだけが全身に満ちた。チハルは後ろ手に縛られたまま走り出し、泣きながらプールを下りた。真っ直ぐ自分の車に向かう。

プールから十メートル離れたアメリカハナミズキの花の下に、銀色のゲレンデヴァーゲンが駐車してある。五百台だけ限定で生産された五リッターV8エンジンを積んだ装甲車のような車だ。ハイテクゲーム機を愛用するカジノのオーナーが無理矢理貸してくれたものだった。チハルはフロントバンパーの前で後ろ向きにひざまづいた。後ろ手を縛った針金の間にバンパーの突起を入れて縄目を切ろうとした。細い針金が手首に食い込み素肌が裂けた。鋭い痛みと血が流れる感触がしたと同時に、針金が切れた。痺れきった両手を大きく回しながら運転席にいき、刺したままのキーを取ってリアゲートを開けた。貨物室に置いた黒革の銃ケースを素早く開ける。黒光りするレミントンM1100を取り上げ、その場で七発の実包を装填した。運転席に戻ってエンジンをかけると同時に発進する。目的地はダウンタウンのいかがわしいバーだ。銃を持たなかつたボギーと違い、チハルは武装している。暴力も厭いはしない。必ず二人を撃ち殺してやると心に決めた。重いアクセルを踏む素足に力を入れた途端に陰部が痛んだ。外灯の光に照らされた股間を見ると、精液で汚れきつた陰部で、引き裂かれた陰唇から出血していた。白いレザーのシートに赤い血が滲んだ。

日曜日の夜のダウンタウンは思ったより交通量が少ない。歩道を歩く人影も疎らだった。夕方見たバーの前に、ロードスターを破壊した黒いハーフトラックが止まっている。やはり目星をつけたとおり、二人は店の常連だったのだ。チハルはスピードを落として通り過ぎながら、身を乗り出すようにしてガラス窓の中の店内をのぞいた。カウンターの中央に陣取ってビールを飲んでいる二人組が見えた。大男はツールを回して通りの方を見ていた。一瞬目が合ったような気がしたが、すぐ通り過ぎてしまった。別に恐怖は感じなかつた。膝に置いたレミントンを握り締めてUターンする場所を捜す。歩道を歩く人たちが目を丸くして運転席の裸身を見上げた。広くなった路上でハンドルを限界まで切って回転する。そのままアクセルを目一杯踏み込んで直進し、凄いスピードでハーフトラックに突っ込む。激突音が響き渡ったが、予想していた衝撃はない。さすがに装甲車並の車体だった。ゲレンデヴァーゲンのフロントはハーフトラックの荷台に半分乗り上げている。トラックの荷台は無惨に潰れ、リヤタイヤが外れていた。これで二人は逃げることができない。チハルは素早くドアを開けて路上に飛び降り、レミントンを下げてバーの入口に向かった。バーのドアが開き、血相を変えた二人が飛び出してきた。大男が憎しみに満ちた目を見開

き、チハルの裸身を睨み付けた。

「またペニスを突っ込まれて泣きたくなつたかい」

低い声が響き、大男の右手でナイフが光った。ボギーを殺したコルトパイソンはハーフトラックの中に隠したらしい。後ろに続いた貧相な男もナイフを抜いた。

「よう淫売、何とか言つたらどうだい。いつまでも素っ裸でいると風紀係のお巡りさんがパクリに来るぞ」

右手に下げるレミントンを認めた大男が、大声でチハルを挑発した。何とか隙をつくろうとしているのだ。チハルは黙ったままレミントンの銃口を上げ、銃を腰だめに構えた。大男の表情が蒼白になり、ナイフを持った右手を高々と振りかぶって口を開こうとした。

「命乞いは聞かない」

厳しく言ったチハルが引き金を引いた。

ズガーン

静まり返ったダウンタウンに銃声がこだまし、腹に散弾を受けた大男の巨体が後ろに飛んだ。チハルはなおも引き金を引く。路上に倒れ伏した二人の黒人の身体に七発の散弾を見舞った。転がった死体が見る間にすたずたになる。飛び散った血と肉片がチハルの裸身を汚し続けた。チハルの凄惨な顔に笑いが浮かんでいる。足元に青い蛍光塗料を塗った薬夾が七つ転がっていた。

チハルは殺人罪で逮捕されたが、結局正当防衛で無罪になった。陪審員が事件を一連のものと認めたからだ。アメリカならではの判決だった。逆にチハルは恋人の敵討ちをした英雄になってしまった。犯人が白人なら事情が違っただろうと思わないではなかったが、チハルはやるべきことをやったと確信した。しかし、コスマス・アメリカはその日のうちに退社した。チハルはアメリカの女性ではない。二人を殺した後では日本の会社には居られなかった。アメリカ人の勧めるとおり、二ヶ月間を神経科の病棟で過ごしてからチハルは日本に帰国した。去年の夏の終わりのことだった。

チハルはレミントンM1100を手に持ったまま、忍山沢の流れに降り立った。冷たい水がジャングルブーツの履き口から染み込む。岩場に座り込んでいる全裸の女を一瞥してから男の死体を見下ろした。渓流には死体を押し流す力はなかった。男は撃ち倒された姿勢のまま流水に洗われていた。素っ裸の腹に三発の散弾を至近距離から撃ち込まれた死体は、とても正視できない有様だった。かろうじて碎かれなかつた背骨が、二つになつた身

体を一つに繋ぎ止めている。褐色の肌を被った肉塊を絶え間なく流水が洗っていた。ぐしゃぐしゃになった肉の断面から、絶え間なく血が流れ出し、赤い水脈になって流れ去る。まるで水面が紅葉したようだ。赤い流れの中で揺れる白い内蔵が彩りに陰惨な色を添えている。無表情に死体を見下ろすチハルには、これといった感慨は湧かなかった。悔いもない。ただ、死体と残された女の処理が煩わしかった。死体を放置することはできないとチハルは思う。もちろん警察に通報する気もなかった。人を殺し慣れたのかなど、ふと思つて苦笑を浮かべる。肩を揺すって空を見上げると、真っ青な秋空が広がっていた。生きている煩わしさが空しく映っている。チハルが肌を合わせた男はもう、生きてはいない。何となく死が親しいものに感じられた。荒々しい暴力が静謐な死を運んでくれるのだと思った。

峻険な山稜に挟まれた谷筋を照らす日は、すでに正午を過ぎたことを教えていた。進太と待ち合わせた午後三時まで、二時間余りしかない。もっとも山系を挟んで隣り合わせた谷筋にある待ち合わせ場所へは、忍山沢を遡上して山越えをすれば三十分で着く。一時間半が死体の処理に残された時間だった。白いパジェロの始末も考えなければならない。林道を登り詰めた先の砂防ダムに、車もろとも死体を沈めるのが一番効率的だった。女の処理は後で考えればいい。まず、できることから始めるしかないと決断した。チハルは改めて岩場の上に座り込んだ女を見た。全裸の女は剥き出しの乳房を隠すのも忘れ、ほうけた顔で岩肌に尻を着けている。閉じた股間から流れ出した水脈が、日射しを一杯に浴びた黒い岩肌を濡らしている。男が射殺された恐怖で失禁したに違ひなかった。今も微かに全身が震えている。

「パジェロのキーを持って、こっちに来なさい」

チハルの呼び掛けで、女の顔に表情が戻った。細い目を大きく見開き、口を開けて驚きを示した。

「女なのね、信じられない。まさか、人殺しが女なんて、外国の兵隊かと思った」

かん高い声がチハルの神経に障った。恐怖の極限が去ったことで無能をさらけ出す。馬鹿みたいな女だ。

「もう一度だけ言う。キーを持って、ここへ來るのよ。女だって人は殺せる」

冷たく言って、右手に下げたレミントンの銃口を女に向けた。

「待って、殺さないで。服を着させて、それに水の中は冷たそうでいや」

とんまなことを平氣で言った女を睨んで、チハルは立ち撃ちの姿勢で銃を構えた。電撃

を受けたように女が立ち上がる。小柄だが、肉付きのいい豊満な裸身だ。

「お願ひ、撃たないで。私は博子。殺さないで。言うとおりにするわ」

震える声で言った女が渓流に下り、水を蹴立てて近寄ってくる。上を向いた豊かな乳房が大きく揺れた。薄い陰毛の間に大振りの性器が見える。歳は二十歳くらいだ。真っ先に名乗った事実が、チハルに世慣れた印象を与えた。他人につけ込むことが上手な証拠だ。

「まず、恋人の死体を見るの。望むならすぐ後を追わせてあげる。さあ、ちゃんと見るんだ」

厳しい声で言って博子の顔に狙いを付けた。蒼白な顔が醜く歪み、泣き顔になって嫌々をした。チハルは首を振って引き金に指先を当てた。

「見るんだ」

大声で命じると、博子は泣き声を上げて死体を見た。一瞬凍り付いたように裸身がこわばる。続けて全身でしゃくり上げて吐いた。吐瀉物が尽きても博子は吐き続けた。

「もういい。顔を洗って車に乗りな」

しばらくしてからチハルが命じた。博子は言われるままに流水で顔を洗い、おとなしく助手席に座った。絶対的な暴力は常に人を従順にさせる。チハルはボギーの屋敷に押し入った二人組に蹂躪された自分を思い出す。キュッと股間が疼くのが分かった。

「言うとおりにすれば悪いようにしない」

ゲレンデヴァーゲンを対岸に乗り入れ、林道に上がる坂を越える途中でチハルが言った。

「でも、きっと殺されるわ」

力のない声で博子が答えた。

「そうだとしても、死ぬまでは生きていられる」

意味をなさないチハルの言葉が博子に希望を与えた。今にも警察のヘリコプターが頭上に現れるような、妄想と言った方がよい期待が博子の脳裏に渦巻く。生きたいと思った。

チハルはゲレンデヴァーゲンをパジェロの後ろに止めた。博子を促して一緒にパジェロに乗り込む。狭い待避場でハンドルを三回切り替えして方向を変え、再び渓流に戻っていた。博子の話によれば、射殺した外国人は市の工学部に在籍する留学生だった。だが驚いたことに、博子は国籍すら知らなかった。父の経営するレストランでウエートレスとして働く博子が、男の膝に水をこぼしたのが付き合うきっかけだと言った。外国人のセックスに関心があつただけで、それも今日で二度目に過ぎないと他愛なく言う。パジェロは博子が父に買ってもらったもので、忍山沢へは登山好きの男が案内したと答えた。すべてが

チハルに好都合だった。二人の失踪と山地を結びつける線はない。死体とパジェロを始末すれば、すべての痕跡が博子を残すだけで消えるのだ。

「さあ、仕事よ。殺されたくなかったら、死体と違うところを見せるんだね。嫌ならすぐ殺してやる」

溪流に乗り入れたパジェロを止めて、チハルが低い声で博子に呼び掛けた。博子の裸身がすぐみ上がる。助手席のドアを開けて降りるのを確認してから、チハルも水面の上に降り立った。車体の後部に回ってリアゲートを全開にする。貨物室の中には驚くほど何もない。置き傘と運動靴、二冊の読み捨ての雑誌が荷物のすべてだった。アウトドアの必需品など何一つ無い。若い女が四輪駆動車を乗り回しても意味がないことを荷物室が証明していた。だがそれも、今の場合はありがたい。遠ざかって見つめている博子を尻目に、チハルは腰のベルトに吊った大型のハンティングナイフを抜いて死体の横に屈み込んだ。二つに撃ち碎かれた胴体からは、いまだに出血が続いていたが、それももう僅かだった。ぐしゃぐしゃになった腹から流れ出た内蔵を根元からナイフで切断する。鋭利な刃先が動いて日に輝く度に、断ち切られた内蔵が流れ去っていく。汚物の臭気が鼻孔を襲った。その汚物も内蔵もすべて、山根川に合流する前に冬を迎える魚たちの餌になるのだ。

「さあ、ぐずぐずしないで足を持つの」

手に持ったナイフを博子の顔に向けてチハルが命じた。一瞬足がすくんだ博子が諦めた顔で屈み込み、二つに裂けた死体の両足を持った。チハルは無造作に両脇に手を回して死体を持ち上げる。チハルの腰の高さまで持ち上がった死体をパジェロのリアゲートに押し込もうとした瞬間、死体の背骨が大きい音を立てて折れた。両足を持って顔を背けていた博子が、チハルの動きについていけなかったのだ。チハルの両手に上半身の重みが全部掛かった。足を踏ん張って堪えようとしたとき、川底の水苔で靴が滑った。チハルは仰向けに溪流に倒れる。頭から水没し、視界が途切れた。水を吸い込んで咽せながら博子の攻撃を覚悟した。素早く水中で横に転がり、腰のナイフを引き抜いて構える。水で揺らめく視界に、ぽかんとした顔で立ちすくんでいる博子が映った。口元に笑みを浮かべている。無能な女の前で身構えた自分が恥ずかしくなってしまう。今度は二つになった死体を慎重に持ち上げて一人で荷物室に積んだ。びしょぬれになった野戦服が肌に張り付いて不快だった。腹立ちをあらわにして運転席に乗り込むと、博子が慌てて助手席に座った。岩場で拾い上げた二人の衣服も荷物室に積み込み、溪流を後にして林道に上がった。ゲレンデヴァーゲンの前の林道の中央にパジェロを止めて、エンジンを切った。

「ここから博子が運転するんだ。二十分ほど坂道を上ると砂防ダムに出る。ダム湖の奥まで行ってから車を止めるの。道は一筋だから迷うことはない。後から私が続いていることを忘れない方がいい。分かったかい」

博子の横顔を見つめて告げると、大きくうなずき返してきた。やっと一人になれ、自分のパジェロをまかされるうれしさが全身に滲み出ている。危険な兆候だった。だが、他に方法はない。パジェロで一緒にダム湖まで行き、帰りの一時間歩く気にはなれなかった。すでに人目が無いことに賭けているのだ。今更、些細な危険を避けるには一切が遅すぎた。チハルは博子の目の前でレミントンM1100に五発の実包をゆっくり装弾して威嚇する。

「いいね、変な素振りが見えたたらすぐ銃撃する。私がホーンで合図してから発車するんだ」

博子が大きくうなずくのを確認してから路上に降り立ち、ゲレンデヴァーゲンの横に立った。パジェロのリアウインドウから運転席に移る博子の裸身が見えた。チハルは急に濡れそぼった野戦服が気になる。白い本皮シートを濡らすのもいやだった。服を脱いで裸になることに決めた。レミントンをゲレンデヴァーゲンに立て掛け、無造作に幅広いベルトを外して、上着を脱ぎ去る。黒いタンクトップも濡れていた。迷いもなく脱ぎ捨てると、引き締まった白い胸があらわになった。盛り上がった乳房の上に細かい水滴が浮いている。続いてズボンを脱ごうとした。裾をジャングルブーツに潜らすのに手間取っていると、パジェロのエンジン音が鳴り響いた。バックミラーで服を脱ぐ姿を見つめていた博子が、チハルの隙を突いたのだ。両足首まで下ろした濡れたズボンのお陰で、チハルは両足を縛られているのと同じだった。無様に尻を後ろに突きだし、両手でズボンの裾を引っ張っている。しまったと思った瞬間タイヤが鳴り、パジェロが発進した。チハルの口に苦笑が浮かぶ。やっと脱ぎ去ったズボンと上着を丸めて素肌の水滴を拭ってから、運転席に座った。慎重にシートベルトを装着してハンドルを握る。アクセルを踏み込むと力強くタイヤが路面を噛んだ。うねうねと続く坂道を十分ほど走ったころ、前方のカーブに切り込んでいくパジェロのテールが見えた。やはり博子の運転は下手だ。追いつくのは簡単だった。チハルが唯一怖れたのは博子が車を捨てて山に逃げ込むことだった。だが、町育ちの博子に素っ裸で山に分け入る勇気はない。後は事故を誘発させないように注意して、ゆっくり追尾して行くだけだった。

やがて沢の前方に、コンクリートで固めた砂防ダムの堰堤が見えてきた。道は大きくカーブしてダム湖の左岸に回り込む。左側は鬱蒼とした広葉樹林が黄色くなった葉を広げて

いる。右側は切り立った崖で、三メートル下に黒々とした湖水が広がっていた。パジェロは直線に近い道を、スピードを上げてダム湖の奥に進む。だが、空しく急停止するブレーキ音が静けさの中に響き渡った。ダム湖に開いた道の先は赤い車止めで閉じられていた。ダム工事のための取り付け道路が終点のダム湖で途絶えたのだ。ゆっくり追尾していたチハルも、笑いを浮かべて停車した。悔しがって歯ぎしりする顔が見えるようだ。シートベルトを外そうとすると、五メートル前で止まったパジェロがいきなりバックしてきた。追突の衝撃がチハルを襲った。シートベルトが素肌に食い込む。必死にブレーキを踏み込んでパジェロに抗う。諦めたようにパジェロが前進する。再びバックして追突してきた。今度の衝撃は弱い。チハルもアクセルを踏み込む。二台のエンジン音が轟いたが、ゲレンデヴァーゲンが勝った。パジェロのエンジンが止まり、じりじりと後退していく。ついに車止めまで追い詰められたパジェロの運転席が開き、博子が飛び降りて走り出す。続いて車を降りたチハルの裸身が後を追った。山に逃げ込もうとする寸前で博子に追いつき、大きな尻をジャングルブーツで蹴り上げた。ひとたまりもなく裸身が倒れ伏す。淫らに上下する白い尻をチハルが無慈悲に踏みにじった。博子が悲鳴を上げる。

「ごめんなさい。二度としません、殺さないで、ねえ、殺さないでください」

鳴き声で訴える博子を荒々しく引き起こし、ゲレンデヴァーゲンのリアゲートの前に追いや立てていった。

「縛り上げるしかないよね。これから山を下りるんだから、反抗できないように厳重に縛る。さあ、背中に両手を回しな」

荷物室のコンテナから取り出した麻縄を持って、怖い声でチハルが命じた。博子が震える手を背中に回す。ざらついた縄の感触が博子の素肌を縦横に這った。菱縄後ろ手縛りに緊縛されたふくよかな裸身が、厳しい縄目に泣く。股間を縦に縛った二本の縄が性器を挟んで厳しく陰部に食い込んでいた。股が切れる恐怖で博子は身動きもできない。

「荷物室に上がって胡座をかくのよ。早くしないとその格好で殺す」

威嚇の声に急かされて、博子は縄目の痛みに泣きながら荷物室に上がった。チハルが狭い室内で無理に胡座をかかせる。交差した両足首を縛り上げ、伸ばした縄尻を首の両脇を通して後ろ手に繋いだ。ゆるい海老責めにした裸身を点検してからリアゲートを閉めた。なぜ博子を殺さなかったのかチハルにも分からぬ。関係が深まりすぎて殺せなかつたのかも知れないし、生け捕りにした獲物をこれから会う進太に見せたかったのかも知れなかつた。どちらにしろ危険なことに変わりはない。しかし、チハルはもう三人の命を奪つて

いた。これ以上危険なことがあるなら体験してみたいとさえ思う。たまらなく荒んでいく心が愛おしくてならなかった。引き締まった小柄な裸身を秋風が渡っていった。

チハルは後部が潰れたパジェロを崖っぷちに引き出し、ゲレンデヴァーゲンで押し出してダム湖に突き落とした。そのまま元来た道を下って溪流を遡航し、築三百年の屋敷がある谷間へと続く山越えの林道に入っていった。

築三百年といわれた屋敷の廃墟は、山を挟んで忍山沢と隣り合った谷間にあった。山根川沿いの街道へ続く道と、チハルが下ってきた山越えの細道が合流した先に、屋敷へ向かう私道が真っ直ぐ延びている。ちょうど三叉路になった交差点の中央にゲレンデヴァーゲンを止め、チハルは上り勾配になって長々と続く私道の奥を見つめた。鬱蒼と草が生い茂った、道とも見えないグリーンベルトの尽きるところに黒い固まりが見える。斜めに傾いだ茅葺き屋根を頭上にいただき、はげ落ちた白漆喰の下の土壁を露出している長屋門は、まるで秋の日射しを吸い込んで微睡んでいるように見えた。だがそれは、決してほのぼのとした風景ではない。郷愁も誘いはしない。林業で栄え、山地を支配した分限者の建造物は、町育ちのチハルに嫌悪と威圧感を与えた。近寄るもの拒絶する不遜な匂いがした。

「百姓の驕りだ」

小さく吐き捨てて、チハルはアクセルを踏んだ。直列六気筒のエンジンが吼え、草の波を押し分けてゲレンデヴァーゲンが突進する。瞬く間に二百メートルの私道を走破して門前に出た。フロントガラス越しに見上げた長屋門は、三叉路から見たときより損傷が激しい。破れた天井から巨大な梁が斜めになって地上に落ち、よそ者の入門を拒んでいる。チハルは三角形に開いた空間に無理矢理車体を突っ込む。フロントバンパーが落ちた梁に当たり、鈍い衝撃音が上がる。破れた天井から土くれが落下し、おびただしい埃が舞った。さしもの梁も落下するのかと身構えたが、堅牢な建造物はビクともしない。土くれを見舞っただけで、あっけなくチハルを通した。目前に屋敷の敷地が広がる。テニスコートが三面も取れそうな草ぼうぼうの平地の先で、築三百年の屋敷は廃墟となっていた。高さが二メートルはある、巨大な茅葺き屋根だけが住居の一切を押し潰して存在している。だがその屋根も苔むし、草が生え、今や膨大な蒿葛が猛威を振るって全体を覆い隠そうとしていた。蒿の先で早々と紅葉した真っ赤な葉が悲しい。屋根の背後に、まだしっかりしていそうな平屋の土蔵が二棟見えた。チハルは荒れ果てた庭の中央にある、大きなキンモクセイの葉陰にゲレンデヴァーゲンを止めた。エンジンを切り、ドアを開けて草の中に降り立つ。ジャングルブーツの上の剥き出しの脚を草の棘がなぶった。引き締まった裸身がブルッと震える。助手席に手を伸ばし、濡れた野戦服とベルトを引き寄せた。熱く焼けたボンネットの上に野戦服を大きく広げて干す。ハンティングナイフを吊った幅広い皮ベルトは、そ

のままウエストに回した。濡れた皮が素肌に冷たい。素っ裸のウエストが細すぎてベルトがずり落ちる。かろうじて腰骨で止まった。座席の裏側に手を伸ばし、大型のマグライトを握った。約束の三時までに、まだ十五分もある。進太が来る前に屋敷を点検しておこうと思った。まずリアゲートに回り、背伸びして荷物室をのぞき込む。海老責めになった裸身が、苦しそうに首を上げてチハルを見た。叫び出す気配はない。もっとも、叫んだところでどうなるものではない。チハルはつまらなそうな表情で崩壊した母屋に向かった。歩みに連れて白い尻が左右に揺れる。尻の上に回した黒いベルトが精悍な裸身を一層際ださせていた。

進太が築三百年の屋敷にチハルを誘ったのは、先週のことだった。ドーム館の裏山に造ったダートコースで、ゲレンデヴァーゲンの運転を教えていたときのことだ。左右に岩を配した上り坂の途中で、進太が唐突に話し掛けてきた。

「ねえ、チハル。忍山沢の先の谷間に築三百年の屋敷があるんだ。今は廃墟になってしまったというけど、昔そこで殺人事件があったんだ。チハルは聞いたことないかな。市でも有名だったって聞いたよ。その事件にMが関係していたんだってさ。僕は、山地に来てすぐのころに、近所のお節介な婆さんに聞かされたんだ。それで、Mに確かめたこともある。Mは珍しく口をつぐんで、怖い目で僕を見たんだ。それ以来、僕は事件のことは口に出さない。だから、山地に来て七年になるのに築三百年の屋敷に行ったことはないんだ。でも、キヨミ先生は、その屋敷の主にMと知恵遅れの少女が監禁されていたらしいって言うんだ。ねえ、監禁だよ。三十年も前のことだからMも若い。きっと怖かっただろうね。少女は殺されたんだ。まるでクーチャンみたいに」

進太の頬が興奮で赤く染まった途端、左のフロントタイヤが岩に乗り上げた。二人の身体が右に傾く。

「進太、ハンドルを握ったら運転に集中するのよ。もし崖道だったら、今ごろ谷底に真っ逆さまだ」

「ごめんなさい。急に築三百年の屋敷が気になってしまった。ねえ、一緒に行ってみようよ」

素直に謝った進太が、すぐ要求を出した。チハルの口元に苦笑が浮かぶ。進太が気になっているのは築三百年の屋敷ではなく、監禁という言葉に違いないと見当を付けたが、あえて口に出さない。

「さあ、ギアをリバースに入れて脱出しなさい。どうして先生は監禁なんて言ったのよ」
脱出と監禁という言葉を投げてやると、進太はすぐ飛び付いてきた。シフトチェンジもせずにチハルの横顔を見た。頬が赤くなっているのが分かる。

「虐めだよ。でも、僕じゃない。クラスの女の子が体育館の準備室に監禁されたんだ。いつもの悪ふざけさ。きれいでおとなしい子は男子の悪仲間に狙い打ちにされるんだ。その日も女子が準備室で着替えをしていたときに数人が乱入して、逃げ遅れたその子の体育着を奪って戸を閉めてしまったんだ。かわいそうに女の子は上半身裸だった。準備室の隅に後ろ向きでうずくまつた姿を、のぞき窓から男子たちが代わる代わるのぞくんだ。あいにく次の時限が自習だったから、パンツ一枚の女の子は一時間も監禁されていた。僕は先生に通報しなかったといって、小学校のキヨミ先生にまで叱られた。虐められた子は、先生たちが僕に勉強を見せさせたがっていた子の一人だ。早く勉強を見てやらないから虐められるんだと言って、暴力の卑屈さを説教したよ。知識を磨かないから暴力に屈するんだってさ。監禁に負けなかったMは偉いんだって。僕には関係ない。迷惑だよ。チハルもそう思わないかい」

「進太も、その女の子をのぞき見したのかい」

「いや、しないよ。するわけがない」

ムキになって進太が答えた。思わずチハルが笑い出す。

「そう、本当は裸で監禁された女が見たかったんだろう」

チハルの言葉で進太の顔が真っ赤に染まった。頬を膨らませて口を突き出す。

「女の裸なんて興味ないよ」

即座に答えた声は、すっかり変声した低い男の声だった。

「へー、そうなの。でも、監禁された女には興味があるんだ。暴力に屈して素っ裸で縛られていたりしたら、それこそ最高なのと違う」

意地悪く言って、ハンドルを握り締めて怖い顔をしている進太の股間に手を伸ばした。気配を察し、進太が飛び上がるよう手を避けたが、チハルの指先に、硬く勃起したペニスが触れた。

「いいわよ。築三百年の屋敷に一緒に行こう。Mの事件も図書館で調べてやる」

チハルが言うと進太がうなずき、やっとゲレンデヴァーゲンをバックさせて車体を立て直した。どうやら、進太は性の迷路に踏み出したらしかった。Mとよく似た興味のありようが、チハルには面白くてならなかった。来週の日曜日に、一緒に屋敷を訪れる約束をし

た。だが、進太は実力テストがあるので午後三時に現地で合流するという。チハルには、休日のテストを儀式に受ける進太が不思議でならない。不登校を気にする気配もない進太も、テストには目がなかった。必ず一番になる成績が内心自慢でならないのだろうと思う。屈折したプライドがかわいくてならない。進太も、微妙な心理の襞を理解してくれるチハルがうれしい。最高の友達だと思った。しかし何よりも、意識できない暴力への憧れが、進太をチハルに引き寄せていた。

市立図書館で調べた、地方新聞のバックナンバーの記事をチハルは面白く読んだ。二十六年前の築三百年の屋敷に住んでいたのはカメラマンの男と、精神障害者の妻だ。記事によると、中年のカメラマンはMと精神障害者の少女を屋敷に監禁したあげく、性的に虐待したらしい。三人で繰り広げた性の饗宴の最中に男が少女を殺した。その死体を遺棄しようとしてMと一緒に出掛けた日本海で、男は断崖から海に身を投げて自殺したという。警察に自首したMは死体遺棄の罪で刑を宣告されたが、執行を猶予された。それが事件のあらましだった。だが、今のチハルには簡単に過誤を見付けることができた。少なくとも、Mは監禁されていたはずがないと確信した。Mは自ら望んで異常な環境に身を置いたはずだった。それが、これまでのMの生き方の出発点になったに違ひなかった。築三百年の屋敷を、ぜひ見てみたいとチハルは思った。

チハルは草の中に屈み込んで、崩れ落ちた母屋の隙間からマグライトの光を当てた。だが、ぽっかりと空いた土壁の隙間の先は、白茶けた泥と黒い建材の残骸で埋まっていた。性の饗宴を忍ぶよすがなどどこにもない。かび臭い匂いだけが鼻孔に残った。仕方なく母屋の裏に回る。大地にしりもちをついた巨大な茅葺き屋根が日を遮っているためか、裏庭の草は丈が低い。広大な敷地にからうじて残った二棟の土蔵は、すぐ裏手に迫ったクヌギ林に呑み込まれそうに見えた。右手の土蔵の陰に、石で築いた湧水の洗い場があり、中央の窪みから清澄な水が湧き出していた。土蔵の分厚い扉には錠が下りていない。一段高くなかった石の台に乗り、チハルは力いっぱい扉を引いた。扉はビクともしない。諦めて左手の土蔵に回り、同じように扉を引く。今度は手応えがあった。鈍いきしみ音を立て、土の扉が手前に開いた。埃の匂いのする乾いた空気が流れ出てチハルの裸身を覆った。土蔵の中は十畳ほどの板の間の空間だった。中央に立った太い柱が天井の梁を支えている。古びた堅牢な造りだが、天井は低い。文庫にでも使われていたらしく、四隅に棚があり、窓はなかった。中に入ってマグライトで空間を照らし出す。収納物らしき物は何もなかつたが、

東側の床に木製の椅子とテーブルが置いてあった。テーブルの上には、バケツと長い柄付きのモップが載せてある。だが、どう見ても最近使われた形跡はない。チハルの口元に笑いが浮かんだ。博子を監禁する場所が簡単に見付かったのだ。ひょっとすると昔、この太い柱に素っ裸のMが縛り付けられたかも知れないと想像したら、おかしさが込み上げてきた。開け放たれた扉から、遠くエンジン音が聞こえた。かん高い、耳に障る響きだ。進太のバイクに違いなかった。チハルはマグライトを消して、まぶしい戸外に出た。

急激にエンジン音が高まり、長屋門から緑色のモトクロス・バイクが飛び込んできた。カワサキのKX60に跨った進太はヘルメットも被っていない。ゲレンデヴァーゲンのリアゲートの前で迎えるチハルの目が厳しく光った。

「ごめん、待たせたかな」

チハルの前でバイクを止めた進太がエンジンを切って、素早く飛び降りながら声を掛けた。ホワイトジーンズに白いトレーナーを着ている。清潔そうな衣服が甘えた声によく似合っていた。

「ヘルメットはどうしたのよ。自分の身を守る努力をしない奴は嫌いだと、いつも言ってあるだろう」

厳しい声でチハルが叱責した。進太は肩をすくめてうなだれてしまう。真っ直ぐチハルを見ることができなかった。素っ裸で、ナイフだけを腰に吊した姿が目にまぶしい。これまで何回となく見た裸身だが、今日は特に美しいと思った。そっと上目遣いに見ると、きれいに陰毛を剃り上げた股間が目に入った。無惨に裂けた陰唇の間から、ピンク色の性器がのぞいている。鼻の奥から暴力の匂いが立ち上がった。たまらなくチハルが愛おしかった。

「ごめんなさい、きっと怒られると思ったよ。でも、最後の数学の試験が難しくて早く帰れなかつたんだ。時間が惜しくてメットを取りに行けなかつた。怒られるのを承知でバイクに乗つたんだ。部屋には寄らなかつた。ほら、荷物もある。でも、ごめんなさい」

一息に言ってから、横を向いて背中に背負つた黒いリュックを見せた。ひょうきんな仕草に、チハルの表情が緩んでしまう。まったく女扱いがうまいと思って、末恐ろしくなつた。

「次から気を付けなさいよ。で、試験はどうだった」

「もちろん、うまくいったよ。今度も、市で一番は間違ひなしさ」

即座に答えた目が輝いていた。チハルは吹き出したくなるのを堪えて、進太の目を見つ

めた。

「そう、それじゃあ褒美を上げよう。進太にぴったりのプレゼントだ」

進太の目を見つめたまま言って、さり気なくリアゲートを開けた。荷物室に向けられた進太の目がまん丸になる。

「アッ」

声にならない驚きが進太の口を突いた。狭い荷物室の床で海老責めになった博子が顔を上げ、キッと進太の目を睨みすえる。

「なあに、嫌よ。何でこんな子に恥ずかしい姿を見られるのよ。早く、向こうに行ってよ」

博子が叫んだ。あまりに怒りが激しすぎて、進太には言葉が聞き取れなかつた。ただ、素っ裸で後ろ手に緊縛され、海老責めにあつてゐる女が顔を赤くして叫んだことだけは理解できた。女の声を聞いた途端に、全身が火照り、股間が熱く疼いた。きっと勃起するなど、投げやりな気分で思い、前に立つチハルに視線を戻した。

「気に入ったでしよう。今朝の獵で生け捕りにした獲物だけど、進太にあげるよ。名前は博子。逃がさない限り、好きに飼つていい。飼う場所もさつき見付けた。きっと三十年前に、Mが監禁されていたところだと思う」

「つまり、僕たちが博子さんを監禁するんだ」

チハルの言葉に応えた声が震えていた。高々とペニスが勃起している。チハルに気取られないよう、僅かに身体を横に向けた。腰にぴっちりしたジーンズの股間が盛り上がっていいる。チハルと博子の視線が同時に股間に注がれた。

「ウッワー」

博子の口から嬌声が上がつた。

「飼うですって、監禁ですって、何を言うの。人殺し、早く殺してよ。こんなガキに辱められるくらいなら、死んだほうがましよ。さあ、早く殺して。殺さないなら自分で死ぬ」

狂ったように海老責めにされた裸身を揺すつて博子が叫んだ。今にも舌を噛み切りそうな気迫が満ちる。素早くチハルが左手を伸ばし、博子の鼻を摘み上げた。息苦しさで開いた口に、無造作にハンティングナイフの背を噛ます。博子の口先で鋭利な刃が光つてゐる。金属の酸っぱい味が口中に広がる。唇を切られる恐怖が全身を走つた。死ぬより恐ろしいと思った。博子の全身から力が抜け去り、ナイフをくわえた口元だけが震え続けた。死の恐怖すら暴力は屈服させるのだ。進太は陶然とした気持ちでチハルの行動を見ていた。石

のように硬くなったペニスがジーンズの中で暴発し、射精した。精液の生暖かい感触が股間に広がる。真っ白になった脳裏にチハルの冷たい声が響いた。

「いつまでも、ナイフをくわえさせとくわけにはいかないね。博子には猿轡が必要だ。進太、ジーンズの下には何を穿いてるんだい」

「グレーのビキニショーツ」

突然声を掛けられた進太が、反射的に答えた。射精を見咎められた気がして、見る間に頬が真っ赤に染まる。

「そのパンツを博子にくわえてもらおう。進太、すぐパンツを脱ぐのよ」

チハルがナイフの柄を持ったまま命じた。進太がもじもじしていると、すかさず叱責が飛ぶ。進太は仕方なく後ろを向いてズボンを脱いだ。グレーのビキニショーツは、股間が精液で黒く濡れていた。恥ずかしさを耐えてショーツを脱ぎ、ズボンを引き上げながら丸めてチハルに渡した。

「もー、こらえ性がない。いつの間に漏らしたのよ。こんなパンツを口に入れるんじゃ、いくら何でも博子がかわいそうだ。でも、私も、博子も素っ裸で下着がないんだから仕方ない。我慢してもらうよ」

楽しそうに言ったチハルがショーツをひらひらさせてから、また博子の鼻を摘まみ上げた。大きく開いた口からナイフを抜き取り、代わりに進太のショーツを口中に押し込む。博子の鼻孔を精液の匂いが掠め、舌先を濡れた布切れが圧した。生臭い味と匂いで喉元に吐き気が込み上げてくる。吐きそうになった瞬間、海老責めにした縄が解かれ、急に身体が楽になった。胡座縛りにした縄もチハルが解き去る。博子はチハルに命じられたとおり、痺れ切った両足を伸ばした。荷物室に尻をついたまま足を車外に垂らした。痛みに似た痺れが全身に伝わっていく。口に詰められたショーツを吐き出せぬように、二本の麻縄で猿轡を噛まされた。博子の目に涙が滲んだ。

「博子の飼い方と扱い方は、これから私が教えて上げる。その前に確認するけど、進太はこの女を譲り受けて、死ぬまで監禁する気構えはあるのかい。無いなら、今はっきり言うのよ。始末は私がするから、進太は気にしなくていい」

立ち上がったチハルが厳しい声で問いただした。進太の頬が赤く上気する。

「僕に監禁させてよ。一生面倒を見る。クーチャンにしてやりたかったことを全部したいんだ」

迷わず答えた進太が、またクーチャンの名を出したことを、チハルはいぶかしんだ。昨

年アメリカから帰ってきてすぐ、ワサビ田の水貯まりで殺されていた知恵遅れの少女にはチハルも会ったことがある。よく泣く少女だった。毎晩深夜に進太の部屋の窓の下にたたずみ、声を立てずに泣いていた。それも素っ裸で泣いている。五分間ほどの短い時間だが、見てしまった自分には耐えられないと、ドーム館に帰国を歓迎に来た進太が話していった。殺してやりたくなると洩らした言葉に、進太には無理だから、私が代わりに殺してやると答えた覚えもある。帰国したばかりで、身に染みついた暴力と、発散し尽くしてしまった暴力の記憶が生々しすぎて、地に足が着いていない時期のことだ。あのころの記憶は今もぼやけている。だが、蔵敷の横にたたずみ、二階の窓を見上げて泣き続ける少女の姿が、目に焼き付いているのも事実だった。硬い質感の、真っ白な裸身をよく覚えている。そのクーチャンが進太の性の中で、それほど重要な役割を負っていたとはチハルも気付かなかった。滅び去った生が、高まりを求めていく性を、あっけなく躊躇していく予感がチハルの背を掠めていった。

「さあ、監禁室に行こうか」

気分を変えるように言って、チハルが博子の縄尻を引いた。うなだれた博子の裸身が地上に降り立つ。股間に縦に縛った縄目の痛さに眉をしかめ、博子はよろよろした歩みで曳き立てられていく。土蔵までは結構長い距離になるが、草原に轍が残ることを怖れてゲレンデヴァーゲンは使わない。チハルは途中で縄尻を進太に握らせ、三人の先頭に立って土蔵に向かった。

土蔵の中央に立つ柱に博子を立ち縛りにさせてから、チハルと進太は必要な品を取りに車に戻った。荷物室のコンテナを開けてコールマンのランタンと手動ウインチ、用水タンク、予備の縄束を取り出して土蔵に運ぶ。二棟の土蔵の間に捨ててあった黒い篠竹も数本拾ってきた。食料は明日そろえることにする。

「博子はダイエットした方がいい」

チハルがつぶやくと進太が笑った。二人で大笑いしながら土蔵に戻った。薄暗がりで立ち縛りにされた博子の裸身がギクッと震えるのが見えた。

「いいかい、進太。博子の飼い方を教えて上げるからよく聞くんだ。まず、いつでも素っ裸にしておく。間違っても服を与えてはいけない。万一逃亡されても、裸なら動きが鈍る。そして、いつでも拘束しておくこと。厳しく緊縛するのは罰するときだけでいいが、必ず手か足を縛っておく。明日私が市に行って頑丈な鎖と首輪を買ってきてやる。この柱に太い鎖で繋いで置けば間違いないが、油断は禁物だ。反抗心を芽生えさせないためにも、一

緒にいるときは必ず縛れ。トイレは外でさせるか、ここでバケツにさせる。始末は必ず進太がする。情を移すと必ず問題が起きる。いいわね、この扉には目立つ外鍵は付けられない。完全な拘束を心掛けなさい。万一死ぬことがあっても構わない。始末は私がするから、すぐ呼びなさい。図書館で調べたMの事件でも、逮捕されたときのMの身体には縄目の痣と、鞭打たれた痕が随所にあったというわ。監禁されるとは、そういうことなの。進太の思い通りにしてみるがいいわ。だめだったらすぐ、私を呼びな」

チハルの説明を、進太は目を輝かせて聞いた。大人の博子を子供の進太の手に委ねる事に不安も湧いたが、博子を殺さずに連れてきたのはチハルだった。今更悔いる必要はなかった。行き着くところまで行くしかない。これで進太が、いきさかなりとも変われば、私は人を殺した価値があると思い定めた。

「さあ、これで私は帰る。進太もいつもの時間に帰りなさい。大胆に振る舞わないと、足元を見透かされるからね。いい、築三百年の屋敷に来た甲斐があったでしょう」

大きくうなずく進太にうなずき返し、チハルは土蔵を出た。事が露見しなければ、博子は一ヶ月は生きられるだろうと思った。しかし、確実に短命で終わる。頭上を見上げると、青い空が広がっていた。長い一日が、まだ終わらないことがチハルには不思議だった。

進太は人目を避けるようにして、築三百年の屋敷の土蔵に通い続けた。もう二週間になる。古ぼけた土蔵で博子と過ごす時間は、学校より、家より、そしてチハルと遊ぶより清冽で濃厚な刺激に溢れていた。始めのころは一日中博子と過ごす日が続いた。今日も、登校時間前の人気が少ない時刻を見計らってバイクを走らせている。しかし、最近は土蔵に行くことが楽しくない。義務で出掛けているような気がした。不満と苛立ちが募っている。正直言って、博子を見たくなかった。このごろの博子は薄汚く、妙な臭気がした。あれほど刺激的で、見る度に心が躍った裸身がまるで嘘のようだ。豊かで滑らかな曲線を持った大人の女が、化け物に変わってしまうなんて、信じられなかった。博子に裏切られたような気さえする。今日もまた、醜い裸身を手酷く虐めてやろうと決心し、どす黒く染まる心の荒みに耐えてハンドルを握り締めた。

「お願ひ、早く鎖を外して」

土蔵の扉を開けた途端に、掠れた声が進太を迎えた。声とともに、何とも言えない嫌な匂いが鼻孔を打った。残飯や糞尿、腐った肉や野菜、吹き出物から染み出す膿、死にかけた獣、考えられる限りの悪臭をカクテルして投げ捨てたような臭気だ。

「お尻の穴にペニスを突き立てられても我慢するから、早く鎖を外して」

また博子が呼び掛けてきた。進太は顔をしかめたきりで反応しない。土蔵の空気が外気と入れ替わるのをじっと待った。きっかり十分間待ってから、渋々中に足を踏み入れた。開いた扉から射し込む朝日が、荒廃した空間をぼんやりと照らし出している。化け物は太い柱に鎖で繋がっていた。見る影もなく痩せた博子の首に、厚い鋼鉄の首輪がはめられている。首輪を止めた大型の南京錠から太さ八ミリメートルの鎖が延び、柱を一回りして別の南京錠で止めてあった。鎖の長さは三メートルある。重さは十キログラムだ。引きずつて歩くだけで大変な苦痛が伴う。首輪というより首枷といった方が当たっていた。その重い鎖が鈍い音で鳴った。素っ裸で床に身を横たえていた博子が起き上がる。また激しい異臭が進太の鼻を打った。

「まだ寝ていろよ」

眉をしかめて命じながら、進太は棚に置いた篠竹を手に取る。高々と振りかぶってから憎々しげに打ち下ろした。汗と埃と汚物で汚れた博子の裸身を篠竹の笞が打った。低い悲

嗚を上げて博子がうつ伏せに倒れ伏す。剥き出しになった尻を狙って進太が笞を振るった。あれほど白く豊満だった博子の尻は衰え、尻全体が黒い痣で覆われていた。盛り上がった傷跡が再び激しく打たれ、膿が飛び散る。横たわった裸身が、打たれる度に痛みで震えた。もはや悲鳴すら出ない。ついに篠竹の笞が折れた。博子は苦痛の絶頂で失禁し、脱糞した。

「汚いな、また漏らしたのか。先週まではこんな事はなかったのに。僕を馬鹿にしてだらしなくしているからだよ。今日は始末してやらない。明日の朝まで食事も抜きだ。願いどおり鎖は外してやるけど、後ろ手に縛ってやる。どっちが苦しいか、よく考えながら反省するんだ。心を入れ替えてきれいな身体に戻ったら、これまでと違って優しくするよ。週一回は服も着せて上げる。どうせチハルは来ないんだ。僕が約束する。だから、もう一度きれいになってよ。今の博子は醜いよ」

博子の横に屈み込んで話す進太の目に涙が滲んだ。横たわった博子の耳を泣きそうな声が横切っていく。博子も泣きたかったが涙は出ない。よろよろと起き上がって正座し、細くなった両手を背中で組んで縄を待った。

「ああ、やっと素直になってくれたね。でも、罰は罰だ。立ち縛りにするよ。罰が終わったらMの服を持ってきてやる。明日の朝は着飾って一緒に庭を散歩しよう。石鹼も持ってくる。シャンプーも一緒だ。身体を洗って、髪を洗おう。何で僕は気付かなかつたんだろう。監禁してから一度も博子を洗ってない。汚れるのは当たり前だよね」

高揚した声が土蔵に響いた。目の前におとなしく組まれた博子の両手に麻縄を潜らす。博子を縛り上げるのは、もう慣れた作業だった。後ろ手に緊縛してから、首にはめた重い首枷を外した。博子の口から溜息が漏れる。進太の胸に愛しさが込み上ってきた。何といっても、博子は初めての女だった。再びきれいになってくれたら、今度こそ優しくしようと心で誓った。だが、甘い顔ばかり見せられない。チハルが言ったように、恐怖心を忘れさせてはならないのだ。進太は鋼鉄の首枷の代わりに麻縄を博子の首に回した。縄尻を天井の梁に潜らせて右手に持つ。

「さあ、立ち縛りにするよ。でも、首を吊った縄は正座できるくらいに延ばしておく。疲れたら座るといい。たった八時間だ。最後の罰になるといいね。僕も本当は博子を罰したくないんだ。だから、きれいになってくれ。ずっと、一緒に遊びたいんだ」

正座した博子の耳を勝手な言葉が流れていった。何の感慨もない。ただ、暴力に慣れきってしまった身体が悲しかった。両足に力を入れて立ち上がる。汚れきった顔を正面に向けて胸を張った。二条の縄で縛り上げられた乳房が惨めに突き出ている。久しぶりに乳首

の先が硬くなった。進太が見つめる煤ぼけた裸身が一瞬きらめいた気がした。後ろ手に縛られて直立した、痩せた裸身が妙に美しく見える。全身から立ち上る異臭も気にならなかった。進太は引き寄せられるように近寄り、博子に顔を寄せた。込み上がってきた嫌悪感を押し殺し、博子の汚れた口に唇を付けた。博子の裸身が微かに震える。その瞬間下腹部が熱く疼いた。勃起してきたペニスをなだめるように身を引き、そのまま裸身に背を向けて進太は土蔵を出た。重い扉を閉めた途端に、身を捩って射精してしまった。

立ち縛りにされた博子の裸身を闇が覆っている。重い土の扉はぴったり閉まり、光の射し込む隙間もない。真の闇だ。しばらくすると肉体が闇に溶け込んでしまう。縄目の痛さと、鞭打たれた素肌の痛み、そして全身の苦しさだけが芯のように闇の中で立ちつくす。苦しさに身悶えしたときだけ縄目がきしむ。その微かな音だけが、博子に肉体を思い起こさせた。素っ裸で後ろ手に緊縛された屈辱の姿だ。だが、土蔵に監禁されてから博子は鏡を見たことがない。どれほど恥辱に満ちた姿態を晒したとしても、もう博子にはその姿を思い描くことができなかつた。

「そんなに醜いのだろうか」

闇の中で声に出してつぶやいてみた。進太が何回と無く嫌悪を込めていった言葉だ。きっと醜いのだろうと博子は思う。これまで見たことのある醜さを一心に思い描いてみたが、どの映像も現在の自分とは繋がらない。一切のイメージが現実から遊離してしまっているのだ。不安定な気持ちが闇に満ちた。両足の狭い面積で身体を支える立ち縛りの苦しさが早くも全身を襲つた。博子は膝を折つて、ざらつく床に正座した。腫れ上がつた尻に踵が触れる。痛みが背筋を走つたが、たとえ自分の肌でも、触れ合う肌が愛おしかつた。枯れていた涙が湧きだしてくる。込み上げてきた悲しみにうなだれると、天井から吊つた首縄が喉を絞めた。このまま膝を崩して突つ伏せば、確実に死ねるのだと思った。これまで死ぬ機会は何度もあった。しかし、暴力の恐怖が死ぬことを許さなかつた。でも、今日は違うと博子は思った。進太が言い残していった希望が空しい。進太は、もう一度きれいになれば優しく接したいと告げて去つたが、ぼろぼろになつた身体が元に戻らないことは博子が一番よく知つてゐる。たとえバスルームが用意され、キッチンが整つたとしても、それは無理な話だつた。崩壊してしまつた精神が、何よりも肉体の再生を拒否している。博子は生きながら死んでいくだけだった。そんなことも理解できない進太は、まだ子供なのだ。夢のような希望が本当に空しい。歯がゆくて身悶えすると、股間の奥が妙に疼いた。

思えば、博子の肉の奥を最後に占有したのは進太のペニスだった。後ろ手に縛り上げた博子を犯そうとした進太は、陰部にペニスが触れた途端に射精してしまった。当然、初めてのセックスだったに違いない。その後、博子は何度も犯されたが、進太を犯しているという印象の方が強かった。未熟な性をもてあそんでいるとさえ思ったほどだ。このまま進太と官能の高まりを求めて暮らす世界もあると、心の隅では念じてきた。だが、チハルに殺されるしかなかった命と引き替えに官能を選ぶことはできない。その一点で進太と同じスタートラインに並ぶわけにいかなかった。死を許される代わりに性に従うことは、性の奴隸になることだった。いったん甘んじたその地位を、一週間で博子は捨てた。官能よりも大切なものがあると思ったかった。そして今、それが死だったことが分かった。結論はあまりにあっけなく、空しかった。でも、生き地獄よりはましだと博子は思った。

「死んでやるわ」

声に出して叫んだが、闇の中に応えはない。どす黒い思念だけが真言となって鳴り響いた。

「ウッ！」

無言の気合いと共に博子は膝を崩した。首縄が喉を絞める。一気に呼吸が止まり、頭の中が真っ赤になった。憎々しいチハルに死に様を見せられないことだけがひたすら悔しかった。

進太は街道に合流する手前でバイクを止めた。じっと耳を澄ませ、通り過ぎる車両がないことを確かめてから街道に出る。可能な限り山道を走ったため、街道を走るのはたった数分に過ぎない。だが、無免許の進太はやはり緊張する。今朝は特に、理由のない不安が胸の底に沈んでいるようで気が重かった。立ち縛りにして放置してきた博子の裸身が目の前にちらつく。蔵屋敷に続く枝道に入ったところで進太は肩の力を抜き、ヘルメットの黒いサンバイザーを上げた。遠くに見える疎水沿いの梅並木の手前に白いワゴンが駐車してあった。見覚えのある車だった。中学校の担任の秋山の車だ。面倒なことになったと眉をしかめたときにはワゴン車の直前に迫っていた。左右のドアが同時に開いた。運転席から秋山、助手席から白田清美が降り立つ。もう逃げ隠れはできなかった。

「進太、どこに行っていたんだ。留守番の歯医者さんは学校に行ったと言っていたぞ。嘘はだめだよ。Mさんが市のコンピューター学校に通いだしたからといって、目を盗むような真似はよせ」

バイクを止めた進太を、秋山が一喝した。進太の頬が真っ赤に染まる。Mの目を盗んだという言い掛かり以外は真実だった。それだけに、言い掛けりが胸に応えた。

「僕の不登校は毎度のことでしょう。行って来ますと言う言葉を、歯医者さんが勘違いしただけです。Mには関係がない。不登校を理解してくれています」

大声で進太が答えた。

「進太ちゃん、まずバイクのエンジンを止めなさい。秋山先生も頭から叱りつけないでください」

大きな目で進太を見つめて清美が言った。横に並んだ秋山の顔が真っ赤になる。進太はエンジンを止めた。疎水の回りに静寂が戻った。

「清美さんは進太に甘すぎます。悪いことは悪い、良いことは良いと、はっきり伝えるべきでしょう。進太も甘えていないで、そろそろ学校に出てくるんだ。自分勝手なことばかりしているから友達ができないんだ。だから虐められる。いくら勉強ができたってだめだ。学校に来い」

興奮した声で進太を叱った。今度は清美も黙っている。進太が答える番だ。しおらしくうなだれていた方が早く済むが、今朝の進太は気が立っていた。

「僕は虐められるから学校に行かないんじゃない。自分勝手もしていません。少なくとも、先生みたいに意見を強制したりはしない。勉強ができるのは生まれつきですし、友達もいます」

「そんな生意気ばかり言ってるから、クラスメートと協調できないんだ。いいか、うちの学校は小学校から中学校まで一クラスで、みんな顔見知りだ。先輩も後輩も家族のように付き合っている。進太はなぜ仲間に入らないんだ。本当はみんなとワイワイやりたいんだろう。なあ、強がりはよせよ」

進太の答えに拳を握り締めた秋山が、今度は泣き落としできた。仲間と楽しくやりたくない変人がいるとでも思っているみたいだ。だが、そんな奴はどこにもいない。進太も学校の仲間に溶け込みたいと思う。むれあうことを嫌う人間はいない。誰だって自分の役割を認めてもらいたいし、そこで安住したいのだ。進太の目に涙が滲んだ。

「進太ちゃんに、ちょっかいを出す子がいるのは先生も知っているのよ。あんなに知恵遅れのクーチャンをかわいがっていた進太ちゃんが、なぜ面倒を見なくなつたのか、先生は理由を知っているわ。きっと進太ちゃんは、友達に冷やかされて照れくさくなつたのよね。あのころの年頃は、善い行いを冷やかされると反発したくなるのよ。それが今になって、

クーチャンを殺した犯人に疑われたりしたら、人間不信になってしまって仕方ないわ。でも、進太ちゃんはもう大きいんだから、負けちゃだめ。成長した考え方を持って、堂々と善いことをすればいいのよ。ちっとも照れくさくも、恥ずかしくもないから、ぜひ前に出て欲しいの。ねえ、進太ちゃん、勉強が遅れている女の子たちを教えて上げてちょうだい。きっとすぐ友達になれるわ、お願ひよ」

大きな優しい目が縋るように進太を見つめて言った。進太の背筋を、殺意に似た冷たさが走った。いくらキヨミ先生でも言っていいことと悪いことがある。清美の言葉は進太の神経をすたずたに引き裂いた。

「僕には友達がいます」

清美の目をじっと見つめて低い声で言った。進太の脳裏に立ち縛りにされた博子の裸身が浮かぶ。

「ドーム館のチハルさんのことね。きっといい人なんでしょうけど、あの人は先生には危なげに見えるの。よく知りもしない人を印象で物を言うのは教師らしくないけど、同じ女として言うのよ。きっとチハルさんは自分に正直すぎる人だと思う。感情をセーブしないで爆発させることができる人よ。それは危険なことなの。自分を破滅させる恐れがある。人は感情をセーブし合って生きていくのよ」

「キヨミ先生と、秋山先生のようにですか。でも、僕とチハルはセックスはしません。だから友達なんです」

勘違いして説教した清美に憎悪を込めて言葉を投げた。すかさず清美が進太の頬を張った。かん高い音が響いたが痛くなかった。じっと清美の顔を見つめた。

「ごめんなさい。進太ちゃんらしくないことを言うから、つい手を上げてしまった。謝ります。でも、先生は諦めないわ。毎日進太ちゃんを説得に来ます。きっと、学校に帰らせて上げるわ」

進太の視線を真っ向から受け止めて清美が答えた。美しい顔に気迫が漂う。進太が先に目を伏せた。

「話はそれだけですか。用事があるので、今日は学校を休みます。わざわざ、ありがとうございました」

つぶやくように言って目を上げると、清美が小さくうなづいた。進太はバイクに跨りエンジンをかけた。

「進太、大概にしろよ」

走り去る背に秋山の怒声が飛んだ。感情をセーブできないのはチハルだけではない。土壇場になれば、誰でもうろたえるのだ。チハルが人と違うところは、最後の最後まで冷静でいられるところだった。進太は久しぶりにドーム館に報告に行こうと思った。もっとも、進行方向にはドーム館以外に建物はない。

坂を上り詰めてドーム館の玄関が見えるところまで出ると、玄関先に駐車した緑色のレガシーが目に入った。祐子の車だ。進太は祐子が苦手だった。祐子はMの子分のように進太に接する。説教臭いところが大嫌いだった。玄関前でUターンして帰ろうとしたが、運悪くドアが開いて祐子が出てきた。慌ててバイクを止めた。

「あら、進太じゃないの。久しぶりね、また学校をサボったんでしょう。Mは口に出さないと思うけど、内心は心配しているはずよ。せっかくワサビ作りをやめてコンピューターグラフィックスの勉強を始めたんだから、心配を掛けちゃだめじゃない。進太はもう中学校二年生なんだから人の気持ちも分かるでしょう。Mの生き方を邪魔しちゃだめよ」

さっそく説教が始まった。進太はバイクに乗ったまま大声で答える。

「これから行くところだよ。じゃあ、きょうなら」

「嘘でしょ、嘘。チハルに会いに来たのね。いるわよ。さあ、お入りなさい。私は食料と日用品を届けに来ただけだからこれで帰るわ。ゆっくりしていくといいわ。どうせ学校には行かないんでしょう。少しはチハルのエネルギーをもらうといい。チハルと付き合うと勇気が湧くわよ。若いときの私みたいに、自殺を考える心配だけは無くなる」

祐子がしつこく話を続けたが、最後に言った自殺という言葉が進太の耳を打った。突然、緊縛した博子を一人で放置したのが初めてなのに思い当たった。罰はいつも、進太が立ち会って直接下していたのだ。全身に悪寒が走り、目の前が暗くなった。慌てて右手のアクセルを回した。エンジンが吼え、前輪が跳ね上がって車体が竿立ちになる。とっさに上半身を下げて重心を前に移す。まるで弾丸のようにバイクが突進した。進太は全神経を運転に集中して築三百年の屋敷へと急いだ。

首を縄で吊った死体は土蔵の中央に転がっていた。身体はうつ伏せだったが、喉に食い込んだ縄が頭を引き上げているため、床から六十センチメートルの高さで正面を見ている。異常に長くなった首の下で、縄目から飛び出た乳房が無惨だった。後ろ手に縛られた両手は硬く握り締められている。死ぬ苦しさに耐えて足を左右に突っ張ったのだろう。大きく開いた尻の割れ目が正視に耐えない。まるで拷問で殺された死体のように見える。だが、

確かに博子は自ら拷問死を選んだのだ。舞台設定をしたのは進太だが、演じきったのは博子だった。見下ろす進太の胸に大きな空洞ができた。寒い風が空洞を渡っていく。手酷く打ちのめされたが、博子を恨む気持ちはなかった。博子も進太を恨んでいないだろうと思った。道は二つに別れたのだ。進太は虚脱した感情を抱いて土蔵を出た。死体に手を触れようとはついぞ思わなかった。後はチハルの仕事だと、荒みきった心がうそぶく。進太は再びバイクに跨って、博子の訃報を告げるためにドーム館に向かった。

博子の死体を見たチハルは何も言わなかった。黙々と後片付けの作業を進める。首を吊った縄をナイフで切り、用意してきたビニールシートに後ろ手に緊縛したままの死体を横たえた。赤黒い索縄痕が残る首に改めて鋼鉄の首枷をはめ、長さ三メートルの太い鎖を丁寧に死体に巻き付けた。死体をビニールシートで覆い、その上から再び縄で縛ってから二人で死体を抱え上げた。初めて土蔵の前まで乗り入れたゲレンデヴァーゲンの荷物室に死体を積み込む。

「死体は砂防ダムに捨てる。進太は土蔵の掃除をしてから家に帰りなさい」

初めてチハルが口を利いた。進太の身体に開いた空洞がさらに大きく拡がる。

「僕も一緒に行って、チハルを手伝うよ」

甘える声で縋ったが、チハルは黙って首を横に振った。何事もなかった顔で運転席に座った。何の合図もなくゲレンデヴァーゲンが発進する。

進太が土蔵の掃除を終えると、博子にまつわる一切の痕跡が消え失せてしまった。ポッカリ空いた胸の空洞の中を、また冷たい風が吹き抜けていった。秋は確実に深まっていく。

6 それぞれの思い

十一月の下旬になると、市街地の樹木も紅葉の度を深める。中央公園の噴水の上に大きく枝を広げたイロハモミジが、燃え立つような赤に染まっていた。園内を周回する散歩道の銀杏並木も、もうじき黄金色に変わるだろう。Mは産業道路と交わる交差点の前に立って公園の秋景色を望んだ。山地の紅葉とは比べ物にならないが、灰色に煤ぼけた市街では鮮やかな彩りがひときわ目に映える。頬を掠める乾いた風も心地よい。正午近くの日が目にまぶしかった。昼食にするマクドナルドの大きな紙包みを抱えた制服姿のOLが二人、声高に話し合いながらMの後ろに並んだ。目の前の歩行者用信号はまだ赤のままだ。

「ねえ、交番のポスターを見てよ。あのパジェロの子はセントラルパークのシェフの娘さんですって」

「そうよ、レストランにも張り紙が出ていたわ。一昨日ステーキ定食を食べに行ったとき見たわよ」

「えっ、誰と行ったのよ。あなたが窓口当番をすっぽかしたと言って、主任さんが怒っていたわ」

「へー、あんな婆さんなんか目じゃないわよ。更年期障害の気晴らしで怒ってるだけなんだから」

背中で響く騒々しい会話をやめさせようとして、さり気なく後ろを振り向く。途端に二人が口をつぐんだ。意識して顔は見ない。二つの顔の間に視線を投げた。交番の前の掲示板にはったB二判のポスターが目に入った。手作りらしい大きなポスターにはキャビネ大の写真が貼られ、「見た人はいませんか」という見出しが躍っている。Mは掲示板に近寄っていった。二人のOLが不審そうな顔をしたが気にしない。他愛ない会話を中断させた姑息な行為だけを悔いた。まるで二人の話題にされた主任の婆さんのようだと思った。OLたちにはポスターを見るために振り向いたと思わせたかった。ちょうど信号が青に変わり、背中で数人の足音が響いた。Mは大きく息を吸い込んでから肩を落とした。腹の底からいらだたしさが込み上げてくる。改めて孤独を感じた。感じた瞬間、口元に苦笑が浮かんだ。自分らしくないとは思ったが、その自分が最近はとても遠く感じられるのだ。それは、習い初めて二か月になるコンピューターの操作が上達しない焦りからではないし、しばらく縁の無かった市街に放り出されたせいでもない。何とも言えないじれったさを明確

に意識した場所は山地だった。

三週間前の日曜日。全市共通の実力テストを受験するために、珍しく朝から登校した進太に弁当を届けに行ったときのことだ。実力テストは二年生だけが受験する。Mは深閑とした学校の雰囲気を予想していた。しかし、弁当の入った紙袋を下げて裏門から校内に入った途端、嬌声に迎えられた。狭い裏庭では、何とサッカー教室が開かれていた。進太が中学校に進学してから学校を訪れるのは入学式以来のことだったが、サッカーが盛んなことは知っていた。山地の学校で唯一残った部活動がサッカーだった。一学年が一クラスしかないため、中学生と小学生が混じり合って練習する。男女も一緒だ。Mの目の前にも十数人の背の揃わぬ子供たちが群っていた。教えてているのは褐色の肌をした外国人の青年だ。見事なドリブルに子供たちが喝采する。少し離れた場所に止めた、白いパジェロの前にたたずんでいる若い女性も手を叩いている。実力テストの会場とは思えぬ雰囲気に目を見張り、Mは子供たちの動きを目で追った。青年が身振りでボールを蹴るように告げた。子供たちが先を競って褐色の肌の回りに集まる。笑い声が裏庭に満ちた。小学生の男の子が素早く走り込んできてボールを蹴った。蹴った瞬間にボールが曲がり、裏門の横に立つMの足元に転がってきた。またひときわ高く嬌声が上がった。ボールを拾いに三人の小学生が駆けてくる。Mは笑みを浮かべて足元のボールを拾い上げた。投げ返そうと右手を振り上げた途端に、走り寄ってきた子供たちの足が止まった。にこやかだった顔が硬くなり、怯えた目でMを見つめる。Mの手も一瞬止まった。敵視するような子供たちの視線に戸惑い、青年に向かってボールを投げた。ボールは青年の手前に落ちた。再び大きくバウンドしたボールの落下点を捕らえて、長い足がシュートを放った。凄いスピードで校舎に向かって飛んだボールが玄関ドアのガラスに突き刺さる。ガラスの割れる大きな音が響いた。子供たち全員が喚声を上げ、拍手する。高揚の絶頂でエンジン音が轟いた。パジェロの運転席に座った女が素早くパジェロをスタートさせた。褐色の肌をした青年が子供たちに手を振り、助手席に乗り込む。裏門から走り出るパジェロの背に、子供たちがしきりに手を振って声援で送った。ガラスの割れた玄関から二人の若い教員が走り出てきた。蜘蛛の子を散らすように子供たちが逃げ去る。裏庭に静寂が戻った。顔を真っ赤にした教員に近寄っていくと、二人は照れくさそうな目でMを見た。

「うちの子供たちは元気すぎて困るんですよ。お孫さんのお迎えですか」

邪氣のない教員の声で、思わず周りを見回してしまった。だが、裏庭にはMしかいない。すぐ苦笑が浮かんだ。小学校の教員から見れば、若い祖母に見られるのも仕方ないと思い

直した。自分自身で考え、意識している存在と、他者の見る存在がかけ離れているのは当たり前のことだ。その落差の大きさに、Mは今更ながら驚いただけだった。

「いいえ、実力テストの中二年生に昼食を届けに来たんです」

答えた声は固く、掠れているような気がした。

「ああ、ご苦労様です。せっかくの日曜日に、ご熱心で恐れ入ります。山地では受験に関心のない家庭も多いんですが、ご理解があって助かりますよ。試験場は二階の隅の教室なんですが、せっかくですから僕が弁当をお預かりします」

もう一人の教員が世慣れた口振りで言って、仲間の失態をフォローした。

「すみません、進太に渡してください」

Mが答えると、二人の表情が曇った。

「進太君の家族の方ですか。大変ですね。でもあの子は勉強が一番だから、高校受験は心配ないですよ。市の有名高校に進学すれば、あの子も普通になります。心配要りませんよ。山地はレベルが低いですから、東大に行けるような子は周囲から浮き上がるんです」

取って付けたように答える教員に頭を下げて、Mは帰っていった。ほとんど訪れる事の無かった学校とMの関係は希薄だ。その希薄さが相互に大きな誤解を生んでいた。Mは決して教育熱心ではないが、希薄な関係にある学校側から見れば、子供の進学しか考えない中年女に見えるに違ひなかった。Mが考え、行動してきたことなど、誰の目にも見えない。そして、これからMの生き方にも誰も関心を払わない。だが、将来の時間が圧倒的に残っている進太は、同時代に关心を持たれないわけにいかない。Mは限りなく透き通っていく存在としての自分を意識した。それは子供が気付くよりも、いち早く大人が認識すべき問題だった。濃密に思える関係にもたれ合っていっては、決して見てこない真実なのだ。

ポスターに貼られたキャビネ大の写真の中で、三週間前に山地の学校の裏庭で見た若い女性が白いパジェロの前で笑っていた。写真に添えられた文章によれば、その博子という女性は、Mが学校で見た日から行方不明になっているという。工学部に留学中のバングラディッシュの青年が同行しているかも知れないと、文末に添えてあった。彼もその日以来、アパートに帰っていない。目撃者への通報先は、警察の家出入係とレストラン・セントラルパークになっていた。これから極月と待ち合わせて、昼食を取る予定になっている店だ。だが、Mはそのレストランに行ったことはない。Mの通うコンピューター学校の企画部長

を勤める極月の指定だった。極月はMが人材派遣会社の主任をしていたときに紹介した瀬瀬システムズにまだ籍を置いている。コンピューター・システムの開発を主業務とする会社の事業拡大によって設立した学校には、役員として出向してきていた。いつも忙しい極月と食事をするのは本当に久しぶりだった。

通りを隔てて中央公園と向かい合った雑居ビルの一階にあるレストランは落ち着いた雰囲気だった。厚いガラスを入れた格子ドアの横に、先ほど交番の前で見たのと同じボスターがはってある。ドアを開けて明るい店内に入っていくと、一番奥の席から極月が立ち上がり手を振った。Mも手を振り返したが、それほど広い店ではないので頬が赤く染まる。妙に人目が気になる自分が歯がゆい。

「遅いわよ。人を待たせるなんてMらしくない。隠居暮らしが続いてボケが進んだのね。コンピューターの学習はいいリハビリになるでしょう」

Mの肩を片手で抱いて、極月が冗談めかした怖い声で言った。今日の極月はピン・ストライプのチャコールグレーのスーツを着ている。わざとゆったりさせた上着がしなやかな身体を一段と魅力的に見せている。どこから見てもエグゼクティブと分かる。

「遅れてごめんなさい。午前の授業が終わるとすぐ、企画部長室に行ったのよ。でも、極月はいなかった。本当に忙しいのね」

「だから、ここで待ち合わせましょうと言ったのよ。Mは物忘れもひどいわ。私は滅多に席にいらない。今日も、土・日曜日の学校を企業の新人研修に使ってもらいたくて、事業所を飛び回っていたのよ。休日だからと言って設備を遊ばせておくのはもったいないでしょう」

間が抜けたMの答えに、極月がビジネスマンの口調で応えた。極月がまぶしく見て仕方ない。促されるまま席に座り、うっとりとした目で顔を見つめた。

「嫌だな、そんなに見ないでよ。Mに誘われているようで、背筋がかゆくなってしまうわ。それから、メニューはオーダー済みよ。ステーキ定食。いいでしょう。この店は安くていおいしいのよ」

極月の照れた声にMの口元がほころぶ。

「ふーん、キャリアウーマンにしては質素な食事ね。私はハウスワインの赤もいただくわ」

「だめよ、午後も授業があるはずだわ」

あきれたように極月が答えた。

「いいえ、コンピューターの練習なんて、しらふではできないことに気付いたのよ。極月に叱られても私は飲むわ」

断固とした口調に、極月が冷たく首を振って応えた。それでも席を立ってキッチンに向かい、ブルゴーニュのハーフボトルとグラスを二つ持ってきてくれた。

「仕方ないわ。とにかく、久しぶりの食事だから乾杯しましょう」

頑固な年寄りに辟易したといった顔で、極月が片目をつむった。二人でグラスを合わせてワインを飲んだ。Mはいつになく壮快な気分になる。濃密な関係が、安心できる地位を用意してくれるのだ。だが、だんだん居心地が悪くなってくる。たわいない話が続いたあげくに極月が問い合わせてきた。

「どう、パソコンのレッスンは進んでいるの。そろそろインターネットが始まるころよね」

「進んでいるもないもんだわ。あのマウスってやつが好きになれないのよ。私が使っていたころのコンピューターはキーボードの操作だけだったわ。今はキーボードから手を離してマウスを操作しなければならない。残念ながら私には手が二本しかないの。今のパソコンは手が三本ある人類が操作すべきよ。もう、やめたくなかったわ」

日頃の不満がついMの口に上った。

「やはりMらしくない。今の時代では、パソコンに慣れていないと世捨て人になってしまふと言ったのはMでしょう。もう一度、市に出て社会復帰がしたいとも言ったわ。それを機械の操作が難しいから断念するなんて許せないわ。お金持ちのMはパソコン操作を就職の武器に使う必要はないのよ。即席の農婦を気取った隠居暮らしをやめて、時代の空気を感じ取れればいいの。そうすれば中学生の進太とも共通の話題ができる。ねえ、M。進太はチハルの好き放題に操られているんじゃない。もう一度進太を、健全な環境に取り戻すのが本当の狙いなんでしょう。情報化の時代に四輪駆動車を乗り回してハンティングの真似事をするなんて野蛮すぎる。進太には知的な好奇心が必要よ。これ以上チハルの影響力が強くなれば、本当に暴力志向に走ってしまうかも知れないわ。もっとしっかりしなくちや進太がかわいそうよ」

Mの言葉尻を捕らえて極月の説教が始まった。たとえ図星を指されても説教が好きな者はいない。毎日のようにキヨミ先生に説教をされているという進太の気持ちが分かるような気がした。

「分かったわ。午後の授業も始まっているから、私は帰る。ごちそうさま」

極月の気を逸らすようにMが言った。極月が慌てて左腕のカルチエの時計を見た。もう午後二時を回っている。思いの外早く時刻が過ぎたのだ。見回した店内には他に客はない。極月が大きくうなずいて席を立った。Mも後に続いた。入口横のレジには誰もいない。アルバイトのウエートレスは遅い食事に行ったらしい。極月が声を掛けると、シェフの格好をした中年の男がキッチンから出てきた。博子の父に違ひなかった。心持ち憔悴した目元が、山地の学校で見た博子の細い目とよく似ている。深々と頭を下げたシェフに送られて、極月がドアを開けた。Mがシェフを振り返る。

「あの、博子さんの事で、何か分かりましたか」

問い合わせたMを、驚いたようにシェフが見た。しかし、一瞬輝いた視線をすぐ床に落とした。空しい問い合わせに慣れきってしまった風情だ。

「ご心配をお掛けして申し訳ありません。残念ながら、まだ何の情報も入ってきません。今後ともよろしくお願ひします」

消え入りそうな声でシェフが答えた。痛々しさがMの胸を突く。とっさに博子を見たことを告げたくなった。

「M、何か知ってるの」

極月が振り返ってMに尋ねた。半分開いたドアを片手で支えている。

「いえ、外のポスターが気になっただけ。早く見付かるといいですね」

極月とシェフに同時に答えて口をつぐんだ。く一ちゃんの死体を発見したときと同じ事を、またしてしまったと後悔する。たまらなく名淵検事に会いたくなかった。

名淵は検察支部の二階にある自席から、開け放された窓の外をぼんやりと眺めていた。やっと午後三時を回ったところだが、秋の日は短い。すっかり斜めになった日射しが夕暮れが近いことを知らせていた。検察支部は水瀬川を挟んで市街の対岸にある。国や県の合同庁舎から少しはずれ、裁判所支部の隣りに建つちっぽけな二階建ての庁舎だ。公判部の同僚はいつも忙しくしていたが、支部に派遣された特捜検事にこれといった仕事はない。山地の少女殺人事件の調査も終わり、派遣期限の月末を待たなくともいつでも帰任できる態勢だった。だが、名淵には帰任する気はない。この市が持つ魔力のような魅力を、任期切れになる日まで愛用のライカM6で写し取っておきたかった。そして、できることならばMに、もう一度会いたいと思った。夏の終わりの官能の一夜のことが忘れられない。も

し機会があれば、官能に身悶えするMの姿を何としてもカメラに収めたいと思う。三か月の任期で検察支部を回り、特別捜査の仕事をアピールする職務も閑職でしかない。だが、このまま退職して「やめ検弁護士」になる気にはなれない。全身を賭けた仕事がしたいと痛切に思う。

「検事さん、ご面会ですよ」

ドアを開けて入ってきた事務官が懇懃に言った。客の氏名も告げない無礼な態度に腹が立ったが、この検察支部では名淵は招かれざる客なのだ。無言のまま部屋を出て階下に向かった。階段を鉤の手に曲がったところで踊り場に出ると玄関ホールが見渡せた。薄暗いホールの無人の受付の前に、長い髪の女が立っている。ガラスドアから長く射し込む日の光で顔は暗い。白っぽいマウンテンパーカーの裾から伸びた脚が驚くほど長い。階段を降りてきた名淵を見上げて、うれしそうな声を出した。

「検事さん、突然お邪魔して申し訳ありません」

「あっ、Mさん、いらっしゃい。わざわざ、こんな所まで来てくれたんですか」

反射的に答えた声が、我ながら上擦っていると名淵は思った。逆光になったMに見られていれば分かっても、つい表情が緩むのを押さえきれない。いつもの習慣で辺りを見回す。人影はなかった。でも、立ち話はしたくなかった。招じ入れる部屋を思い描いたが、検察支部には気の利いた部屋はない。ただ一つある応接室も、取調室のようでは味気なかった。実際、名淵がいる間に取り調べで使ったこともある。

「実は、検事さんにご相談があつてきました。お忙しいなら、そう言ってください。日を改めます」

名淵の気持ちにお構いなく、Mが話し始めた。名淵は外に誘うことには決心する。自分の車の中が最高だと思った。Mの前まで歩を進めた。

「いいえ、構いません。いくらでも時間は割けます。でも、この役所には適当な場所がないんですよ。よかつたら僕の車へ行きましょう。そこで話を聞きします」

突飛な申し出に、Mがすぐ領き返した。玄関ドアを開けて二人は駐車場に出た。さわやかな風が二人を包む。さすがに肌寒さを感じられた。日溜まりになった狭い駐車場に六台の車が止まっている。名淵は真っ直ぐ緑色のスポーツカーに案内する。ブリティッシュ・レーシンググリーンのMG Fだ。ドアを開けてMを招くと、Mの表情がぱっと明るくなった。

「私も昔、真っ赤なMG Fに乗っていたの。懐かしいわ」

助手席に座ったMが、狭い車内を見回しながらうれしそうにつぶやいた。

「そうでしたか。知っていたら運転席に座ってもらったのに。で、今は何にお乗りなんですか」

名淵の問い合わせにMが笑いで答えた。笑いながら指差すところに白い軽トラックが駐車してある。

「なるほど、MGFより実用的だ」

答えた名淵が続いて笑った。

「検事さんは、レストラン・セントラルパークの娘さんが行方不明なのを知っていますか」

唐突にMが問い合わせてきた。真剣な声だった。

「知っていますよ。外国人がからんでいるようなので、検察支部にも警察から通報が来ました」

「そう、褐色の肌をした逞しい青年のことね」

「見たんですか」

外国人の容貌を口にしたMに驚き、問い合わせた声が大きくなかった。まだ公表していない情報だった。硬い表情でMがうなづく。

「なぜ黙っていたんです。三週間も前のことですよ。いつ、どこで見たんですか」

思わず非難する口調になって、矢継ぎ早に聞いてしまった。Mの横顔が苦悩で歪んだ。

「行方不明になっていることは今日のお昼に知ったの。二人を見たのは三週間前。山地の学校で、二人一緒にパジェロで去っていくのを見たのが最後よ。私は新聞を読まないし、テレビも見ないから、ポスターを見るまで知らなかった。セントラルパークで友達と食事して、帰り際に会ったシェフに娘さんの情報を伝えようとしたの。でも、できなかった。山地の事件が気になって、口に出せなくなったの。これからは事実を告げると検事さんに約束したのにできなかった。だから相談に来たのよ」

名淵は三週間前にMが見たことのすべてを聞いた。白いパジェロが山地で消え失せた予感がした。事故かも知れないが、確實に死の匂いがした。

「検事さんには話せたけど、やっぱり警察に出頭するのは気が重いの」

話し終えたMがしんみりした声で付け加えた。気持ちは分からぬではない。それに、まだ事件になったわけではなかった。

「僕が警察に話しますよ。僕なりに調査もしてみましょう。とにかく事件の匂いがする。それも、山地が舞台になった予感がするんです。調べさせてもらいますよ。これでも特捜

検事なんだから、手慣れたものです。よかつたら、週末にまたお会いしたい。山地にも、Mさんにも、僕は惹かれるんだ」

思わず声が高まったが、Mは黙ってうなずき返してきた。名淵はせっかくのチャンスを逃がしたくなかった。

「金曜日の夜にサロン・ペインの会員ルームを予約しますよ。ぜひ付き合ってください」「いいわよ、縄は私が用意するわ」

あっさり答えた声がやけに遠くで聞こえた。ペニスが硬くなっていく。名淵はMの手を引き寄せ、さり気なく股間に導いた。

「検事さんは若いわ。こんな時でも元気がいいのね」

Mの華やいだ声が全身に響き渡った。野心も官能も、一切が欲しいと名淵は痛切に願った。

午後六時を過ぎた山地は、もう闇に包まれていた。自転車のライトが弱々しく照らす街道から蔵屋敷に続く横道へと、清美は慎重にペダルを踏んで曲がっていった。やがて、疎水を渡る木橋の横に立つ外灯の明かりが目にはいる。清美はほっとしてペダルを踏む足の力を緩めた。明かりは見えたが、近付くまでには五分ほどかかる。闇の中の光はことさら近くに見えるのだ。この道を自転車で通い始めてから、もう一週間が経った。今夜こそ進太を説得し、女の子たちの勉強を見させようと思う。照れ性で意固地な進太を説得するには教師の誠意を理解させるしかないと、清美は確信していた。樂をしていては進太と意志の疎通ができるわけがない。車を使わないのもそのためだ。市からの通勤に使っているマチは学校に駐車してあった。片道二十分の道のりをわざわざ自転車で往復する。夜道は寒かったが、真冬用のダッフルコートを着た清美には気にならない。かえって汗ばむくらいだ。これが教師の誠意と根性だと思うと、ペダルを踏む足にまた力が入る。秋山とのデートを断ったことにも悔いはなかった。ただ、数人の同僚が見ている前で演じた醜態が気になった。教育に理解がない秋山の不甲斐なさがしゃくにさわる。その口喧嘩は、つい十五分前に起きたことだった。

部活の指導も終わって午後六時になったとき、清美は職員通用口でブーツを履こうとしていた。

「清美さん、今夜も進太の説得に行くんですか」

背後から秋山の声が落ちた。どことなく苛ついた声だ。

「ええ、諦めないで毎日説得に行くと進太ちゃんに言ったんですから、約束どおり毎日通います」

答えた声が少し尖っていた。

「僕にはムキになっているとしか思えないな。どうして進太のことになると、他のことが目に入らなくなるんだろう。清美さんは小学校の教師ですよ」

「いいえ、ムキになってなんかいません。私は小学校の仕事を全部済ませてから、個人的に進太ちゃんの指導をしているんです。秋山先生もよくご存じのはずでしょう」

気に掛かっていたことを恋人の秋山に指摘されたので、清美は裏切られたような気がした。確かに清美の行動は越権行為だった。秋山の黙認と理解を前提にして、小学校の担任の時にやり遂げられなかった指導を再開したに過ぎない。それだけに、秋山の言葉が心外だった。思わずくってかかるように言葉を投げた。

「秋山先生は、ご自分の生徒に手を出すなって言いたいのかしら。そんな狭い了見では先が思いやられてしまいます。私たちの教育の理想をお忘れになってしまったのかしら」

「清美さんは誤解してるよ。僕は手を出すなども、迷惑だとも言ってない。ただ、久しぶりにデートに誘おうと思って声を掛けただけですよ。やっぱり、清美さんはムキになっている」

秋山が対立を納めようとして、二人の関係に話題を振った。清美は土・日曜日も学校に出て、進太の家に通い続けていた。秋山との関係は結婚の話がでかかったままで中断していた。もちろんセックスまでは進んでいたが、それも儀式のように淡いものだった。

「ごめんなさい。私もデートはしたいけど、今は進太ちゃんの教育の方が大事なの。もう少し時間をください」

固い声で答えてしまった。笑い声でごまかし、今日の対立をあいまいなままにしておくのが大人の女だとは思うが、清美はもう後に引けなかった。

「凄く真剣だね。進太に嫉妬してしまうよ」

秋山が最後の助け船を出した。縋り付いて一緒に大笑いすべきだと、清美の中の女が告げる。だが、清美の顔に笑いは浮かばなかった。こわばった口元から冷たい声がこぼれ落ちた。

「自分の教え子に、なんてことを言うの。恥を知りなさいよ」

言った途端に秋山の顔が真っ赤になった。全身が怒りに震えている。

「清美さんは先輩として僕をやりこめたいんだろう。僕が担任している進太を更正させて優位に立ちたいんだ。いくら年上だと言っても陰険が過ぎるよ。子供たちに平等に接しようというのが僕たちの方針じゃないか。清美さんは私情に流されている。それも、結婚の話が出た途端に僕を押さえ込もうとする。フェアじゃないね。進太にとっても、僕にとっても、虐めと同じだ」

初めて秋山が清美に見せる激情だった。言い募る目に涙が滲んでいた。清美の目頭も熱くなった。ぼやけた視界に二人の口論をのぞき見している同僚の顔が映った。そのうちの一人は、小学校で清美のライバルの学年主任だった。反射的に右手を振り上げ、秋山の頬を張った。静まり返った職員通用口にかん高い音が響いた。

「もう、付きまとわないで」

大きな声で言い捨てて、駐輪場に駆け出した。追ってくるだろうと思った秋山はついてこない。暗がりの中に自転車を引き出し、泣きながらペダルを踏んで蔵屋敷に向かった。

木橋のたもとに立つ外灯の明かりが、自転車の横に立った清美を照らしている。疎水の向かいに見える蔵屋敷の窓には明かりが灯っているが、進太はいない。通い詰めて一週間も経てば雰囲気で分かる。何より進太が愛用するモトクロス・バイクがなかった。清美はもう二十分間も、進太の帰りを待っている。これまでの帰宅時間は六時三十分前後と、判で押したように決まっていた。待ち受けていて会えなかっただ日はなかった。説得はうまくいっていなかったが、逃げ隠れしない進太の態度には教育者としての手応えを感じていた。もう一息だと思っていた。

「私を避け始めたのね」

つぶやいてみると心細さが込み上げてきた。裏切られたような思いの底で、進太の姿が揺れ、秋山の顔に代わった。他愛ない口喧嘩のシーンが甦ってきた。初めて悔いを感じた。取り返しのつかないことをしたと思った。急に寒さを感じ、身震いして足踏みをする。何が何でも進太を説得する以外に、道は開けないと想い定めた。温かそうな明かりが灯った蔵屋敷の高窓を、清美は憎しみを込めて睨み付けた。

「ねえ、チハル。本当だよ。しつこいのを通り越して、もう異常な領域だよ。かわいい顔して鬼のようなことをするんだ。七日間も帰りを待ち受けられて説教される僕はたまつた

もんじゃない。今夜もきっと、キヨミ先生は自転車に乗って僕を待っているんだ。いい迷惑だよ。虐めより悪い。殺したくなる」

「くーちゃんのようしたいんだ」

憎悪に満ちた進太の言葉に、チハルが顔も上げずに軽く答えた。チハルは半円形のドーム館の自室のベッドの上で、レミントンM1100の手入れをしている。機械オイルの匂いが部屋中に満ちていた。進太は部屋の中央に置いた革張りの椅子に所在なげに座っている。ドーム館の半分の権利を持つ祐子は、鋸屋根工場跡のアトリエと煉瓦蔵の前にあるマンションを拠点にしているため、半円形に区切った隣の部屋を使うことはなかった。元通りに壁を取り扱ってもよかったのだが、チハルはあえて祐子と暮らしていたときのままにしていた。ベッドと椅子、それにパソコンしかない殺風景な部屋に不満もなかつた。所在なげにしている進太にも不満はない。一時熱中したパソコンにも最近は触れることがない。やはり、アウトドアの活動が最高だと思う。住居の中は安心して休むだけの場所だった。チハルの暮らし振りがそれを証明している。進太は蔵敷より、チハルの部屋の方がよっぽど気が休まる。チハルも進太を疎んずることがない。今も、ベッドに胡座をかいて座ったチハルは素っ裸だった。進太の目を気にする素振りも見せない。だが、進太はチハルの前では、命じられない限り裸になれなかつた。それは、わだかまりというより恥ずかしさが原因だった。劣等感といつてもいい。進太の肉体が取り立てて醜いわけではなかつたが、進太の目にはチハルの裸身が美しすぎた。チハルと均衡がとれない裸身を晒すのが耐えられなかつたのだ。進太の気持ちが分かっているように、チハルは些細な干渉もしない。山地に帰ってきてからのチハルは進太の指針になっていた。七年前に動物園からキリンを強奪したときに見せてくれた力強さは一向に変わっていない。一層凄みを増した脅力が、毎日のように進太に目を見張らせてくれていた。

「くーちゃんとは少し違うんだ。あの子は黙って泣いていただけだから、耐えられなくなるまでに結構長い時間があった。でも、キヨミ先生は違う。怒ったり泣いたり、脅してはすかしたりで目まぐるしい。まるでチハルが嫌がらせを始めたみたいにエネルギーでパワフルなんだ。僕の力量では太刀打ちできないよ。もう限界だと思ったから、今夜はドーム館に避難してきたんだ。ねえ、どうしたらいいだろう。このままでは僕、本当に先生を殺してしまいそうだよ」

進太の泣き言がまた部屋に響いた。チハルは返事もせずに分解した銃を組み立てている。最後にスライドを引くと、かん高い金属音が響いてトリガーがセットされた。

「殺したければ殺してもいいのよ。ただし、自分が殺されることも受容することが条件。

フェアな戦いなら、いつでも始末はしてあげる。後は進太が一人で決断するんだね」

突き放すようにチハルが言って、レミントンを頬付けにして構えた。真っ黒なドーム天井にまたたく星空に銃口を向ける。青白く輝く大犬座のシリウスを狙って引き金を引いた。カチッという乾いた音と共に、チハルの視界からシリウスが消えた。もう獵期は始まっている。まだ獲物はないが、明日はイノシシを狩りたいと痛烈に願った。

歯科医は母屋の二階の窓から疎水に架かった木橋を見下ろしていた。橋のたもとに立つ外灯が漆黒の闇をぼんやりと照らし出している。スタンドを立てた自転車の横に、若い女がずっとたたずんでいる。もう二十分は過ぎた。外気温が下がったためか、規則的に足踏みをして手を擦り会わせている。小柄な身体がやけに哀れに見えた。

「キヨミ先生にも困ったものだ」

声に出してつぶやいてから蔵屋敷に視線を巡らす。明かりの灯る高窓が見えた。Mは帰ってきているが、進太は先生が帰るまで戻らないだろうと思った。きっとドーム館のチハルのところで、清美が帰る時刻を見計らっているに違いなかった。歯科医には進太の気持ちが分からぬではない。毎晩家の前で待ち構え、やりたくもない講師役を強要されるのでは、歯科医でもたまつるものではない。若いころだったら、いい加減にしろと言って、教師を殴り倒したかも知れなかった。だが、進太には自信を持って決断し、実行する能力が欠けているように見える。清美の説教を毎晩聞き、申し出を断ることしかしない。断固とした態度を見せることができないのだ。Mが進太の代わりに清美に言ってやればいいと歯科医は思う。Mの態度はいつだって明確だ。人に誤解を与える余地を残さない。しかし、Mは故意に介入するのを避けているように見える。清美が毎晩進太の帰りを待ち受けていることは知っているはずなのに、話題にもしない。進太が相談してくるのを待っているのかも知れなかった。それほど、今の家族には対話がない。歯科医は大きな溜息をついて、再び清美を見下ろす。Mが外に出てくるとは思えないし、清美が蔵屋敷を訪ねるとも思えなかった。進太のバイクは定位置に見当たらないのだ。キヨミ先生はあくまで進太の帰りを待つつもりだろう。

「今夜は帰ってもらおう。事の是非はともかく、女性を夜の路上で待たせては申し分けなさすぎる」

独り言を言いながら、歯科医は母屋の急な階段を下っていった。久しく閉め切りにしてあった診療所の正面玄関に明かりを点けて、ドアを開けた。ドアの開く音と、急についた明かりが清美を驚かせたらしい。外に出てきた歯科医を怯えた顔で見つめた。

「驚かせて済まない。確か進太が小学校の時の担任の先生ですね。差し出がましいようだが、私の話を聞いて欲しい」

遠慮がちに声を掛けると緊張していた清美の表情が緩み、懐かしそうな顔になった。

「まあ、歯医者さん、お久しぶりです。私は先生がまだ校医さんをなさっていたころに山地に赴任してきたので、とてもお懐かしいです。お元気そうで安心しました」

うれしそうに話し掛けた清美の顔を、歯科医もよく覚えていた。新卒で小学校に赴任してきたばかりの清美を、歯科医は中学生と間違えた思い出もあった。少女のようだった清美が、今や美しい女に変わっている。相変わらず小柄だが、全身から漂ってくる雰囲気は十分に成熟した女の匂いがした。歯科医は目をしょぼつかせて相好を崩す。だが、今夜は懐旧に暮っている場合ではなかった。頬を引き締めて清美の顔を見つめ返した。

「先生が進太を心配してくれて、毎日家庭訪問をしてくれているのは私も知っています。ありがたいことだとも思っている。でも、今夜は私に免じてこのままお帰りください。進太は留守です。恐らく、先生が帰るまで戻りません。逃げ回らないようにするには家庭の問題です。今夜はお帰りになって、日を改めてください」

「分かりました。私こそ夜分にご心配をお掛けして申し訳ありませんでした。また明日の夕刻に参りますから、進太ちゃんにお伝えください」

深々と歯科医に頭を下げてから清美は帰っていった。自転車に跨って夜道を去っていく後ろ姿を見て、歯科医は大きく溜息をついた。清美は明日も来ると言ったのだ。熱心を通り越した執拗さに辟易してしまう。蔵屋敷に行ってMに事情を話し、交渉役を代わってもららうしかないと情けなく決断した。

日が落ちてから蔵屋敷を訪ねるのは久しぶりだった。最近は三人で夕食を食べることもなくなっていた。祐子が運んできた食品を、それぞれが好きな時間に調理して食べる事が多くなっていた。レトルト食品が得意でない歯科医は、もっぱら母屋で食事をした。身体が動けるうちはそれでいいと思う。もちろん三人で囲む食卓の味は忘れられないが、進太が成長してしまった今となっては高望みに過ぎるような気もする。これが時代なのだと思えば諦めもついた。良い悪いはその時の気分が決めることに過ぎない。

蔵敷の自動ドアを入ると、二階に続く階段の上でクロマルがうれしそうに吼えた。エプロンを掛けたような白いたてがみを揺すり、しきりに太い尾を振って愛嬌を振りまいている。歯科医にはかわいくてならないが、犬嫌いのMを気遣って、夕刻になると進太がクロマルを二階に上げるのだ。やはり、一度帰ってきた進太は、清美の訪問を嫌って外出したに違ひなかった。歯科医は憂鬱な気分でリビングに使っているワンルームに入っていった。部屋の中央にある、三人がそれぞれの作業台として使っていたテーブルの上には何も載っていない。Mの姿も見えなかつた。あっけに取られて周りを見回すと、バスルームからシャワーの音が聞こえてきた。歯科医は部屋の隅に置いた安楽椅子に座ってMが風呂から上がるのを待つことにした。布張りの大きな椅子はMと歯科医のお気に入りの椅子だつた。だが、歯科医が蔵敷にいるときは、さり気なくMが安楽椅子を譲った。老いた身には、些細な気配りさえうれしかつた。じつと安楽椅子に身をさせて目を閉じていると、進太が小さかったころの団欒の思い出がまぶたに浮かんできた。他愛のない談笑が、とても貴重なものだったような気がする。

「あら、歯医者さん、蔵敷に来るなんて久しぶりね」

声を掛けられて目を開くと、裸身にバスタオルを巻いたMが洗い髪を拭きながら笑っている。一瞬目のやり場に困つたが、かつてのMは身体にバスタオルも巻かなかつたと思いつつ正面から見た。

「Mに話があつてきたんだよ。じつは、ついさっき私はキヨミ先生と話した。外で進太の帰りを待っていたらしいんだが、見ていられなくて帰つてもらった。でも、今夜は帰るが明日の晩も来ると言うんだ。困つたことだ」

「歯医者さんが困ることはないわ。キヨミ先生は進太の担任ではないのよ。小学校の時の先生が教え子が気になって家庭訪問をするのは勝手だけど、それは先生の職務ではない。趣味のようなものよ。趣味で進太の帰りを待つのなら、いつまで待つても文句は言えない。どちらかというと歯医者さんは、先生にも進太にも余計なことをしたのだと思う」

Mの意見はいつも明快だ。明快すぎてついていけない。人の暮らしはそんなものじゃないと歯科医は思う。

「Mの言うことはもっともだが、先生の訪問を嫌つて逃げ出した進太はどうなんだ。私は家族で何とかすべき問題だと思うし、その事をキヨミ先生にも告げた。言いにくいくことだが、最近のMは進太を放任しているように見えてならない。だから進太はチハルを慕うんだよ。私には決していいことだとは思えない。やはり、Mが進太を繋ぎ止めてやるべきだ

と思うよ」

断固として意見してからMの目を見つめた。あれほど自信に溢っていたMが、急に小さくなったように見えた。なんだか泣きそうな顔をしている。言い過ぎたかなと思って目を伏せると、静かな声が部屋に落ちた。

「歯医者さん、悔しいけれど、私はナイフの使い方を知らない。バイクの操縦も、四輪駆動車の運転も知らない。狩猟はおろか、キャンプの仕方すら知らないのよ。でも子供はみんな、それを教わりたいの。私にも覚えがある。自然の中で生きていく知恵や体験に憧れて、ガールスカウトに入ったことがあるの。でも、そこも学校みたいなところだった。一ヶ月で退団したわ。それからの私は、お父さんが子供に教えてくれるようなことから目を背けるようになった。だって、私には父も母もいなかったから。でもね、私に父は要らなかっただなんて、誰にも言わせない。父が欲しかったのよ。今でも欲しがっているような気がする。歯医者さん、あなただって、二十五年前の私には父に見えたのかも知れないのよ。父性を求めだした進太に、私が何ができるというの。少なくともチハルは、私にできない役割を確実に担ってくれているわ。後は進太が、独自に判断力と実行力を磨くしかない。今の私には進太の可能性を信じることしかできないのよ」

最後の言葉が喉につかえていた。慌てて目を上げてMを見た。Mの目から涙が流れ落ちている。声も立てずに手放しで泣いていた。身体に巻いたバスタオルが床に落ち、裸身を細かく震わせて涙を流している。歯科医は黙って安楽椅子から立ち上がり、Mの前まで歩いていった。両手を大きく広げると大柄な裸身が腕の中に倒れ込んできた。冷たく濡れた髪をさすり続けた。気がつくと歯科医の目からも、止めどなく涙が溢れていた。先に逝ってしまった息子のピアニストがたまらなく恨めしかった。

薄氷の張る寒い朝が四日続いていた。疎水の水際に最初の氷が張ったのは、進太が清美の待ち伏せを嫌ってドーム館を訪ねた翌朝だった。あの晩の帰り道で進太は、安易に清美を避けたことの報いを十分に受けた。ヘッドライトを装備していないレース用のモトクロス・バイクで下りる山道の恐怖は、もう二度と味わいたくはない。二段もギヤを落として情けないほど低速で坂を下るバイクの尻を、ゲレンデヴァーゲンのヘッドライトが煽りまくった。まるで狩り立てられているような気がする。真っ暗な山道を照らすために送ってくれるチハルの好意はありがたいが、追われる者の悲哀と焦りが脳裏を掠めた。お陰で進太は、二十分も続いたのろのろ運転にも関わらず、無様な格好で三回も転倒してしまったのだ。低速のため身体に怪我は無かったが、全身を覆った恥辱が胸に痛かった。結局次の晩に、進太は清美の説得に屈した。来週の後半には十二月を迎えるが、進太の気持ちは沈みきっている。月曜日の午後から三人のクラスメートに勉強を教えなければならなかった。

「クソッ、むかつくな！」

憎々しい声で言って、足元の小石を疎水に蹴り入れた。朝日に輝く水面が揺れ、波を被った薄氷が虹色に光って溶けた。三人の女の子に勉強を教えるのは面倒だが、決して苦痛ではない。確かに級友には受け入れられるだろう。それどころか、秀でた学力が敬われ、指導力が頼られ、人格が好かれ、容貌が愛されるだろうと思う。だが、それが何になるのかと進太は思う。級友たちに溶け込むことができない限り、これまでと変わることとはどこにもない。学校での位置も関係も変わらず、進太の色合いだけが変わる。それは衣装を替えるに等しい。望みもしない衣装に着替えて人前に立つのは、まるでピエロのようだ。そもそも強いられたピエロだった。耐え難い仕打ちだ。その仕打ちを受け入れてしまった自分が歯がゆくてならない。テストの答案のように消しゴムで消してしまいたくなる。せっかく書いた正解の答案を一生懸命消し、白紙で提出した保健体育のテストを思い出した。く一ちゃんの顔が目に浮かんだ。大きな目元がキヨミ先生に似ていた。

「そうか、キヨミ先生を消せばいいんだ」

つぶやいてみると、全身の怒りが嘘のように去っていく。進太の口元に笑いが浮かんだ。背後から貧相なエンジン音が聞こえ、軽トラックが進太の横に並んだ。黒いサングラスをかけたMが運転席の窓から顔を突き出す。

「今夜は悪いけど、祐子と夕食を食べてアトリエに泊まるわ。帰りは土曜日の午後になると思うけど、いいわね」

早口でMが言った。黒いサングラスが朝日を反射してまぶしく光る。表情からは分からなかったが、進太は嘘の臭いを嗅いだ。チハルも今夜、祐子と一緒に市に泊まると言ったのだ。チハルに聞いたのは昨日の午後のことだ。山地で頻繁に警官の姿を見掛けるようになったので、歓楽街で憂さ晴らしをしてくると言っていた。だが、祐子は一人しかいない。Mとチハルが、祐子を囲んで三人で夜を過ごすとは思えない。どちらかが嘘をついているに違ひなかった。

「いいよ、ゆっくりしてくれば。どうせ酒を飲むんだから、泊まってきた方がいいよ。最近の山地はパトカーが多い」

素知らぬ顔で進太が答えた。

「ありがとう。食料は冷蔵庫に満杯だから、好きなものを食べてね」

Mが言い残して軽トラックを発進させた。華やいだ声の余韻が進太の耳に残った。嘘を言ったのはMだと確信する。妙に艶めいた匂いが鼻を掠めた。精液の匂いに似ている。突然、Mの裸身が脳裏に浮かんだ。後ろ手に緊縛された裸身だ。よく見ようすると顔が清美に変わった。恥じらいを浮かべた美しい表情だった。急激にペニスが硬くなってくる。素っ裸にした清美を監禁する妄想が進太の全身を支配した。後は消しゴムを用意するだけだ。何とかなるような予感がする。無性に清美に会いたくなつた。進太は白いトレーナーにジーンズ姿で学校に向かった。とても登校する格好には見えない。バイクで行きたかったが、街道を行き来するパトカーを思い浮かべて断念した。警官たちが山地で消えた博子と白いパジェロを捜索していることを、進太はまだ知らない。

清美は教卓の椅子に座って窓の外を見ていた。二時限目の休み時間は始まったばかりだ。清美が担任する小学校五年生たちが校庭に飛び出してきた。風が立つ度に舞い落ちる銀杏の葉を宙で掴もうとして追い回す。遠く近く嬌声が響き渡る。毎年繰り返される秋の終わりの行事だ。のどかな光景だった。その子供たちに警察が事情聴取をしたのは、つい三日前のことだ。学校に警官が来るのは昨年の久美子の殺人事件以来、当たり前のようになっていた。落ち着いた静けさを誇っていた山地で、心が痛む事実だった。行方不明の女性と外国人の青年のことは、サッカーチームに所属している二人の子供がよく覚えていた。だが、三週間以上も前のことだ。万一事件だとしたら、二人とも生きていなることは清美にも予

想できた。殺伐とした雰囲気が美しい自然を浸食しているようで気が重くなる。せっかく説得することができた進太のことも気掛かりだった。同級生の補習は引き受けたものの、相変わらず不登校が続いているのだ。

「少し強引だったかな」

窓の外の校庭に向かってつぶやいてみると、人気のない教室の寒さが改めて肌に染みた。今朝聞いたカーラジオで、西高東低の冬型の気圧配置が緩み、週末にかけて温かい日が続くと予報していたことを思い出して苦笑してしまった。このまま真冬になってしまいそうだ。大げさに身震いすると外の景色が揺れた。金色に輝く銀杏の下を歩いてくる進太も揺れて見えた。予期せぬ姿を目にして、うれしさが込み上げてきたが、進太の格好はどう見ても登校するスタイルではない。それでも立ち上がって、校庭に面したガラス戸を開けた。途端に日射しの温かさが全身を覆った。天気予報が当たったようだ。何となく心が浮き立ってきて、上履きのまま外に出て進太を迎えた。

「進太ちゃんは相変わらずアウトドア志向みたいね。山の中で白いパジェロを見掛けなかったかしら。三週間前から、若い女性と外国人が行方不明になっているの。三日前に、学校にも警官が捜索に来たのよ」

気軽な声で進太に呼び掛けた。一週間も登校しなかった進太に、さり気なく最新の情報を与えて気を引くつもりだった。会う早々補習の約束を持ち出すのは得策ではない。

「白いパジェロですか。見ませんね」

つまらなそうな口振りで答えてから、進太はうつむいて考える素振りを見せた。確かに進太は白いパジェロを見ていない。しかし、博子が乗っていた車に違いないと思った。パトカーが回ってくる理由も知れた。白いパジェロと外国人を始末した後、チハルは築三百年の屋敷に博子を拉致してきたのだ。薄暗い土蔵の中で素っ裸で立ち縛りにされた姿が進太の脳裏に浮かんだ。そしてもう、博子の存在も消えてしまっている。目の前の清美の顔が博子に重なる。進太は素早く決断を下した。伏せていた顔を上げ、真っ直ぐ清美の目を見つめた。

「キヨミ先生、お願ひがあつて來たんです。月曜日からは登校するし、約束どおりクラスメートの勉強も見ます。でも、うまく教えられるかどうか不安なんです。だから先生、今晩もう一度僕の家に来てください。お願ひです。勉強の教え方で相談に乗ってもらいたいんだ。午後七時に待つてます。いつものように、自転車で来てください。その方が、僕も勇気が出る」

熱意を込めて言った進太の肩が震えている。清美の目頭が熱くなる。やっと進太に誠意が通じたと思った。思った瞬間、授業の再開を告げるチャイムが鳴った。教室の入口から子供たちが駆け込んでくる。進太は清美の目を見つめたまま返事を待った。

「ええ、行くわ。絶対行きます。午後七時ね」

念を押して答えてから、清美は教室に戻った。燃えるように輝いていた進太の眼差しが胸の底に焼き付いて残った。

進太は日が暮れる前にバイクでドーム館に向かった。落ち葉の舞い散る大小のカーブを車体を斜めにしてクリアしていく。かん高いエンジン音が晩秋の山並みに響き渡った。さしもの警察も日暮れ前には山地を引き上げる。特に今日は、一台のパトカーも見掛けなかった。進太は三日間のロスを取り戻そうと、思う存分にカワサキKX60を操った。ドーム館を見下ろす坂の途中で、もう一度思案を巡らす。だが、チハルからゲレンデヴァーゲンを借りる名案は浮かばなかった。かといって、たとえ相手がチハルであれ、清美を拉致するために車が必要だとは言い出せない。黙って貸してくれることに賭けるしかなかった。

ドーム館の玄関前には、祐子のレガシー・ワゴンが駐車してあった。やはり祐子は、チハルと付き合うのだ。Mの嘘が白々しい。進太がバイクを止めてエンジンを切ったとき、ドアを開けてチハルと祐子が外に出てきた。祐子は普段どおりのセーターとジーンズを身に着けていたが、チハルのスーツ姿が進太を驚かせた。体型にぴったり合った光沢のある紫紺のスーツは、チハルの精悍な美しさをひときわ目立たせている。タイトなスカートから伸びた脚が目にまぶしかった。「女のチハル」を始めて見る思いがした。素っ裸でいるときより、数段女を感じさせる。スーツを着ただけで小柄な身体が大きく見えるのだから、つくづく不思議な女性だと思う。ロサンゼルスのキャリアウーマンという前歴の一端を見る思いがした。

「進太、また学校に行っていないのね。来年は高校生でしょう。そろそろ不登校から卒業しないと、私みたいに後悔するわよ」

ぽかんとした顔でチハルを見つめていた進太に、祐子が声を掛けた。進太は露骨に眉をしかめた。説教など聞きたくもない。特に今日はまっぴらだった。祐子を無視して、縋るような目でチハルを見つめた。スーツ姿のチハルにはゲレンデヴァーゲンは似合わない。祐子のレガシーで出掛ける予感がした。

「チハルが車を使わないなら、ぜひ僕に貸して欲しいんだ。ねえ、お願ひだよ」

さりげなく言おうとしたが、口を突いた声は我ながら切羽詰まって聞こえた。チハルの横に立った祐子があきれた顔をしたのが分かる。

「まあ、あきれた。バイクばかりでなくジープを運転したいって言うの。危ないわよ。チハル、貸してはだめ。私がMに叱られるわ」

祐子の鋭い声にも反応を見せずに、チハルはじっと進太の目をのぞき込んだ。進太も正面からチハルの視線を受け止める。

「いいわ。貸して上げる。さんざん練習したんだから運転は心配ない。でも、警官に止められたとき、無断で乗り出した車だって言えるかい」

「言えるさ。チハルには決して迷惑は掛けない。恩に着るよ、ありがとう」

即座に答えた進太の前にチハルがキーを差し出す。進太は震える手でキーを掴んだ。

「チハルは無謀すぎる。進太はまだ中学生よ」

祐子が頬を膨らませて抗議した。チハルは黙ってレガシーの助手席のドアを開けて先に乗り込む。

「責任は私が取る。さあ、祐子、久しぶりのデートよ。早く車を出してちょうだい」

大きな声で言ってから、またチハルが進太を見上げた。緊張しきった顔に目で笑い掛けでから、小さくうなづく。進太は反射的に深々と頭を下げた。再び顔を上げた目に、暗くなつた景色の中に遠ざかっていくレガシーの、赤いテールランプが小さく見えた。

サロン・ペインのカウンターにチハルと祐子は並んで座っていた。まだ時刻が早いので他に客の姿はない。手持ち無沙汰にしているチーフも、二人の会話に割り込む気はなさそうだ。カウンターの中で黙々とグラスを磨いている。チハルはゆっくりバーボンを舐めた。ジャックダニエルのストレートが舌に苦い。殺されたボギーが大好きだった酒だ。チハルはボギーの思い出を舐めるように、帰国してからもジャックダニエルを選ぶ。舌に苦い酒が甘く感じられるようになれば酔いが回る。ボギーとの楽しかった日々の記憶が酔いを明るくさせてくれるので。

「チハルもMと同じで、時々怖くなることがあるわ。今日の出掛けもそうだった。毎日おどおどと悩んでいるような進太に、チハルは危険なことばかりさせている。あの子はきっと、さらに悩むわ。どう見ても進太は、偉大な個性も人格も持っていない。それなのに、チハルやMに憧れて背伸びをするの。私の若い時を見るようで、本当に心配よ」

日本酒のオンザロックを右手に持った祐子が、カウンターの中の鏡に映るチハルを見つ

めて愚痴を言った。聞いていたチハルの目が一瞬光る。

「祐子、私がMと一緒に話題にされることを嫌っているのは承知でしょう。あの女と祐子が仲良くするのはもう気にしないけど、同列で語ることは許さない」

「ごめんなさい。二人には頭が上がらないから、つい一緒にしてしまうの。気を悪くしたのなら謝るわ」

祐子が素直に頭を下げた。チハルの口元に苦笑が浮かぶ。祐子の目を見つめて真剣な表情で尋ねた。

「いつか聞こうと思っていたんだけど、祐子はドーム館に定期的に食料や日用品を届けてくれるよね。蔵屋敷にも届けているって進太に聞いた。決して迷惑だとは言わないけれど、どうして祐子は頼まれもしないことをしてくれるんだい」

チハルの問いを聞いた祐子があっけに取られた顔になった。続けて頬が真っ赤に染まる。「チハルが気にすることじゃないわ。買い出しは勝手にやっているのよ。私は市街に住んでいるし、チハルにもMにも、些細なことに気を使わずに、のびのびとしていてもらいたいだけよ。それに、定期的に二人に会える。私と違った大きな存在に触ると、勇気が湧くのよ。私には機を織ったり、買い物をしたりする以外に能力がないの。二人とは違うわ。意気地なしだし」

小さな声で祐子が答えた。今にも泣き出しそうな気弱な声だ。

「本当に意気地なしだ。Mの足手まといよ」

カウンターの中でチーフがつぶやいた。聞こえよがしの大きな声だ。聞いていたチハルが大声で笑い出した。祐子の頬がますます赤くなる。チハルが笑いを納め、大きく溜息をついてから口を開いた。

「チーフの言葉は半分当たっている。祐子は等身大の自分が見えてないんだ。ねえ、よく考えてごらん。私もあるの女も、毎日をただ無為に過ごしているだけだよ。いくら何でもできると見せ掛けていたって、糞の役にも立ちはしない。人は、やり遂げたことがすべてさ。やるかも知れること、やれるかも知れること、みんな嘘っぽちさ。祐子が機を織って作品に仕上げたり、チーフが商売に精を出して金を蓄えたりすることと比べたら、ゴミのようなものよ。そのゴミも、見る人が見ると偉大な財宝に見えることがあるのかも知れない。でも、それは見方が違っているんだ。個人が人に感じさせる迫力など、残された仕事に比べれば泡のようなものだよ。結局、消滅するだけで何も残らない。あの女や私を、祐子が怖がる必要はこれっぽっちもないね」

チハルの熱弁を、祐子は両手で耳を覆って耐えた。これだからチハルは恐ろしくてならないと思う。チハルの言葉の先には滅びしかない。その滅びを自ら求めているようなチハルが悲しかった。やはりMとは違うと思うと、無性にチハルが愛おしくなって涙が出た。チーフが身を乗り出して口を挟む。

「あんたはどこから見てもキャリアウーマンだし、人間的迫力もある。でも、私に言わせれば、やっぱりガキよ。あんたの嫌いなMとは大違いね。少なくとも、Mは理屈を言わない。自分の信じた道を真っ直ぐに行くのよ。女同士で愚痴をこぼし合ったりはしないわ。実を言うと、ついさっきMは店に来たのよ。今も二階の会員ルームにいるわ。商売上、口は堅いつもりだけど、あんたには別よ。Mの敵らしいからね。そう、Mはいい男と二人きりで夜を過ごすつもり。ねえ、人には男と女の二種類があるのよ。その二つを繋いだり、引き離したりするのが性。性の極まりが官能だわ。祐子は官能を怖れているだけよ。Mは怖れずに官能を追い求める。さて、あんたはどっちの道に行くのだろうね。私は当面、そっちに興味があるわ」

チーフの言葉を黙って聞いていたチハルが、ゆっくり立ち上がった。二階に続くドアを目指して真っ直ぐ歩いていく。遅れて立ち上がった祐子がチハルを追う。チーフが素早く祐子の手にキーを握らせた。

「ご希望なら、Mの隣の部屋が空いているからお使いください。女同士のセックスもすてきですよ」

チハルの背に、楽しそうなチーフの声が飛んだ。

会員ルームの間接照明が裸身を照らし出している。厚いカーペットの敷かれた床に、Mは素っ裸で正座している。黒い麻縄で厳しく後ろ手に縛られていた。名淵が口移しに飲ましてくれるシェリーの酔いが回り、妖艶とした白い肌が薄いピンクに染まっている。狭い部屋が濃厚な女の匂いで咽せかえりそうだ。名淵は黒い瓶から直接シェリーを口に含み、首縄で戒められたMの喉から口へと唇を這わす。そっと開けた口にMの舌が滑り込み、一刻を惜しんでシェリーを啜り合う。Mが身悶えする度に、縄目から突き出た乳房が名淵の裸の胸をなぶった。硬く張り切ったペニスが今にも暴発しそうになる。名淵は意地悪く身体を引いた。

「それで、どこまで話したかな。参ったな、Mさんが燃え上がったので忘れてしまった。とにかく、白いパジェロは学校から先では目撃されていない。たまたま、学校から五キロ

メートル先の街道で道路工事をしていた。片側通行止めになっていたんだが、そこも通り抜けていない。つまり、Mさんたちの住む蔵屋敷の沢と忍山沢、それから築三百年の屋敷のある沢の間で二人は車ごと消えてしまったんだ。県警の捜索は三日間行われたが、手掛かりはなかった。今日で大掛かりな捜索も打ち切りになったよ」

話し出した名淵が口をつぐみ、Mの顔をのぞき込んだ。聞いているかどうか気掛かりになったのだ。

「聞いているわ。やっぱり忍山沢と築三百年の屋敷があやしそうね。私も気が重くなるわ。ねえ、もっと重要な、秘密の発見はなかったの」

答えたMが、大胆に膝を開いて問い合わせた。名淵が素早く股間に手を伸ばす。愛液で濡れた陰部が指先を奥に誘う。

「実は、忍山沢の渓流に突きだした岩棚の上で、金のテニス・プレスレットが発見された。小さなダイヤがたくさんついているやつ。それと同じ種類のプレスレットを、博子さんも持っていたらしい。まだ鑑定中だけど、間違いはないと思う。築三百年の屋敷の庭にも、結構新しそうな轍の跡が見付かったという。忍山沢から渓流づたいに山越えをすると、あの屋敷の前に出られるんだってね。明日二人でその屋敷に行ってみようよ。僕はぜひ、実際に見てみたい」

「あの屋敷には二十六年間、私は近付いたことがないの。気が進まないわ」

Mが不服そうに答えると、名淵の指先が身体の中に侵入した。

「さあ、僕は色仕掛けに負けてここまで喋ったんだ。今度はMさんの番だ。二十六年前、あの屋敷で何があったんだい。ほら、いい加減に白状するんだ」

Mの耳元をねっとりしたバリトンが掠め、指先が股間をなぶった。二本の指が陰部に侵入し、粘膜を責める。

「ヒッ！」

思わず歓喜の喘ぎがMの口を突いた。

「さあ、何があったんだ。きっと今と同じようなよがり声を出したんだろう」

名淵の指が執拗に股間を責め、左手が乳首をなぶった。正座した尻が床に落ち、高々と背中に緊縛された両手が宙を掴んだ。

「そうよ、あなたと同じセクシーなバリトンが、私を官能の地獄に誘った。尻を、お尻を鞭で打たれたわ。死ぬほど打たれて、私は絶頂に登り詰めた。さあ、早く、鞭を振るってちょうだい。責め苦の中に燃え上がる真っ黒な炎を、もう一度見せてちょうだい。その漆

黒の炎に導かれて私は生きたい」

Mの絶叫が終わると同時に鞭音が響いた。鞭先が鋭く空を切り、素肌を叩くかん高い音が連続する。呻きと絶叫が混じり合い、二つの裸身が入り乱れた。狭い空間はもう、凄惨な修羅場のようだ。二人の身体が空っぽになって肉に変わり、漆黒の炎がメラメラと燃え立ちそうになったとき、突然隣室の壁が震えた。一瞬二人の痴態が凍り付く。澄ませた耳に、連続して壁を蹴りつける音が伝わってきた。

「変態女め、恥を知れ。進太は今、死の迷路を彷徨ってるんだ」

遠く女の声が響き渡った。素っ裸の尻を掲げたMの脳裏に、傲然と修羅場を見下ろすチハルの姿が浮かび上がった。

進太は街道沿いの小さな退避場にゲレンデヴァーゲンを止めて清美を待った。街道から蔵屋敷に曲がる横道の手前、五百メートルの地点だ。通行車両に目撃される危険性は十分承知していたが、自転車に乗った清美の姿を確かめたい誘惑には勝てなかった。幸い山地では四輪駆動車は目立たない。黒塗りのボディも闇に溶け込んでいて好都合だった。またたきもせずにバックミラーに映る闇を見つめていると、自分が闇になったような気がする。もうじき、この闇から二度と這い上がるなくなる。進太はハンドルに置いた両手を強く握り締めた。気温は低くなっていたが、両手はうっすらと汗ばんでいる。今夜の進太は黒いセーターにブラックジーンズを着ている。黒の全頭マスクやパンティ・ストッキングを被ることも真剣に考えたが、銀行強盗と間違われそうでやめた。やはり、清美に好かれる格好にしなければならない。

左のフェンダーミラーにポツンと光る明かりが映った。進太は目だけに神経を集中して座席の中で身体を縮める。やがて明かりはバックミラーの中に入ってきた。星がまたたくように明るさが変化している。間違いなく自転車のランプだった。ペダルの踏み方によって光量が微妙に変わる。追い越される寸前に、進太はドアの陰に隠れた。急いで身を起こすと、白いダッフルコートを着た清美の後ろ姿が見えた。前屈みで懸命にペダルをこぐ様子がかわいかった。進太はきつかり五分間待ってからゲレンデヴァーゲンのエンジンをかけた。静寂を破る低いエンジン音が腹に響き、ヘッドライトの白い光が闇を切り裂く。余りにも目立ちすぎて、自転車に乗った清美を追尾することが無謀に思われてしまう。しばし考えてみたが、もう逡巡はできない。やるか、やらぬのかの二者択一でしかなかった。進太はもう逃げたくはなかった。思い切ってアクセルを踏むと、装甲車のような車体が軽

々と発進した。

ヘッドライトの光の中に、自転車に乗った清美の姿が浮かび上がっている。剥き出しの身体が痛々しいほど不安定に見える。フレームに張った赤い蛍光表示が左右に揺れている。後ろから迫ってきた進太に道を譲るように速度を落とし、道路の左に寄った。両者の距離が急速に縮まっていく。フロントガラスの中で、清美の後ろ姿が大きく膨らんでくるような気がする。追突まで数秒も残されていない。進太の胸を恐怖が掠めた。ハンドルを切って追突を避けたくなる。必死で恐怖に抗い、両手を突っ張って進路を維持する。冷静に急ブレーキを踏んだ。タイヤの軋る音に比べ、追突のショックはほとんどなかった。フロントバンパーが何かに当たった感触と同時に清美の身体が前につんのめり、反動で後ろに倒れた。白い自転車が横倒しになる。進太は即座にすべてのライトを消してエンジンを切った。追突現場の一切を闇が包み込んだ。進太は助手席に置いたマグライトとロープを掴んでドアを開けた。追突のショックで動転している清美を素早く縛り上げねばならない。高い運転席から路上に飛び降りた途端に膝頭が震えた。全身を包んだ闇が怖い。路上を転がっていく枯れ葉の音が耳に障った。転倒した痛みを訴える声も聞こえないし、清美がうごめく気配もない。進太の胸を不安がよぎった。マグライトを点灯して路上を照らし出した。巨大なフロントバンパーの下に仰向けに倒れている清美が見えた。しっかり目を閉じて微動だにしない。進太の膝が大きく震えた。震えは全身に伝わり、マグライトの光が激しく上下する。全身が硬くなつて脂汗が吹き出してきた。生暖かい感触が股間に広がる。進太は清美の死体を見下ろしたまま長々と失禁した。だが、小便を垂れ流しながら見下ろす死体は、まるで生きているように見える。路上には一滴の血も落ちていない。進太は勇気を奮い起こして清美の顔の横にひざまずいた。そっと口元に手をやると確かな呼吸をしている。急に全身の力が抜けた。思い切って振り起こそうとしたが、すんでの所で思いとどまる。慎重に頭部を撫でてみると、側頭部に大きな瘤ができていた。倒れた拍子にフロントバンパーに頭をぶつけたらしい。脳震盪という言葉が進太の頭に浮かんだ。だが、救急車を呼ぶわけにはいかない。慎重に荷物室に横たえて、自転車と一緒に運ぶことに決めた。大きな不安は残ったが、ともかく計画は成功したのだ。深々と冷たい外気を吸い込むと股間に寒さを感じた。情けなく失禁した事実を改めて思い出した。

荷物室に寝かせた清美を気遣って、進太は殊更ゆっくりとゲレンデヴァーゲンを運転した。時刻はもう八時近くになっている。街道を走る間も、対向車が一台あっただけで追尾する車両はなかった。築三百年の屋敷に続く横道に入ってからは、余裕を持って運転した。

ヘッドライトの光が黒々とした長屋門を照らし出した。斜めに崩れ落ちた梁の下を慎重に潜り抜ける。広々とした庭にてたが、霜枯れた草地に轍の跡を残さないように、できるだけ大回りに庭を回って博子を監禁していた土蔵に向かった。厚い土の扉の前にゲレンデヴァーゲンを後ろ向きに止める。コンテナから出したコールマンのランタンに火を灯してから土蔵の扉を開けた。少しかび臭い匂いが鼻を突いたが、中は寒くなかった。置き去りにされたテーブルの上にランタンを載せ、家から持ってきた二枚の毛布を柱の横に広げた。リアゲートを開き、荷物室に横たわった清美を慎重に抱き上げて運び、毛布の上に寝かせた。清美は相変わらずぐっすりと寝入っているようで反応がない。ただ、呼吸はしっかりとしていて、顔色もいい。最後に後輪の曲がった自転車を運び入れてから扉を閉め、横たわった清美の隣りに、柱に寄り掛かって座り込んだ。清美がいつ目覚めても対応できるようにはま縄の束を床に広げた。光の加減で清美の横顔が微笑んでいるように見える。進太も他愛なく微笑み返す。その瞬間、ここに泊まることを決心した。ちょうどMも留守だ。朝が早い歯医者さんも、もうじき寝入ってしまう。進太に干渉できる者は誰もいない。土蔵に外泊することを決断すると急に気が楽になった。失禁で濡れた股間が不快になる。両足を投げ出して座ったまま靴を脱ぎ、ズボンを下ろした。黒いビキニショーツも脱いで下半身を剥き出しにする。陰毛の中に縮み込んでいたペニスを摘んでハンカチで拭いた。思ったより寒さは感じない。ランタンの火で密閉された室温が上がったようだ。手持ち無沙汰な好奇心が、今夜の獲物を点検したい欲望に火を点けた。萎んでいたペニスが硬くなってくる。

進太は中腰になって清美の横に屈み込んだ。もこりとしたダッフルコートがこの場の雰囲気に馴染まない。コートの裾から伸びた紺色のウールパンツも、ブーツ型のスニーカーも似合わないと思った。手を伸ばしてスニーカーの紐を解いて靴を脱がせる。白い綿のソックスを脱がすと、ストッキングに包まれた小さな足が現れた。左の足首の外側から血が滲んでいる。転倒したときに負った擦り傷らしい。小さな足を両手で持って傷口に口を寄せた。舌を這わせると酸っぱい血の味が口中に広がる。勃起したペニスが痛くなるほど硬くなった。もう我慢ができなかった。白いダッフルコートの前をはだけさせて藤色のセーターをたくし上げた。紺色のパンツのジッパーを下ろし、一気に引き下ろす。あらわになった下半身を見て、進太は目を見張った。清美の股間には黒い小さな布切れしか張り付いていない。それも薄手のレースで、性器が透けて見えるほどだ。黒いTバックのショーツの上から白いガーターを付けて、ストッキングを止めていた。思いがけない大胆な下着

が進太の欲情をそそった。震える手でセーターと Babaシャツを脱がせる。Tバックとお揃いの黒いレースのブラジャーが、ふっくらとした胸を覆っている。勝ち気な清美によく似合っていると思った。

「凄い、見直したよ」

声に出してつぶやいてから、進太は立ち上がった。テーブルに載せたランタンを引き寄せ、下着姿で横たわる清美を明るく照らし出した。見下ろした清美は、服を着ていたときは別人のようだ。二十代後半の、美しい盛りの肉体を誇らかに晒している。黒いレースで透けて見える乳房は、はち切れんばかりに盛り上がっている。細く締まったウエストから豊かな腰が広がり、股間を割った紐のような布切れの両端から柔らかな陰毛がはみ出していた。進太は美しさに誘われるようにして再びしゃがみ込んだ。肩と尻を持って身体をうつ伏せにする。丸い尻の割れ目を走る黒い紐が真っ先に目を射た。裸と変わりのない、より艶めかしく見える尻だ。進太は唾を呑み込んでから黒いTバックを脱がした。ブラジャーのホックも外して背中をあらわにさせる。滑らかな素肌が手に張り付きそうだ。均整のとれた裸身が目にまぶしかった。

「ウーン」

突然清美の口からうめき声が漏れ、大きくくしゃみをした。進太は慌ててランタンを消す。真の闇が訪れた。手探りで床に置いた麻縄を捜す。

「寒いわ。ここはどこ」

清美の掠れた声が響き、身体を起こす気配がした。進太は麻縄を握り締めたまま床にうずくまり、じっと清美の気配を探った。

「明かりはないの。何も見えない」

また清美の声が聞こえた。進太は声の方にじり寄る。すぐ側で荒い息づかいが聞こえた。闇を怖れる清美の恐怖がヒシヒシと伝わってくる。後は清美の向きを確認するだけだ。進太は手に持った麻縄で床を難いだ。縄の擦れる不気味な音が響き渡る。

「だれ、誰かいるのね」

すぐ前で声がした。間違いない、清美は背を向けている。進太は両手を開いて闇を抱きすくめた。清美の両乳房を左右の手に感じた。すかさず両脇に手を差し入れて、腕を背中にねじ曲げる。素早く麻縄を素肌に這わせて後ろ手に縛り上げる。

「痛いっ、何をするの。痛いわ、痛いっ」

闇の中で清美が大声を上げて裸身を揺すったが、抗う術はない。二週間に渡って博子を

縛り慣れた進太には闇も妨げにならない。きつく乳房の上下を縛り上げてから、首繩を掛けて繩止めをした。緊縛が終わると、観念したように清美の身動きが止まった。荒い息づかいだけが伝わってくる。

「だれなの、一体だれなの。こんな乱暴をされるいわれはないわ。人違いじゃないの。それとも、車をぶつけた人なの。ねえ、何とか言ってよ。裸で縛り上げるなんてあんまりだわ。ねえ、答えなさいよ」

闇の中で後ろ手に緊縛された恐怖で、清美は連続して言葉を投げた。床に正座している気配がする。全裸にされたことも認識しているらしかった。進太は手探りでランタンを置いたテーブルを捜した。ランタンの自動点火装置を探し出して慎重に操作した。カチッと乾いた音が響き、蔵中がまぶしいくらいに明るくなった。中央に正座した裸身がブルッと震えた。ランタンを背にした進太を見上げる。

「消して、明かりを消してください。お願い、見ないで」

真っ赤になった顔を伏せて、頭を左右に振りながら清美が叫んだ。素肌を噛んだ繩目の軋る音が陰惨に声に混じった。

「キヨミ先生、明かりを点けるように頼んだのは先生ですよ」

進太の低い声で清美が顔を上げた。大きな目をさらに大きく開いた驚愕の表情で進太を見つめる。

「まさか、進太ちゃんなの。暗くてよく見えないけれど、嘘でしょう。進太ちゃんがこんなことをするわけがないわ。だれなの」

清美が凜とした声で叫んだ。人が事実を認めたくないときは、事実を拒絶してしまうのだ。だが、進太は拒絶されるわけにいかない。二歩前に進み、明かりの当たる場所に出た。清美から二メートルの位置だ。正座した清美の目の前に進太が立っている。剥き出しの股間で大きく勃起したペニスが反り返っていた。もじゃもじゃの陰毛の中に突き立ったペニスが嘲笑っているように見える。清美は小学校三年生の夏休みの山根川で、進太と水遊びをしたことを思い出した。進太は素っ裸だった。皮を被ったかわいいペニスをよく覚えている。その小さかった進太が、教師の清美を素っ裸にして後ろ手に縛り上げたのだ。挙げ句の果てに、猛々しく成長したペニスを目の前に見せ付けている。とても信じられることではなかった。許されることではない。全身から血が引いていく感触がした。正座した膝が崩れ、白い裸身が床に倒れた。

「先生、無理をしちゃだめだよ。追突の時に、きっと軽い脳震盪を起こしたんだ。側頭部

に大きな瘤ができていたよ。楽にしていた方がいい」

無邪気な言葉が清美の怒りに火を点けた。もう、事実を認めるしかなかった。

「進太ちゃん、何を言うの。先生にこんな乱暴をして。もう、ただでは済まないわよ。早く縄を解きなさい。できるだけ穏便に済ますから、悪質ないたずらはやめなさい」

叱責の声を進太は平然と聞き流した。清美も意外に無能な女だと思った。

「決していたずらじゃないですよ。どう見ても立派な暴力です。僕は先生に説得されて、補習の約束をしたけれど、やはり嫌になりました。だから、約束した相手のキヨミ先生を、消しゴムで消すことに決めたんです。ここで監禁することにします。つまり、外の世界では先生は消えてしまう」

倒れ伏した清美の裸身に、進太の無表情な声が落ちた。清美の背筋を恐怖が貫く。狂気としか思われない言葉だった。大声が口を突いた。

「なんて馬鹿なこと言ってるの。監禁ですって。私を消してしまうですって。戯言を言わないで、現実を見なさい。たかが補習の講師になりたくないからと言って、教師を監禁する馬鹿がどこにいますか。それも先生を裸にして辱めるなんて聞いたこともない。今なら許します。早く縄を解きなさい。お願ひ、進太ちゃん、早く冷静になって」

「冷静になった方がいいのはキヨミ先生ですよ。僕が取り返しのつかない道を選び取ったことを、先生は理解すべきだ。たとえいくら不合理でも、現実は現実として認めるべきなんです。それに、監禁にはそれなりのマニュアルがあることも知っていた方がいい。素っ裸にして拘束するのが監禁の原則です。もっとも、僕はチハルとは考えが違うから、先生が素直になりさえすれば、週に一度は服を着せます。シャンプーも行水も認めますよ。何と言っても先生は一生、ここで僕と一緒に暮らすんですから。さあ、そろそろ立ち縛りにしますよ。それとも隅にあるバケツで小用を済ませてからにしますか」

進太の声が終わると同時に、清美の怒りが消え失せていった。進太は完全に狂気に取り付かれてしまったと思った。居たたまれない絶望だけが清美をさいなむ。悔しいことに尿意も襲ってきた。冷たさが下腹部を責める。だが、進太はバケツを使って小用を足せと言ったのだ。真っ黒な絶望が襲い掛かり、目の前を死が掠めた。舌を噛みしめた歯に力を込める。舌の痛みが全身に伝わり、素っ裸で舌を噛んだ死に様が脳裏に浮かんだ。死にを絵に描いたような滑稽な死だと思った。その時、啓示のように内なる声が響いた。「狂気は必ず隙を見せるはずだ」と声は告げた。すんでの所で清美は歯の力を緩めた。初めて希望がえたような気がした。妄想のような希望だったが、清美はその希望を信じた。狂気

に捕らわれた教え子の隙を勝ち取れなければ、教師として生きてきた値打ちが無いと確信した。ましてや、教え子に責められたくらいで自殺するのは笑止の沙汰だった。これは形を変えた学校暴力に過ぎないと、必死に思い込もうとした。

清美は歯を食いしばって立ち上がり、胸を張って進太に小用を要求した。差し出されたバケツの上に堂々と屈み込んだ。素っ裸で後ろ手に緊縛された背筋を伸ばして、真っ正面から進太を見上げた。教育者の力で何とか恥辱に打ち勝ちたいと願ったが、恥ずかしさで全身が赤く染まる。裸身がぶるぶると小刻みに震えだした。思い切って両膝を開き、進太の目に股間を晒す。歯を食いしばって放尿した。だが、長々と続く放尿がたまらない屈辱を呼び覚ました。清美は肩を落として顔を伏せ、さめざめと泣いた。

夢を見ているのは分かっていた。それも怖い夢だ。Mの身体が規則的に揺れている。不安定で心細い気持ちがますます募っていった。夢の中のMはやっと幼児になりかけたばかりで、まだおむつも取れていない。腰の回りが不自然に膨らみ、濡れた布が不快だった。尻の下はブランコの硬い木の板で、両手は太い鎖を硬く握り締めている。大きく、大きくブランコが揺れる。揺れに応じて幼いMの不安は高まる。小さな足の下に地面はない。宙に浮かんだブランコがM一人を乗せて揺れ続けている。早く降りたかったが、一人では降りることができない。ブランコに乗せてくれた大人を捜して辺りを見回す。まるで雑踏のように人たちが行き交っている。たたずんで見つめている顔もたくさん見えた。だが、捜している顔がないと思ったとき、突然戸惑いを感じた。頬が真っ赤になり、泣きべそになったのが分かった。捜している顔がなかったのではなく、捜す顔がなかったのだ。急いで母と父を呼ぼうとしたが、二人の顔も思い浮かばない。焦りが全身に込み上げ、背筋を恐怖が貫いていった。太い鎖を握った両手がブルブルと震え、涙が流れた。身体を震わせながら、声を立てずに泣きじゃくった。ブランコは揺れ続け、恐怖が全身を占める。冷たく濡れていた尻が急に温かくなかった。心の底に温かさが伝わっていくような気がする。その小さな希望に縋り付くようにして、幼いMは長々と失禁した。

Mは慌てて股間に手を伸ばした。手に触れた陰毛は湿り気を帯びていたが、失禁はしていないなかった。僅かに覚醒した意識が見た、嫌な夢が断片的に甦ってくる。性夢のようなときめきを感じた。これまでに何回となく見てきた夢だった。今もなお、私はブランコから降りられないでいるのだと、告げられたような気がする。孤絶した悲しみを感じた。下半身が寒い。夜明け前の寒さが室に忍び込み、毛布からはみ出た剥き出しの尻を撫で回している。大きく身震いして、狭いダブルベッドで裸身を縮めた。無性に温かさが欲しかった。縮めていた両手足をおずおずと伸ばす。名淵の裸身に手足が触れた。温かな素肌の感触が胸の奥まで沁み入ってくる。がっしりした裸身を全身で絡め取った。狂おしく素肌を擦り付けると、小さな声で名淵が呻いた。セクシーなバリトンの呻きだ。喉元まで懐かしさが込み上げてくる。前に回した手で股間を探った。量感のあるペニスを手の中に包んで撫でさする。

「もう少しだよ。まだ眠らせてくれ」

寝ぼけた声が聞こえた。手の中のペニスが硬くなってくる。Mは毛布の中に潜り込み、勃起しかけたペニスを口に含んだ。まだ弾力のある肉を舌でなぶる。口中一杯に膨らんでくるペニスが愛おしい。このまま射精させて精液を呑み込みたいと思った。ブランコから降りる必要はない。素っ裸の名渕を後ろ手に縛り上げ、絶頂を極めるまで鞭打ってやりたくなった。

進太は土蔵の厚い扉をそっと開いた。白い光が目にまぶしい。飛び込んできた外気が冷たく頬を刺した。思わず後ろを振り返る。清美の裸身がブルッと震えた。清美は素っ裸で後ろ手に縛られている。膝上で足を縛った縄と首縄の間を別の縄で短く連結されている。上体を前屈させて尻を突き出した惨めな格好だ。足首が縛られていないので、ヨチヨチ歩きで歩くことはできた。しかし、後ろ手から延びた縄が裸身を無情に天井から吊り下げている。かろうじて身体の向きを変えられるだけだ。うつむいていた顔を上げ、恨めしそうに進太を見上げた。縄の猿轡が哀れさを誇る。口中には黒いレースのTバックショーツが含まれてあった。あまりの口うるささに閉口した進太が、口封じのために噛ませたものだ。「素っ裸では、やはり寒いか。キヨミ先生が風邪を引くと僕も困る。一晩ですいぶん素直になったから、立ち縛りは許してやろうか」

進太が独り言をいって清美の前に戻った。素肌に鳥肌が立ち、前屈した裸身が微かに震えている。猿轡を噛ました口が動き、見上げる目に哀願の色が見えた。寒さを訴えているに違いなかった。ドーム館にゲレンデヴァーゲンを返して、土蔵に戻ってくるまでの時間は四十分ぐらいだ。蔵屋敷に寄ってバイクや食料などを取りそろえても、一時間あれば戻れる。そのくらいの時間なら、清美を吊っておかなくても安全なような気がした。バケツを跨がせて放尿させてからは、さすがに清美もおとなしくなっていた。威嚇の鞭打ちも効果があったはずだ。

「監禁の原則には違反するけど、戻るまでおとなしくしていると先生が誓うなら、吊り縄を解いて座り縛りで柱に繋ぐことにしますよ。毛布も掛けて上げる。さあ、どうしますか。誓えますか」

進太の問いに、清美がうれしそうに首を振って応えた。

「よし、後ろを向きなさい」

命じられたとおりに、清美は膝上を縛られた不自由な身体で向きを変えた。進太の目の前に裸の尻が突き出された。白い双臀に五本の赤黒い鞭痕が残っている。そのうちの一つ

は尻の割れ目に食い込み、肛門の端を赤く腫れさせていた。昨夜の興奮が甦る。尻の後ろに屈み込み、伸ばした舌で肛門を舐めた。ぐぐもった悲鳴が上がり、白い尻が大きく揺れた。ジーンズの中でペニスが勃起してくる。進太は卑猥な笑いを浮かべて立ち上がり、清美を天井から吊り下げた縄を解いた。首と足を連結した縄も解き去る。前屈した裸身がうれしそうに伸び上がった。

「さあ、柱の前に座ってください」

進太が命じると、素直に清美が従う。縄尻を柱に結わえ付けてから、裸身を毛布で覆った。これで清美も暖かくしていられると思うと気が軽くなった。土蔵の扉を大きく開け放して外気を入れる。母屋の屋根に遮られて日は射し込まないが、霜に覆われた枯れ草さえ生き生きとして見えた。進太は慎重に扉を閉めてからゲレンデヴァーゲンの運転席に座った。時刻は午前七時だった。日の出から三十分が経過していた。

清美の耳に、遠ざかっていく低いエンジン音が聞こえた。肩の力を抜き、正座した背を太い柱に預けた。闇の中で何も見えないが、裸身を覆った毛布がうれしい。冷え切った身体が温かくなっていくのが分かる。一人で放置されたことで気持ちの落ち着きも戻ってきた。尻に走る鞭痕が痛い。昨夜の屈辱を思い出して裸身がカッと熱くなる。大きく身震いすると縄目が軋った。乳房の上下を縛った縄が素肌を擦る。後ろ手にされた手を握り締めた。恥辱の姿態が闇の中に浮かび上がるようだ。だが、ついに進太は隙を見せたのだ。前屈させて天井から吊り下げた裸身に情けを掛けた。その情けを掛けさせたのが教師としての自分の力量だと思うと、今度は全身が矜持に震えた。清美は中腰になり、縛られた両手で柱をなぞった。縄尻を縛り付けた結び目がすぐに見付かる。二重になった固い結び目に爪を立てた。指先に力を込めて懸命に解こうとする。縄で括られた手首が痛くなると位置を変えて左手を使った。何回か手を替えて結び目に挑んだ挙げ句に、右の親指と人差し指の爪が割れた。血の滲む感触で背筋が寒くなったとき、さしもの結び目も緩んだ。急いで柱から縄を解き、痛む腰を我慢して立ち上がった。裸体を覆った毛布が床に落ちた。途端に冷気が素肌を襲った。だが、繋がれた縄から解放された喜びに勝るものはない。膝の上を縛った縄が邪魔をするが自由に歩ける。猿轡の中で喚声を上げた。闇の中をヨチヨチ歩きで扉へ向かう。足がもつれて転びそうになった。思わず悲鳴を発したが、裸の肩が壁に当たって持ちこたえた。おまけに壁が動いた感触があった。清美は渾身の力を込めて壁を押した。低い軋り音とともに扉が外に向けて動いた。白い光が射し込み、冷たい外気が頬に触れた。闇に慣れた視界が真っ白になる。大きく目を見開くと涙が出た。

後ろ手に緊縛された裸身が土蔵から外に転がり落ちた。枯れ草に降りた霜が素肌を責める。清美は歯を食いしばって立ち上がろうとするが、膝上を縛った縄が動きを邪魔する。やっとの思いで立ち上がり、ヨチヨチと三歩ほど歩いたが、素足を襲う霜の寒さに耐えられそうにない。焦りが全身を追い立てたが、この一瞬に逃亡を賭けるしかないと思い定めて土蔵に戻る。室の隅に投げ捨てられていたスニーカーに苦労して両足を突っ込む。足元さえ決まれば、たとえヨチヨチ歩きでも、二時間あれば街道に出られる。後は、戻ってくる進太と遭遇しないように注意すればいい。どうせ、進太はバイクで帰ってくる。あのかん高いエンジン音が警報になると思った。進太が去ってから、もう三十分は経過している。何としても急ぐことだ。清美は思いにまかせぬ歩みに歯がみをしながら、霜の降りた白い地面を歩いていった。

崩れた母屋を回って庭に出たときには、膝の上の肌に血が滲んでいた。歩みに連れて縄目が擦れ、皮膚が裂けてしまったのだ。だが、お陰で縄目が緩み、足が抜けそうな気がする。清美は眉をしかめて前方の長屋門を見つめた。屋根の上には真っ青な空が広がり、淡い日射しが差し込んでいる。日陰になった土蔵の周辺とは違い、降りた霜も溶け去っていた。狭い歩幅で苦労して歩いてきたせいもあるが、うっすらと裸身が汗ばんでいる。久しぶりに天気も温かくなるような気がする。裸の身には好都合だった。恥ずかしさを思い起さぬように歩を進める。股間を縛られなかつたことが唯一の救いだった。進太は昨夜、清美の裸身を様々に縛り上げ、最後に股間縛りで歩くことを強いたのだ。にやにやと笑いを浮かべて見つめる進太の前で、一步を踏み出した途端に陰部を激痛が襲った。あの屈辱は今も忘れることができない。女の性をなぶりきる責め苦だ。股間にめり込んだ縄が、情け容赦もなく性を蹂躪したのだ。だが今は、不自由な歩みでも普通に歩ける。股間を縛らなかつた進太の落ち度を嘲笑ってやりたかった。庭の中央にある松の木の下まで来たところで、膝上を縛った縄がようやく抜け落ちた。もう歩行を妨げるものはない。後ろ手に緊縛された裸身を躍らせて長屋門に向けて走った。もう一時間近く経過した気がする。今にもバイクのエンジン音が轟いてくるような気がして恐ろしかった。

進太はドーム館の駐車場にゲレンデヴァーゲンを戻した。昨夜清美の自転車にぶつけたフロントバンパーを点検してみたが、大小無数の傷があつて特定することができなかつた。安心してリアゲートを開け、蔵屋敷に寄つて積んできたバイクを下ろした。エンジンをかけると、かん高い轟音が心地よく谷間にこだました。四輪車よりバイクがいいと心底思う。玄関まで行ってインターホンを押してみたが、やはりチハルは帰つていない。ゲレンデヴ

アーゲンのキーを郵便受けに投げ入れてからカワサキKX60に跨った。土蔵に残してきた清美が急に心配になる。凄いスピードで山を下って築三百年の屋敷を目指した。往路と同様、街道を走るときは気を使った。しかし、今日は幸い土曜日なので学校が休みだ。通学する生徒たちの目を気遣うことはない。アパート暮らしをしている清美の失踪も、月曜日まで秘匿できるかも知れなかった。すがすがしい気持ちで横道に入り、全身に朝日を浴びてスピードを上げた。中腰にしたままハンドルを握り、荒れた路面から伝わるショックを膝の屈伸で吸い取る。面白いように路面の凸凹をクリアできた。額にうっすら汗が浮き出たころ、右手に遠く長屋門が見えた。まだ黄色い枯れ葉が残るクヌギの枝越しに見た長屋門は、どことなく不吉な様相をしていた。浮かび上がってきた不安を吹き飛ばすように、素っ裸で放置してきた清美に思いを馳せる。

「アッ」

小さく叫んで、進太は唇を噛んだ。出掛けに見た清美の裸身を急いで思い返す。尻の割れ目にのぞいていた肛門が目に浮かんだ。剥き出しの尻だった。股間を縛り忘れてしまったのだ。陰部に食い込む股縄がなければ、清美は自由に歩行できる。せめて足首を縛るべきだったと思った。自転車が転倒した時の擦り傷を哀れみ、膝上を縛っただけで済ませたことが悔やまれてならない。進太はバイクのスピードを緩めずに長屋門を潜り抜け、急いで母屋の裏に回った。大きく見開いた目に、開け広げられた扉が飛び込んできた。背筋が冷たくなりハンドルを握る両手が硬くなった。バイクから飛び降り、土蔵に駆け込む。寒々とした室には、清美の裸身に掛けた毛布が落ちているだけだ。目の前が真っ暗になったが、目まぐるしく頭を働かせて時間を計算した。時刻は午前八時を回ったところだ。最大限の時間を考えても、清美が逃亡してから一時間しか経っていない。築三百年の屋敷から街道まで、急いで歩いても一時間はかかる。それに清美は素っ裸で後ろ手に縛られているのだ。山に逃げ込む恐れはない。街道に出て助けを求める以外に、救出の望みはないはずだった。きっと、この土蔵と街道の間に潜み、バイクの音を聞いてすくんでいるに違ひなかった。急いで街道に戻り、築三百年の屋敷へ向かって追っていけば捕らえることができる。捕らえなければ生涯が終わると思った。進太は再びバイクに跨り、怖い顔で街道を目指した。

清美は街道に向けて歩き出して十五分ほどのところでエンジン音を聞いた。歩き続けて火照った身体が冷水を浴びたように冷たくなった。無防備な裸身がわなわなと震える。思わず道端にしゃがみ込んでしまった。喉元に吐き気が込み上げてくる。ようやく緩くなっ

た縄の猿轡の間から、唾液にまみれた布切れを舌で押し出す。黒いTバックのショーツが足元に落ちた。堪らない尿意が襲い、下腹がキリキリと痛んだ。背中で緊縛された両手を捩ってみたが、高手小手に縛り上げた縄目は緩みもしない。バイクの音がますます高まる。もうこれまでかと観念してうなだれると、足元に落ちた黒い布切れが目に入った。お気に入りだったショーツがぼろ切れみたいに転がっている。醜く汚らわしい眺めだった。途端に怒りが込み上ってきた。教え子ごときに負けてなるかと歯を食いしばる。

「私は教育者よ。負けるもんですか」

大声で叫んだ。久しぶりに耳を打った自分の声が、萎えかけた勇気を奮い起こしてくれる。両足に力を入れて立ち上がり、枯れた枝が行く手を阻む山の中へと踏み入っていった。シダと苔に覆われた窪地に下り、再び小高い雑木の茂みに上ったところでバイクの音が擦れ違っていった。全身を緊張させてしゃがみ込むと、遠ざかっていく進太の背が見下ろせた。だが、間もなく凄い勢いでバイクが戻ってきた。逃亡を発見した進太が追跡を開始したに違いなかった。バイクで追う進太に発見される恐れはなかったが、清美も身動きがとれそうにない。かん高いエンジンの音は遠く低く、街道の方角から響き続けた。清美は右手に続く細い獸道を通って、山越えで街道に出ることを決心する。枯れ枝の下を這うように進む、困難な道が待ち受けているはずだった。だが、不思議と恐怖は無かった。なだらかな山並みは、時間を費やせば必ず街道に出られると確信できるほどのスケールだ。枯れ草や枯れ枝に責められて、縛られた裸身が擦り傷だらけになるぐらいで済むに違いない。尻を鞭打たれる痛みと屈辱より、よっぽどましだと思う。清美は方向を変え、小さな沢に下りる獸道に分け入っていった。

進太は街道と築三百年の屋敷の間を、ずいぶん長い時間走り回った。しかし、清美を発見することはできなかった。熱い焦燥が全身を焼き尽くす。路肩にバイクを止めて肩で大きく息をついた。車体を搖するとフューエル・タンクの底で貧相な音が響いた。もうほとんどガソリンも残っていない。ぼう然と眺める山襞が真っ白になり、やがて真っ赤に染まった。もう破滅しか残されていないと覚悟した。全身が硬く緊張してくる。

「ウワー」

大声で叫ぶと、力強いこだまが帰ってきた。どことなくチハルの声に似ていた。懐かしさが込み上ってきて涙がこぼれた。進太はバイクをUターンさせて、ドーム館を目指した。もはやチハルに救いを頼む以外に道はなかった。何ともやり切れない気持ちだったが、もう子供の出る幕ではないような気がした。涙が止まらなくなる。やはり負け続けるのかと

心の底で思い惑い、きつく歯を食いしばってハンドルを握り締めた。

インターホンから進太の切羽詰まった声が響き渡ったとき、チハルはまだ着替えもしていなかった。市からドーム館に帰ってきたのは二十分ほど前だったが、やり場のない鬱陶しさを持て余し、椅子に座ったまま目を閉じていた。時刻はもう、午前九時を回っている。「チハル、助けて。僕はもう、どうしようもないよ」

スピーカーを通して聞こえてくる泣き声が、チハルを元気付かせる。Mが痴態を晒している部屋の壁に大声で毒突いた、昨夜の無様な記憶を振り払うのにちょうどいい来訪だった。すぐ上がってくるように受話器に答えてから、警報装置のスイッチを切った。程なくしてドアが叩かれると同時に、進太が部屋に飛び込んできた。

「キヨミ先生が逃げた。僕がミスったんだ。どうしよう、もう取り返しがつかないよ。ねえ、チハル、お願ひ、僕を助けて」

大声で頼む顔は泣きべそをかいていた。緊張して怒らせた肩は細かく震えている。だが、進太の言っている意味が分からぬ。ただ、真剣すぎる声の調子に不吉な匂いを嗅いだ。話は聞きたくなかったが、危機の予感が胸の底の琴線に触れた。清美を殺したくなると言っていた声が記憶に甦った。思わず椅子から身を乗り出す。

「先生を殺し損なったと言いたいの」

静かに尋ねた問いに、進太が大きく首を横に振って答える。

「違うよ。殺しはしない。車をぶつけて気を失わせてから土蔵に拉致したんだ。素っ裸で縛り上げて監禁していたのに、ゲレンデヴァーゲンを返しにいった隙に逃亡したんだ。チハルに言われたように、厳重に拘束しなかった僕が悪いんだ。ずいぶん捜したけど見付からない。ねえ、もう破滅だよ。どうすればいいか分からないよ」

一息に言った進太がまた泣き出してしまった。肩を震わせて豪快に泣く。見ているチハルが笑い出してしまいそうになるほど、手放しな泣きっぷりだ。だが、進太が昨夜実行した仕事の内容はよく分かった。チハルは進太の目を見つめて、また静かに口を開いた。

「それで、私に何をしてもらいたいの。警察に捕まらないように逃がして欲しいのか、逃亡したキヨミを捕らえて欲しいのか、はっきり言わないと分からない」

泣きながら聞いていた進太の顔が急に輝きだす。うれしそうに口元が歪んだ。

「キヨミ先生を捕まえてください。お願ひします」

喜びの声で言って、進太はまぶしそうにチハルを見た。

「キヨミはどんな格好で、どのくらい前に逃亡したんだい」

「素っ裸で後ろ手に縛綴してある。猿轡を嘴ませ、膝の上で足も縛ってあるよ。でも、股間を縛り忘れたから自由に歩ける。逃げた時刻は分からぬけど、一人で放置した時からなら、もう二時間になる」

問い合わせた進太の様子は、もうすべてをチハルに任せきった風情だった。

「二時間は長いね。手遅れかも知れない。どちらにせよ時間との勝負だ。すぐ出掛けるよ。それから、犬、犬が必要だ。クロマルを連れていこう」

目をつむって考えていたチハルが、立ち上がって決断を下した。壁に備え付けたクロゼットを開けて黒革のガンケースを取り出す。その場でレミントンM1100に五発の実包を装填し、別の実包を二発、紫紺のスーツのポケットに入れた。横で見ていた進太の目が輝き出す。

「ねえ、チハル。クロマルはだめだよ。バカ犬だから役に立たない。それより、チハルは着替えた方がいい。戦闘服の方が追跡に似合う」

甘えた声を出して進太が擦り寄ってきた。

「進太、私が銃を用意したんだ。これからすることは遊びじゃない。時間もないし犬も要る。さあ、つべこべ言っている暇があったら車のエンジンをかけてきなさい」

一喝すると、すくみ上がった進太が真っ青になって飛び出していった。確かに戦闘服の方が活動的だ。だが、今は時間との勝負だった。チハルはスーツの足元をジャングルブーツで固めただけで、銃を手にして階下に下りた。

ゲレンデヴァーゲンの運転は進太に任せ、チハルは蔵屋敷の庭から連れてきたクロマルを膝に抱いた。クロマルはセッターとシェルターの雑種で、体型はシェルターに似ている。精悍な獣犬というより、白いたてがみを持った愛玩犬に見える。だが、犬の臭覚は決して軽んじられない。チハルは膝の上に載ったクロマルに最低限の仕付けを施そうとした。始めは運転席の進太に気を取られていたクロマルが、チハルの気迫に押されて従うような素振りを見せた。これまでも、何回かクロマルを獣の真似事に連れ出したことはある。いつも進太が一緒だから、それほどの役には立たなかつたが、確かに獣犬の素質は見せていた。今度の仕事は獣から見ればよっぽど楽だ。ひたすら清美の臭線を追い続けてくれればいい。それも、たかだか二時間前の人人が通らない山の中の臭線だ。きっとうまくいくと信じて、クロマルの頭を撫でた。

「ワンッ」

うれしそうにクロマルが一鳴きして、チハルに答えた。チハルの口元に精悍な笑いが広がる。人を狩り立てるのは初めての経験だった。

清美が逃亡した後の土蔵には、クロマルに匂いを覚えさせる品が溢れていた。チハルは清美の着ていた衣服を床に広げ、クロマルを呼び寄せた。真剣な表情で衣服を指し示し、長い鼻先にあてがった。すぐクロマルが興味をあらわす。牡のクロマルは、たとえ人でも雌が好きなようだ。特に黒いレースのブラジャーが気に入ったようで、しきりに尻尾を振って匂いを嗅いだ。頃合いを見て、チハルがブラジャーをスーツのポケットに隠した。クロマルは服地の上から匂いを嗅ぐ。ポケットからブラジャーを出すとうれしそうに吼えた。一緒に転がり出た散弾の青いシェルには見向きもしない。ブラジャーを床に引きずって素早く外に飛び出す。布切れを胸ポケットにしまって素知らぬ顔をしていると、クロマルはあっけに取られたように首を傾げた。続いてしきりに地面を嗅いで歩く。すぐに臭線を探り当て高々と尾を上げた。空を仰いで高鼻を掲げる。

「ヨシッ、イケッ」

すかさず進太が命令を下した。逃亡した清美の臭線を追ってクロマルが進む。進太が小走りに後を追った。クロマルの足が速くなったところで、チハルはゲレンデヴァーゲンを発進させた。二十メートルほどの間合いを置いて、ゆっくりクロマルと進太を追尾した。街道に向けてしばらく下ったところでクロマルと進太が立ち止まった。クロマルの吠え声が連続して響いた。チハルも車を降りて近付いていく。

「ほら、大手柄だよ。この犬を見直してしまった」

進太が感動の声で叫んで、黒い布切れを両手で広げた。

「キヨミ先生のショーツだよ。色っぽいだろう」

呼び掛ける進太の声が弾んでいる。心持ち頬が赤く染まっていた。確かに大胆な下着だったが、それを穿く清美は油断できないとチハルは思った。だが、清美の運も尽きたと改めて確信する。山へ逃げ込んで、犬に追われたらひとたまりもない。それも、逃げ込んで一時間も経っていないのだ。せいぜい五百メートルも追えばエンドマークだった。

「ここから山に入ったんだね。馬鹿なことをするもんだ。進太、クロマルに首輪を付けなさい。ゆっくり狩り立ててやる」

命じる声にも余裕が溢れていた。クロマルを先頭に、二人の猟師が山の中に分け入って行った。

ブリティッシュ・レーシンググリーンに塗られたMG Fが、築三百年の屋敷に続く道をゆっくり走っていく。ハンドルはMが握っていた。荒れた路面を避けながら慎重に運転する。オープンにした車内に晩秋の風が巻き込んでくる。いくら日射しが強いからといって、午前十時を回ったばかりの風は冷たい。助手席に座る名淵が寒そうにスーツの襟を立てた。Mの口元に笑いが浮かぶ。サロン・ペインの駐車場でMG Fのハンドルを握るよう言われた時に、Mは迷わず車体をオープンにした。オープンにして走ったことのない名淵は、目を丸くして幌を巻き上げる動作を見つめていた。そのときの間抜けた顔が目に浮かんだ。

「そんなに楽しいのかい」

笑いを見咎めた名淵が憮然とした声を出した。

「いいえ、楽しくはないわ。この道に入るのを二十六年間避けていたのよ。楽しいはずがない。悪いことが待ち受けているような気がして、不安になってくるのが正直な心境よ」

笑いを納めて真剣な声で答えた。名淵が、はなじらんだ様子で肩をすくめた。白いマウンテンパーカーを着込んだMにも風の寒さが伝染する。大きくくしゃみをすると、今度は名淵が笑った。他愛ないやり取りが楽しかったが、不安は去らない。緩いカーブを曲がりきった先の直線道路に駐車してある黒塗りの車が見えた。巨大なカラスがうずくまっているような凶々しさを感じる。チハルが愛用するゲレンデヴァーゲンに間違いなかった。ベンツの四輪駆動車に乗る者は市にもいない。昨夜の叱責の声が甦った。あのときチハルは、進太が死の迷路を彷徨っていると言つて責めたのだ。死を連想させる黒塗りの車体が見る間に大きくなる。擦れ違う時に車内を見上げたが、誰もいない。言い知れぬ不安だけが肥大する。

「昨夜、隣室から怒鳴りつけたチハルの車よ」

耐えきれずに名淵に告げた。名淵が振り返って黒い車体を見つめた。

「凄い車に乗ってるね。誰も乗っていないようだが、どうしたんだろう」

視線を戻した名淵が、素っ気ない声で言った。

「チハルはクレー射撃が趣味なの。獵期に入ったから、きっと生き物を撃ちに来ているのよ」

答えた声が冷たかった。別にチハルに敵愾心を持っているわけではないが、マニッシュな態度と行動には、つい眉をひそめたくなる。暴力志向が露骨に現れているようで不快だった。そんなチハルに進太を委ねている自分が歯がゆくてならない。たとえ、ショック療法だと割り切ってみても、リアクションを考えると心が痛んだ。Mには暴力が発散する匂

いが耐えられないが、それに惹きつけられる人の気持ちも分からなかつた。恐らくMが追い求めてやまない、闇に溶け込む漆黒の炎と同様、悲しさに打ち勝つ希望を夢見させるのだろうと思う。それを死の迷路と呼ぶなら、彷徨つてゐる進太自身が出口を見付け出すしかなかつた。誰だって、いつも別れ道に立つてゐるのだ。

Mは暗い気持ちを抱えたまま、築三百年の屋敷に続く私道に向けてハンドルを切つた。崩れかけた長屋門を潜り抜けた途端、目に映つた光景は往時とは比べものにならなかつた。二十六年間の歳月だけが、荒廃しきつた屋敷を代表してゐた。何の感傷も浮かびはしない。枯れきつた庭の中央にあるモクセイと、松の巨木が胸を張り、成長の歴史を主張しているようだ。モクセイの下にMG Fを止めた。エンジンを切ると辺りを静寂が包み込んだ。

「凄い、とにかく凄いね。一言で言えば榮華の跡だ。築三百年の屋敷とはよく言ったもんだよ。重層した歴史が風化する直前のきらめきがある」

名淵が興奮した声で言ってドアを開けた。胸にぶら下げたライカM6のファインダーをのぞいて、何回となくシャッターを切る。穏やかに晴れ渡つた日射しが、廃墟を情け容赦もなく照らし出していた。

「あれ、こんなものが落ちていたよ」

松の根元に届み込んで、崩壊した母屋の茅葺き屋根を写してゐた名淵が立ち上がって声を掛けた。三重になつた麻縄の輪を摘んだ左手を掲げる。口元に卑猥な笑いが浮かんでいた。縄は清美の足を縛つてゐたものだ。

「ねえ、Mさん。せっかくだからモデルになってくださいよ。廃墟に浮かび上がる美しいヌードが撮りたい。短い縄だけど十分縛れますよ」

甘えるようなバリトンで懇願した。運転席に座つたMの眉が曇る。突飛な申し出が、さんざん縛られ責め苛まれた二十六年前の記憶を呼び覚ます。頼みを拒絶しようと思った。車から降り、三メートル先の名淵を睨み付けた。頭上に松の枝が張りだしてゐる。素っ裸で後ろ手に縛られて、吊り下げられたことのある枝だ。軽いめまいが襲い、微かに銃声が聞こえた。チハルが発砲したのだと思った。この瞬間に無抵抗な生き物が殺されたのだと確信した。悲しみが全身に満ちる。銃声に促されたように、マウンテンパーカーを脱いだ。セーターとジーンズを脱いで全裸になる。いつの間にか、名淵が背後に立つた気配がした。うなだれて両手を背中に回すと縄の感触がした。暗い意識が後ろ手に縛られたことを告げた。熱く燃え上がつて來た股間が、過去を現在に引きずり込む。

清美はしゃがみ込んで沢を見下ろした。シダとササに覆われた細い流れが五メートルほど下った谷間に見える。沢沿いに下っていけば、必ず街道に突き当たるはずだった。だが、沢に降りる斜面は意外に急峻だ。後ろ手に縛られていてはバランスも取れない。清美はしゃがんだまま蟹のように這い降りることに決めた。そっと右足を伸ばして足場を探り、膝を屈伸させて重心を移動する。大きく開いた剥き出しの股間をササの葉がなぶる。背筋がぞつとするが、歯を食いしばって這い進んだ。二メートルほど降りたところで、犬の吠え声を聞いた。反射的に全身が緊張する。その拍子に、大きく踏み出した右足が赤土で滑った。尻餅をついた途端にスニーカーが脱げ落ち、沢筋に転がっていった。仕方ないので左足で足場を確保する。犬の吠え声に追い立てられるようにして這い進み、最終の岩棚までいって立ち上がった。わずか五十センチメートル下に沢水が流れている。気温も低く裸身が寒い。転がっているスニーカーを拾おうとして、岩棚から山沿いの地面に降りた。素足が冷たい地面を踏んだ瞬間、足首が千切れるほどの激痛が襲った。電撃に打たれたように身体が後ろ向きに倒れる。縛られた手に岩が当たると同時に高い音が響き、右足に激痛が走った。全身に痛みが走り回り、意識が遠のく。遠のいていく意識を繋ぎ止めようとして、仰向けになった身体の向きを変えた。再び全身に激痛が襲う。涙が溢れ、鼻水がこぼれた。霞む目で右足を見ると、大きく開いた股間の先で、不気味にねじ曲がっている。足首から吹き出している真っ赤な血が見えた。また意識が遠のいていく。犬の吠え声がすぐ側で響いた。

「ダメッ、クロマル、やめるんだ、ダメッ」

命じた進太の声が震えていた。小さな岩棚の上に上半身を預けて倒れている清美に、なおもクロマルが吼えかかった。きつく両目を閉じた清美のまぶたが痙攣している。裸身全体が激しく震えていた。

「トラバサミを踏んだ拍子に倒れたんだ。大腿骨も折れている」

チハルの冷たい声が落ちた。

「ねえ、キヨミ先生を助けてやってよ。痛そうで見てられない」

青ざめた頬を震わせて進太が叫んだ。チハルは黙ったまま首を横に振った。清美は沢水を飲みに来るイノシシを狙ったトラバサミの罠にかかった。重い金属の歯は、きっと足首を碎いてしまっただろう。突然襲い掛かったショックと激痛で仰向けに倒れた。だが、後ろ手に縛られた清美はバランスが取れない。トラバサミに繋いだ鎖も足首を放しはしない。全体重が右足にかかり、脚をねじ切るようにして大腿骨が折れたのだ。命を助けるには救

急車を呼ぶしかなかった。トラバサミを外して運び上げ、再び土蔵に監禁したとしても、処置しようがない。

「進太ちゃん、お願ひ。救急車を呼んで。お願ひだから、私を助けて」

思いがけない大きな声が響いた。チハルと進太が揃って清美を見下ろす。清美は蒼白になった唇を震わせながら進太を見つめている。無惨に開いた股間で陰毛が風に揺れていた。もはや寒さなど感じる余裕もなく、小刻みに裸身を震わせているだけだ。眉間に寄せた二本の筋と、素肌に浮き出た脂汗が痛みの激しさを訴えている。

「キヨミ先生が泣いて頼んでいるよ。ねえ、チハルの携帯電話で救急車を呼んでやろうよ。放っては置けないよ」

進太が哀願した。大きな目から涙が溢れている。もちろん放っては置けない。トラバサミの罠を確かめに、いつ獵師がやってくるか分からぬのだ。チハルは射殺することを決意した。肩に吊ったレミントンを下ろし、頬付けにして構える。狙いを付けられた清美の顔が恐怖に歪んだ。

「殺さないで、お願ひ、殺さないでください。片足がなくなても恨みません。命だけは助けてください。お願ひです」

裸身を震わせて清美が命乞いをした。縄目から飛び出た乳房がわななっている。

「ダメッ、チハル。撃たないで。先生を殺さないで」

進太が絶叫した。チハルが進太の目を見つめた。冷たい声で問い合わせる。

「そんなに少年院に行きたいのか」

問い合わせられた進太が驚愕する。

「えっ、チハルはどうなるの」

答えを保留して問い合わせてきた。

「私は絞首刑だ」

素っ気なく答えた。進太の顔が泣き笑いのようになる。

「イヤダ、そんなのは嫌だ。先生を殺してください。先生、これは安楽死です」

進太の叫びが谷間にこだました。同時に清美の裸身がのたうち回る。

「ヤメテッ、タスケテッ、あんたたちは人殺しよ。イヤッ、殺さないで」

痛みを忘れて叫び、のたうち回る清美を見下ろして、チハルが銃口を下げた。スーツのポケットから青い実包を取り出し、改めて薬室に入れる。

「肉の碎け散る散弾は使わない。一発で殺してやるよ。美しい肉体への、私なりの情けだ。」

進太は人を殺す瞬間を目を開いてよく見なさい」

独り言のように呼び掛けてから、チハルが引き金を引いた。かん高い銃声が響き渡り、清美の胸に大きな穴が開いた。多量の血が流れ出し、白い裸身を真っ赤に染める。横にいる進太が口を押さえてしゃがみ込み、全身をひきつらせて嘔吐した。

「さあ、進太。仕事はまだ終わらないよ。死体を車に引き上げて砂防ダムに沈めるんだ」

冷たく言い残してチハルが車に向かった。見上げた進太の目に紫紺のスーツを着た後ろ姿が見えた。勝者を愛でるように、クロマルが尻尾を振り立てて後に続いている。進太の目から改めて涙がこぼれた。殺された清美ではなく、殺したチハルがたまらないほど悲しく見えた。

Mは松の木の下に素っ裸で直立している。後ろ手に縛った縄尻が頭上の松の枝に結びつけられていた。つま先立ちで吊り下げられた苦しい姿勢を、もう三十分近く強いられている。地に足を着けることもできなくはないが、後ろ手をねじ上げられる苦痛に耐えなければならなかった。そんなMの姿を名淵はライカで二十ショットも狙った。今はMG Fの運転席に座って、ファインダーからのぞき込んでいる。立ったまま失禁する決定的瞬間を狙っているのだ。Mには愚かしい行為としか思えない。遠く響いた銃声に負けて、裸になつた自負心が慘めだった。だが、求められた官能には応えねばならない。それがこの屋敷で二十六年前に学んだことのすべてだった。

「もう、耐えられそうにないわ」

悩ましそうに尻を振って訴えてみた。カメラを構えた名淵が身を乗り出す。うつむいたまま顔を左右に振った。長い髪が乳首を撫でる。股間を小さく開き、心持ち腰を前に出した。ウッと声に出して息むと、陰毛の間から一筋の水脈が飛んで地上に落ちた。放尿を続けながらうなじを上げ、名淵の構えるレンズを見つめた。見られることで、確かに黒い快感が下腹の底で燃えている。だが、新鮮味はない。使い古しのぼろ雑巾のような感じだ。このまま脱糞したい衝動を必死に耐える。変態女が何を我慢しているのかという、チハルの嘲笑が聞こえてくるようだ。もう、何を耐えているのかも、正確には分からぬ。ひたすら老いが怖いのかも知れなかった。

「凄い、Mさん、凄く美しい。最高のショットを納めさせてもらいました。ありがとう」

名淵の興奮したバリトンが響いた。何を見ても凄いとしか形容できない、いつか聞いた声と同じ調子だった。人はこうして狂気に染まっていくのかも知れない。悲しさが募る。

「さあ、一緒に裏の方を探検してみましょうよ」

ライカを胸に下げて近寄ってきた名淵が、松の枝に吊った縄尻を解きながら提案した。

Mは黙ってうなだれている。濡れた股間が不快だった。

「返事をしなくとも、縄を使えばついてくるしかないですよ」

答える様子のないMに名淵が妙な宣告をした。縛られた後ろ手から垂れた縄がいきなり股間を潜った。おどけた調子で名淵が前に回り、跨がせた縄の端を持って力いっぱい上に引いた。Mの口から悲鳴が漏れる。さらつく縄が強烈に股間に食い込んだのだ。名淵が縄を曳いて歩き始める。縄の痛みをこらえ、Mも名淵についていかざるをえない。性を責めるアイデアは無限にあると感嘆するしかなかった。麻縄に擦られた肛門が痛がゆさに泣く。縄を噛んだ陰門がじっとりと濡れてきたのが分かった。新たな官能を高めるために、尻を突き出し、腿を閉じて内股で歩いた。淫らな縄が性を責め続ける。豊かな尻が艶めかしく揺れた。白い双臀に残る無数の鞭痕が赤黒い痣になっている。名淵に責められた昨夜の証だ。

「あれっ、土蔵の扉が開け放した。廃墟とはいえ不用心が過ぎる」

いかにも検事らしい言葉を残して、名淵が土蔵の前にMを曳き立てていった。土蔵の中で挑みかかる魂胆が透けて見えておかしい。ズボンの股間の部分が膨らんでいる。官能の予感が急激に高まっていく。

「中はずいぶんきれいだよ。当然、がらくたもある」

声に促されてMも土蔵に入った。中央の太い柱がまず目に飛び込む。柱の前に散乱した衣類が異様な雰囲気を伝えた。しゃがみ込んで衣類を点検していた名淵の肩に緊張が走った。すぐに立ち上がって室の隅に置かれた自転車に近寄り、無惨に曲がったリアタイヤを調べる。Mも肩越しにのぞき込んだ。リアフレームに書かれた清美の名前が衝撃を与えた。即座に名淵に事情を告げた。ひとしきり土蔵の中を調べ回してから、名淵が口を開いた。険しい表情をしている。

「状況から見て、進太君の担任の先生が事件に巻き込まれた確率は非情に高い。恐らく、自転車に乗っているところを車に追突されたようだ。加害者は事故を隠蔽しようとして先生を拉致した。下着は見付からないが、この土蔵で裸にして監禁したことは間違いない。自転車の横にあったバケツに、排尿した痕跡がある。麻縄の束とランタンも残っている。僅かだが、床に血痕も見付かった。きっと怪我をした者がいるんだ。先生は犯人の隙を突いて逃亡したと思われる。尿はまだ新しかった。昨日・今日に起こった事件だ。先生の救

出は時間との勝負になる」

発見した事実に基づいて名淵が推論を下した。論旨に間違いはないとMも思った。進太の顔が脳裏に浮かび、説教している清美の顔に変わった。路肩に駐車していた黒いゲレンデヴァーゲンと銃声が清美の顔に覆い被さる。死のイメージが目の前に広がる。有り得ないことだが、有り得るかも知れなかった。

「参ったな、銃まで絡んでいるよ。これは散弾の実包だ。十二番口径の鉛玉がひとつ入った強力なやつだ。獣獵にしか使わない」

屈み込んで室の隅を捜していた名淵が、青い散弾のシェルを摘み上げてMに見せた。

「チハルだわ」

「さっき見たゲレンデヴァーゲンか。急ごう、手遅れになる」

思わず口走った言葉に、名淵が過激に反応した。真っ先に外に駆け出す。後ろ手に縛られたMも、よろけながら一心に走った。

「さあ早く、助手席に乗ってくれ。縄を解く暇も、服を着せる時間もない。とにかくゲレンデヴァーゲンを追うんだ」

MがMG Fにたどり着くと同時に名淵が叫んだ。座席に追いやるようにしてドアを閉め、運転席に回った。素早くエンジンをかけ、凄いスピードで発進する。後ろ手に縛られた手がシートに押し付けられて痛い。ゲレンデヴァーゲンが駐車してあったところまで来たが、もう影も形もない。路上に降り立った名淵が、荒れ果てた路面の端を丹念に見て回る。Mがドアを開けようとして、後ろ手で苦闘していると、背後から声が飛んだ。

「やっぱりここで事件が起こったんだ。ほら、これは女性の下着だろう」

名淵の手が黒いレースのTバックショーツを広げている。見つめたMの頬が赤く染まった。確かに女性しか穿かない下着だ。

「チハルの家に直行する。どっちの方角に向かえばいいのか教えてくれ」

高ぶった声で名淵が問い合わせてきた。即座にMが答える。

「蔵屋敷の先のドーム館よ。ここから二十分の距離」

「さあ、いくぞ」

勇ましい声を残して、名淵がアクセルを踏んだ。往路とは逆に素っ裸のMには風が寒すぎるくらいだった。

「進太はバイクに乗って帰りなさい」

終始無言のままゲレンデヴァーゲンを運転してきたチハルが、ドーム館の玄関先に車を止めて口を開いた。助手席で硬くなっていた進太の緊張がやっとほぐれる。

「いや、僕もチハルを手伝う」

「足手まといだ」

消え入りそうな進太の声に、チハルがにべもなく答えて地上に降り立つ。車内に取り残された進太の喉元を、また強烈な吐き気が襲った。思わず口元を両手で覆うと、血まみれの死体がまぶたの裏に浮かび上がった。右足が不自然にねじ曲がった無惨な死体だ。足首にはトラバサミの罠が食い込んでいる。罠に繋がれた太い鉄の鎖が獲物を非情に拘束している。素っ裸で後ろ手に縛られ、大きく股間を開いた死体をチハルが青いビニールシートで覆う。やっとの事で罠を外した足首を、今度はワインチのワイヤーで縛る。再び沢を上がっていったチハルが携帯ワインチを操作すると、しゃがみ込んだ進太の目の前で清美的死体が向きを変え、逆さまになって斜面を上がっていった。見つめる進太は、全身を震わしてしゃくり上げ、何度も嘔吐した。吐くものが無くなり、苦い胃液だけになっても、吐き続けた。とうに涙は涸れ果てていたが、目は熱くキリキリと痛んだ。死ぬほどの大不甲斐なさを感じたが、どうしても腰が上がらない。真っ白になった視界を後悔が真っ黒に塗り込んでいく。昨日の朝に時間を戻したいと、痛切に願った。

「僕はどうしたらいい」

チハルの後ろ姿に縋り付くように問い合わせた。ついさっきの生々しい光景が消え失せ、玄関ドアのノブを握ったチハルが振り返った。紫紺のスーツが泥と血で汚れている。

「帰れと言ったはずだ」

短い答えが返ってきた。進太が泣きべそをかく。

「チハルはどうするのさ」

再び進太が問い合わせた。チハルが睨み返す。

「死体に重りを付けてから、砂防ダムに沈める」

事務的に答えてドアを開けた。背後で進太が車を降りる気配がした。チハルは真っ直ぐ玄関ホールに入っていった。問い合わせてきた進太の真意は痛いほどよく分かる。今後の生き方について尋ねたのだ。寄る辺無い不安な気持ちを、チハルと分け合ってみたい気持ちも分かる。だから、死体遺棄を一緒に手伝いたいと言ったのだ。しかし進太はもう、チハルと同様、たった一人で判断し、決断していくべきだった。それなりの修羅場は潜り抜け

たはすだ。さらなる修羅に向かうのか、修羅を希望に変えるのかは、進太が選ぶ問題だった。そしてチハルには、着実に修羅の道を進んでいる自分の後ろ姿が目に見えるようだ。突然、バイクのエンジン音が轟き、すぐ遠ざかっていった。進太が自分の道を歩み始めたらしかった。チハルは静かな足取りで二階に続く階段を上った。

重りになる石が沢山入るメッシュのトートバッグを持って戻ってきたときには、もう進太の姿はなかった。微かな寂しさがチハルの背筋を這う。胸を張って空を見上げた。正午の太陽が視力を奪う。目尻に涙が滲み、鼻孔がツンッと痛んだ。助手席にバッグを置いて、無造作にゲレンデヴァーゲンを発進させた。荷物室の死体が揺れ、小さく音を立てた。フロントガラスの隅に、坂を上り詰めてきた緑色のオープンカーが飛び込んできた。目の前でタイヤを鳴らし、急停車する。山土が赤い埃になって舞い上がった。ハンドルを握ったダークスーツの男に見覚えはなかったが、Mの裸身が助手席に見えた。チハルの口に苦笑が浮かぶ。昨夜サロン・ペインで痴態を晒していた二人が、そのまま殴り込んできた風情だった。スーツ姿の男が意外に敏捷な身ごなしで運転席から降り立つ。首から提げたカメラがユーモラスだ。

「特捜検事の名淵です。司法警察権に基づいて車を捜索します。荷物室を開けて中を見せてください」

よく響く低い声がチハルの耳を打った。理由は分からなかったが、捜査の手が伸びてきたことは事実だった。背後の荷物室には清美の死体がある。素っ裸で射殺された無惨な死体だ。どう足搔いても言い逃れはできない。顔が蒼白になっていくのが分かった。ハンドルを握った手に力が入る。何とか平静を保とうと、MG Fの助手席にいるMを見つめた。中腰になった裸身がドアのノブを後ろ手で探っている。背中で縛られた両手が見えた。滑稽な姿だった。チハルの胸に余裕が生まれた。

「素っ裸の変態女を連れた検事さんが、何の容疑で捜索するのかしら。土・日曜日の連休を変態ごっこで楽しんだほうがお似合いだわ」

ドアを半開きにして問い合わせながら、左手を伸ばしてレミントンM1100を引き寄せた。

「清美さんへの当て逃げと、拉致監禁の容疑です。車を降りて、荷物室を開けなさい」

名淵があごを引き締め、毅然とした声で告げた。

「そんなに日曜日が迎えたくないのなら、ずっと土曜日のままにしてあげるよ。ただし、変態女と名残を惜しむ時間はない」

楽しそうに答えたチハルが、ゲレンデヴァーゲンから飛び降りる。左手に握ったレミントンの銃口を名淵に向け、頬付けして構えた。

「ヤメテッ、やめなさい。キヨミ先生を解放すれば、罪もまだ軽いわ」

Mの怒り声が響き渡った。シートの上に立ち上がってチハルを睨みすえる。後ろ手に縛られた腕を無念そうに振ると、豊かな乳房が震えた。銃を構えたチハルが僅かに顔を横に向けてMを睨む。

「出しゃばり女が、もっともらしいことを言うんじゃない。清美は素っ裸で後ろ手に縛られて荷物室に転がっている。もっとも、射殺したから、Mのような無駄口を叩く心配はない」

チハルの一言がMと名淵の身体を凍り付かせた。風が立ち、Mの裸身を冷たさがなぶる。

「とにかく、銃を捨てて投降しなさい。例え今言ったことが事実でも、私を殺して罪を重ねる必要はない。法にも情けはある」

名淵が掠れた声で叫び、首に下げるライカを構えた。透き通るレンズが巨大な目のようにチハルを見つめる。チハルは慎重に照準をのぞいた。銃口を下げ腹部を狙う。二人の距離は三メートルと離れていない。

「私に情けは要らない。これまでに四人も射殺したんだ。人を殺すのは本当に疲れる。だから、もう少しで完璧に疲れ切ることができる。罪を重ねる必要はあるんだ」

ファインダーに映るチハルが、うんざりした声で言った。名淵は白く浮き上がったブライトフレームの中心にあるチハルの像を一心にのぞき込む。少し下がった銃口の先に端正な顔があり、紫紺のスーツを着た均整の取れた身体がある。その後ろに枯れきった山塊が見えた。一切が静まり返り、鮮明な像を結んでいる。名淵は冷静にシャッターを切った。続いてチハルの指先が微かに動き、銃口から真っ赤な炎がほとばしった。

「ウワッ！」

絶叫を上げて走り寄ったMの前に、腹を押された名淵が倒れかかる。脚に温かい血しぶきが飛んだ。構わず全身を躍らせてチハルにぶつかっていく。体当たりされる寸前でチハルが身をかわし、脚を飛ばしてMの足を払った。もんどり打って裸身が倒れる。

「憎らしい女だ。だが、お前までは殺しはしない。私は疲れた。変態らしく寝ているがいい」

無様に倒れたMの縄尻を掴んで、チハルがつぶやき続ける。荒々しい手つきで倒れた身体をうつ伏せにして、後ろ手の縄尻を足首に縛り付けた。逆海老の姿勢で縛られた裸身が

屈辱に震える。無理をして頭をもたげ、チハルを見上げた。背後に倒れ伏した名淵が絶え間なくうめき声を上げている。

「Mに看取られて死ぬのは悔しいが、こうして責め上げてやれば諦めもつく。さあもっと、淫らな尻を振って悶えて見せてよ」

チハルの静かな声が頭上から落ちた。見上げる顔の前に汚れきったジャングルブーツが飛んできた。チハルが銃を持ってMの前に座った。銃口を口に含み、足を投げ出して引き金に足指をかけた。

「チハル、やめなさい。死んではダメッ」

声を振り絞ってMが叫んだ。チハルがMの顔を見下ろす。逆海老に縛られた裸身が全身を身悶えさせて叫んでいる。生のエネルギーが目にまぶしい。まるで官能の極みで打ち震えているように見える。Mの陰門はきっと、愛液で濡れそぼっているに違いないと思った。ひそかな羨ましさが込み上げ、チハルの口元に微笑が浮かんだ。足指に力を入れて引き金を引いた。

ズガーン

銃声が響き渡り、チハルの頭が碎け飛んだ。紫紺のスーツに身を包んだ首の無い身体が目の前に倒れている。Mの裸身が戦慄し、激しく嘔吐した。大きくしゃくり上げた瞬間に、逆海老に縛られた後ろ手の繩が抜けた。痺れきった両手を伸ばし、倒れたチハルの足をさすった。素肌の温かさが指先に伝わる。不思議に涙は湧いてこない。がらんどうになった身体を悲しみが満たした。

「Mさん、早く救急車を呼んでください。苦しくて、もう死にそうだよ。早く、早く救急車を呼んでくれ」

背後で哀れな声が聞こえた。思えば声は、ずっとMに呼び掛けていたような気がする。空しい煩わしさが押し寄せてきたが、気力を振り絞って足首の繩を解き、よろよろと立ち上がった。無気力に振り返ると、乾ききった地面を大量の血で黒く染め上げた中心に名淵が横たわっている。裂けた腹からはみ出た内蔵を手で押さえて、泣き声で訴え続けている。

「救急車を呼んでください。さあ、早く。明日は日曜日だ、Mさんも病院に付き添ってください。お願いします。まだ死にたくない」

確實に死が迫った名淵が必死に訴える。官能のかけらも感じられない貧相な声だ。情けなかった。情けなさに身を震わした瞬間、坂の下からバイクのエンジン音が響いてきた。Mはチハルの首のない死体に近寄り、握っていたレミントンM1100を奪った。名淵の

前に戻って、苦痛に歪んだ顔を見下ろす。薄目を開いた名淵が縋るようにMを見上げた。

「検事さん、チハルと同じように、あなたにも日曜日は要らない。私が楽にして上げるわ」

落ち着いた声を聞いた名淵の目に恐怖が浮かんだ。Mは大きく目を見開いて真っ赤に膨れ上がった恐怖を見た。無造作に引き金を引く。手に持った重い銃が跳ね上がり、銃声が轟く。名淵の頭が碎け散って、首のない死体が残った。進太のバイクが目の前でUターンしていく。

「バカヤロー」

低い叫び声がエンジンの音に混じって遠ざかっていった。一切を見届けた進太がどのような感情を抱いたか、Mには分からぬ。だが、もうチハルに頼ることはできないのだ。たまさかの父権は潰えた。後は進太が自分の足で立ち上がるしかない。いくら僥ぐとも、希望はちっぽけな個人の身体の中にしかないのだ。

また風が立って、冷たい空気が裸身をなぶった。気圧配置が換わり、木枯らしが吹き荒ぶような予感がした。

十二月の下旬に雪が積もった。昼前から粉雪が舞い続け、午後からは風を伴って激しく降った。雪は深々と積もり、夜になってやんだ。夜半には月が上がり、白々とした光が山地全体に満ちた。底冷えのする外気が室内にも忍び寄って来る。歯科医は母屋の二階からまばたきもせずに、異数の世界を見下ろしていた。この冬初めての雪景色だ。蔵屋敷の屋根の様子では、二十センチメートルほども積もっている。リビングの高窓に明かりが灯っていた。午前三時が近いというのに、Mと進太はまだ話し合っているようだ。あの凶々しい事件の後、進太は登校するようになっていた。そして、Mと二人で話し合う夜が続いている。傍目には家族の団欒が戻ってきたように見えるが、歯科医の気は重かった。Mと進太の間には、まるで真剣勝負をしているような緊張感が漂っている。ことにMは、名淵検事を安楽死させたという主張が通らなかったときから、悲壮感さえ漂わせて進太と対峙していた。

女教師と検事の殺人事件は、被疑者死亡のまま書類送検されて事件後三週間で完結した。自殺したチハルが一切の責任を背負って地獄に墮ちたのだ。だが、幾つかの疑問が残った。清美が追突され、拉致された晩のチハルのアリバイは完璧だった。祐子とチーフ、それに声を聞いたMの三人の証人がいる。チハルが清美の自転車に追突できなければ、拉致監禁の動機も、殺害する理由もない。ゲレンデヴァーゲンの荷物室にあった素っ裸で緊縛された射殺死体だけが事実として残った。また、肝心の凶器も発見されなかった。Mが名淵を安楽死させたと言って、警察に自首した後の現場から、レミントンM1100は忽然と無くなっていた。結局、名淵が死の寸前まで、愛用のライカM6で撮影した写真が、すべてを物語る証拠となった。そこには、築三百年の屋敷の廃墟で後ろ手に縛られたMの裸身があり、精悍な表情で銃を構えたチハルの最期の姿もあった。警察は検事とMの愚行に目をつむって捜査を終了させた。例え獵奇の匂いがする疑問が残っても、損失を負う者はいない。何よりも、名淵検事の名誉が優先された。殉職者を鞭打つことは許されなかった。その間、進太は貝のように口を閉じて沈黙を守った。築三百年の屋敷がある沢に無数に残されたモトクロス・バイクの轍の跡は、捜査員全員の目に入っていた。しかし、事件を単純に解決する必要のあった彼らは、中学校二年生への尋問を回避した。誰もが獵奇の匂いを忌避したのだ。

歯科医の目にも、進太は事件の重大な鍵を握っている様子に見えた。落ち着きの無くなつた、荒んだ態度を危ぶみもした。だが、Mが接触を続けるうちに、進太の様子も変わつてきた。いまは、毎晩のように二人で蔵屋敷のリビングにこもって話し合いを続いている。Mは初めて、自分の体験してきたことを進太に話し始めたらしかった。自らの身体で突き当たり、理解してきた事実を、語り部のように進太に伝えている。時としてそれは、今夜のように夜明け近くにまで及んだ。歯科医は微笑みを浮かべて蔵屋敷の高窓を見下ろした。幾ばくの淋しさを感じたが、何よりも雪景色がうれしかった。今夜はもう眠れそうにない。そっと窓辺を離れて納戸に向かった。

畳三畳の納戸の一番奥で、歯科医は棚に置いてある黒い行李を床に下ろした。無造作に蓋を開くと、寒々とした蛍光灯の明かりの中に埃が舞つた。行李の中には古い登山道具が収納してある。見つめる歯科医の目が輝き出す。寒さに震える手でピッケルを握つた。硬い檻材の感触が手に優しい。無骨な登山靴とアイゼンも取り出す。さすがにアイゼンの歯は赤錆びていた。どれもが懐かしい、医学生のころの大切な品だ。この装備を身に着けて何度も谷川岳に挑んだものだ。いずれは息子のピアニストと一緒に山に登りたいと思い、大切に行李に仕舞つたことを覚えている。だが、ピアニストは山に関心を示さなかった。息子と一緒に山に登る道もあったと思うと、目頭が熱くなる。だが、失ってしまった時間も、死んだピアニストも帰っては来ない。歯科医は黙々と登山の支度をして夜明けを待つた。全身に悲しさが満ちる。

真っ青に晴れ渡つた空に朝日が輝いていた。一面の雪景色が思う存分陽光を反射している。黒いゴーグルで目を守つた歯科医は、固く凍り付いた木橋の上に、アイゼンを付けた登山靴を踏み出す。雪に食い込む歯の音が心地よい。標高八十メートルほどの浅間山でも、今朝は立派な雪山だった。歯科医は慎重にピッケルを突き立て、雪に覆われた山道を登つていった。

山頂から見下ろす雪晴れの山地は光の洪水だった。真っ白な雪原が峻険な山峠を美しく覆い隠している。この瞬間、雪は時間さえ搔き消したかに見える。累々と堆積した汚れきった歴史を、白一色の原初の色が塗りつぶしてくれているのだ。北側の蔵屋敷も、西のドーム館も、東の学校も、一面の銀世界で見分けることができない。恐らく、見渡すことのできない築三百年の屋敷の沢も、清浄な白が覆つてゐるに違ひない。

「ウツ」

思わず歯科医の口に声が溢れた。声は言葉にならず、ただの音として雪原に落ちた。堪らない懐かしさと優しさが腹の底から込み上げ、音となってこぼれ落ちたようだ。

「思い残すことはない」

今度は音が意味を持った。言葉を口にした瞬間、さも憎々しいことを口走ってしまったような悔恨が脳裏を掠めた。もう、言葉も思念も要らなかった。歯科医は口を真一文字につぐんで、河童神社の小さな祠の前に進んだ。背負ってきたリュックを下ろしてしゃがみ込む。リュックの中から二体の河童人形を取り出し、雪の上に並べた。これまで奉納したクレードールと違い、立派に焼き上げた大振りの磁器人形だった。相変わらず河童が寝そべった姿だが、ユーモラスな姿態が雪の中に映える。妖怪の河童に雌雄があるかどうか知れないが、二体の人形はちょうど素裸の男女に見えた。歯科医は思わず目を見張り、二体の河童人形を見た。笑い掛けられたような気がしたのだ。にこやかに微笑み掛ける河童の顔がMとピアニストの表情に見えた。続いて歯科医と妻の表情に変わる。じっと見つめると、進太の顔が浮かび上がった。せっかくのときめいた気分が暗くなってしまう。首を左右に振ってから、目を覆った黒いゴーグルを外した。途端に両眼を光の洪水が襲った。希望に満ちた黄金色の輝きだった。いつしか進太はMの真意を知り、自らが生きる道のしるべにできるかもしれない。そのちっぽけな真実が芽を吹き、育っていくことが残された希望だと思った。だが、失われた希望に比べると、それは遙かな将来に向けて夢を繋ぐことだ。決して見届けることはできない。長く生きすぎてしまった気がした。急に悲しさが込み上げてきたが、涙を押し止める。祠の扉に手を伸ばして大きく開け広げた。白い光が黒光りのするレミントンM1100を浮き上がらせた。背筋が寒くなったが、凶々しい凶器を両手で握った。あの日、ここから事件の一部始終を見てから山を下り、Mが犯した罪の証拠を持ち去ってきて本当に良かったと思う。そのお陰で、次の世代に夢を繋ぐことができたのだ。冷たい銃身が愛おしくてならない。ドーム館の前に転がっていた、二つの首のない死体が脳裏に甦った。もうじき清浄な雪の上にもう一つの首無し死体が横たわるのだ。そして、ちっぽけな希望だけが確実に残る。雪原は明日には溶け去る。だが、残された希望は地中に染み込み、ゆっくりとこの山地に染み込んでいくはずだった。

歯科医はにこやかに笑って立ち上がった。大きく胸を張って、白一色の山地をまぶしそうに見渡した。

完